
ブロックバスター・オンライン

耀若俊和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ブロックバスターオンライン

【NZコード】

NZ0368Z

【作者名】

権若俊和

【あらすじ】

“世襲エリートを狩る超能力者の前にロボットが乱入。混沌が吹き荒れる！”

金持ちエリートに憎悪を抱く深大寺達はD「毒島により、超能力を得てエスパー・テロ組織を結成。復讐すべく、エスパーのみ融通されたエスパー格差社会の完遂を目指む。

……しかし、人間と同じ体格のロボット＝テクノドゥル〔TD〕5機が阻止すべく参上！遠隔操作するのは5人の高校生＝テツト、ヨシヒロ、コウスケ、ノリカ、ミヤ。更に驚く事に、テツトは「恵

まれた環境に縛る奴も、そいつら如きを妬む奴もクズ」と嘲笑し、
両成敗的な行動を取る！

プロローグ

「生まれながらに優位に立つている奴ってムカツキませんか？」「ピンク色のスーツといつ、ド派手な服装の男がいやらしく囁く。「ほらあ～、恵まれた環境なんてえ～、本人の努力で得たものではない訳じやないですか？」

それにおんぶに抱つこの人間ばかりがイイ思いをし、反対に我々庶民が不利な立場を味遭わ

なきやいけないなんて、オカシイと思いません？」

曲芸師や昔のお笑い芸人の如く、派手な色の服を着たその男が、悪徳商人めいたマシンガ

ントークを開け、胡散臭い笑顔でそう問うた。

日が暮れた浅夜の公園・冷水器前。

冷水器から出る水を飲んでいた高校生・【星渡徹人＝テツト】。ややオールバック気味に頭髪を逆立てた端整なフェイスの持ち主の彼は、自身の前に居る

派手なスーツの男の話を黙々と聴いていた。が、ふと飲むのを中断。「確かにそうだな……。否定はせん」

その反応ににんまりと不気味に顔を歪めるスーツの男。

「コテコテな揉み手を始め出す。

「ですよねえ～ん。今や、学歴エリートは金持ち生まれが独占！スポーツ選手も幼い時に

親に英才教育を叩き込まれたような人間以外なれいアリサマツ！未だに根強く残る」

「ね～、何ともまあ、夢の無い社会ですよ～。嘆かわしい、嘆かわしいや……」

男は表情をわざとらしく酸っぱくし、道化師の曲芸の如く、不気味にダンスしながらそつ、
謳い上げた。

かと、思いきや、突如物憂げな顔になる。

「 私、昔はサラリーマンをやつっていましたが、金持ち・口ネ持ちにコテンパンにされた
経験がありましてねえ……。ホント、酷いものですよん。……おつ
と、私言で申し訳あります
せんよん……」

テツトは無言で話を耳に入れる……。

「 ところで、具体的な割合、知っています？ 知らないならこれで調べてみますかよん？」

ケバースーツの男はポケットから携帯インターネット閲覧機を取り出した。

「 公式調査によりますとですねえ～」

男は勝手に調べ始め出す。

画面に親の年収と子供の学歴の比例グラフなどが出る。
「 去年＝西暦2023年の調査によると、7～8割がエリートの子
がエリートになっている
のだろう？」

男はテツトが告げた後、仰々しい拍手を送る。

「 はいはい～、その通りでございま～す」

「 ……で、結局何が言いたいんだ？ 愚痴を言つだけではあるまい」
ややオールバック気味に髪を逆立てた青少年・テツトは冷然と答
えを促した。

「 察しがいいですねえ～。流石、星渡テツト君、庶民生れながらも、
卓越した技術力と頭脳

を誇る存在です。知つてますよん。去年の全国ロボットコンテスト
優勝者でしょ？ 少ない

資金でやり繰りして造ったマシンで、金持ちライバルを蹴散らした

んでしょう？……ですが、

残念ですよん。貴方は素晴らしい技術力と知恵を持つていらっしゃいますが、社会は学歴、

家柄やコネで評価して、貴方のような存在を過小評価する。汚い、大人の社会ではロボッ

トコンテストのようにはいきません……」

テツトはさぞ興味なさ気に、冷然と鼻で笑った。

「フン、御託はいい。結論を言え」

「ふふふ、そうでした、そうでしたあー。このコンタクトの目的…

…エリート共に復讐する

チャンスを与えに来ましたよん。超能力を与えてねえ！」

テツトは驚く事も嘲笑う事もせず、淡々と真偽を問う。

「ほう、ならば実証して貰おうか……」

「ふふふ、勿論ですともおーん！」

ドきついピンク色のスーツの男は、ポケットからメモ帳をひよいと放り投げた。

次に掌を翳し、パントマイムのような拳動を始めるスーツの男。すると何と、勝手にメモ帳のページが捲れて行くではないか！それも、空中に停止したまま、まるで透明人間に捲られていくかのようだ……。

「ほう……これが超能力だと……」

「ええ。これは「無機的なモノ操る能力」ですよん……。我々の仲間になれば、欲しい能力を好きなだけ手に入れられますよん……」

「それは凄いな……だが、勧誘は断る。興味がない……」

淡白にテツトは一瞥を送り、背を向け、足を進めた。

「え？ これ、本当にいいんですかー！ 勿体無いですよーん！…後ろから響く男の声など、聞く耳持たぬテツト。

涼しい顔して公園から消え去った。

極自然にテツトは住宅街の道路を歩んでいく。

テツトはふと、ミッドナイトブルーの空を見上げた……。

「奴らが目指すのはエスパーが天下を取り、世襲エリートを下ろす……。優位に立つ存

在を入れ替えた、エスパー格差社会とでも言つものか……」

テツトはノートパットのようなデヴァイス＝スマートボードを手

にし、画面を開く。

画面には左右に分割されたタイプの「ゴーグルを装着した頭部、胸部にタスキ状に左上から右下へ斜めに巻かれたライフルを持つロボットの設計図面のようないちご」と、表記されている。

その画面の上部に、「TECHNOLOGY 001 COMMAND ORHON」

「あ、星渡君！」

透き通った女子の声。

セミロングヘアに、白色のカチューシャを掛けた、テツトと同じ学校の制服を着た女子

【鳳御矢＝ミヤ】が走って来た。

彼女は息を切らし、テツトの前に停止。

「さ、さつきの話、見てたんだけど……」

「む、鳳……。偶然この辺に居たのか」

「うん……買い物行く途中、偶然……。っていうか、やつらの……」

テツトは頷き、話を続ける。

「ああ、「奴ら」の一昧だ。まさか俺が勧誘されるとはな……」

「ロボットコンテスト優勝して、それなりに有名だからかな？」

「多分な……」

ふわりと、夜風が吹いて来た。

周辺の木枯しを踊らせ、テツトとミヤの髪や服を揺らす。

「しかし、断つてもあつたり帰すとは。もう少し勧誘を粘るかと思

つたが……」

「うん、言われてみれば……。どうしてだろ?」

ミヤは丸くて瑞々しい頬に人差し指をあて、疑問を浮かべる。

「それなりに人数が集まっているから、粘つてまでこれ以上、人材を欲しがらないのだろう」

「そつかあ。じゃあ、いよいよ動き出すのかな?」

「ああ、奴らの目指す、新たな格差社会の実現をな。だが……」

テツトはエツジの利いた眼を細める。

「……悪いが、エスパー格差社会は撃破だ……」

テツトは自身の持つ、Sボードを手元でクルリを回し、ガツシリそのデヴァイスを掴み直す!

EP・01 『ロボットVSエスパー』

01

テツトとミヤはある廃墟内にある、極秘裏に造られたラボラトリへ入室。

「ただいま~」

ミヤは室内に居る、3人に帰還の挨拶を伝えた。

その3人とは大画面テレビで特撮ヒーローのビデオソフトを夢中で見ている長髪の美男子【相馬美博】ヨシヒロと、スクワットしている後頭部を束ね、

チヨンマグを持つ青少年【瀬戸航助】コウスケと、爪を赤紫色に塗っている美女【楠法華ノリカ】である。

「あ、お帰りミヤ。星渡君も」

右肩に束ねた長い髪を垂らした、大人びた印象の女子生徒・ノリカが、ネイルのハケをネイル液瓶の上に置き、一番に言葉を返す。

「ああ」

テツトは淡々と挨拶し、ラボの居間内を歩み、空いているソファへ腰を落とした。

「皆、聞いてくれ。今日、俺は奴らにスカウトされた。勿論断ったがな」

ピタリとビデオを停止するヨシヒロは、穏やかな口調でテツトを見やる。

「おやおや、そんな事が……」

スクワットを止め、思わずずっこけるコウスケ。

「どわ！？…………ててて、マジですか！？」

ヨシヒロ・コウスケ・ノリカはテツトに注目する。

「断つてもあっさり向こうは逃がした……。つまり、既に必要な人員は整っているようだ」

「そう、だからそろそろ敵は動くかもって話……」

ミヤがノリカの隣のソファーにそう言いながら、小ぶりな尻を落とす。

「そつか、いよいよ戦うんだな、俺ら！」

「フフフ、待ちわびたよ全く……」

「せつかく、訓練したんだもんねえ！。暴れなきゃ 摘だわあ」

「ゴクリと息を呑み、じわじわと高揚するコウスケにヨシヒロ、ノリカ。

「…………そうだな、準備も長かつたからな

5人は結集までの経緯を回想する……。

遡る事、それは1年ほど前。

学内休憩時間。とある教室。

「はあ、微妙な点数……まあ、酷過ぎでもないんだけど」

そう落胆するのは中学時代のコウスケ。

微妙な点数のテストを取つたようだ。

「奇遇だね。僕もそんなトコさ」

無駄に爽やかな口調でヨシヒロがコウスケの隣にぬつと現われる。

「お、ヨシヒロもかあ」

「まあね！」

ヨシヒロはカツコ付けた感満載の珍妙なポージングを披露し、首肯。

「な、何だよそのポーズ……」

「コウスケは白けた表情でヨシヒロのポージングの意味を問う。

「これはイケメンヒーロー ポーズの練習だ。僕は将来アクションモノ中に活躍するイケメン俳優になる予定だからね」

「へえ、俳優かあ」

「そう、例えば……」

ヨシヒロ、空いている教室後部へ移動し、助走を付け、駆け出す。次いで、ジャンプ！ そのまま特撮ヒーローチックなカツコ付けて感じの飛び蹴りの形を

取つた。

「イケメンヒーローキーック！」

そう叫び、虚空へ飛び蹴りし、そのままスタッツと着地。両腕を広げ、体操選手よろしく、直立着地をした。

コウスケ、思わず拍手。

「おお、やるなあ。流石新体操部

「ま、高校からは演劇部をやるつもりだけどね」

「……でも、なれるかどうかは分かんないんだよなあ。嫌なこと言つちやうけど」

「コウスケは悄然と呟く。

「俺のサッカー部では今、スポーツエリートをブツ潰そつと猛特訓してんだ。だけど、勝てる気はしないんだよなあ」

「スポーツエリート?」

「ほら、ココ最近のスポーツ選手になれたり、学生のスポーツ大会で功績を残す奴って幼い頃から親にスポーツ叩き込まれた奴ばっかじやん?」

「ふむ、そういう話、よく訊くねえ」

「でもそれって、夢ねえじやんか。親に恵まれないとなれないなんてさ。だから、そのスポーツエリートに勝つて、スポーツに夢を与える為に猛特訓してる訳。けど……」

「現実問題、手強い。だから、諦めモードって訳かい?」

「そういう事。この前も、聖アスリート学園の連中にボロ負けしたんだよな」

「ああ、プロスポーツ選手を最も多く排出している学校だね?」「だから夢なんか持つても辛いだけだと思つて来出したんだよなあ。お前の目指す俳優業界も他人事じやないぜ? ああいつトコも金コネ持ちの方が有利とか言うじやんか」

「そうだねえ。最近一世タレントが増えているらしいし……」

「ほーんと、こりこり現実あると嫌になるよなあ。恵まれない環境に生れた奴はどうすりゃいいんだよって話。しそうがないと思うしかねえのかねえ?」

「コウスケは更に表情を萎えさせ、思い溜め息を落とした。

「……だからといって、努力をしなかつたらもつと悲惨だろ? なそこへ新たに男の声が参入。

オールバック気味に髪を逆立てた、クールな印象の生徒=テツトである。

「お、テツトか。クラスでトップの成績取つてる奴は言つ事違つなあ」

「コウスケはチラとテツトの持つ採点済み答案用紙を除き、皮肉る。「そんなモノ、広い視野で見れば井の中の蛙だ。俺なんかより勉強の出来る奴など他に幾ら

でもいる。例えば、有名私立進学校とかにな……」

「ああ、お坊ちゃまあお嬢さまの巣窟だろ?」

「そうだ。奴らは生れた時から俺達よりも早期に高質な教育……英才教育を享受して育つて

来ている。あんな連中に勝てる訳が無い……。厳密に言えば勝つた試しが無い」

「あれ? でもテツト、君はロボットコンテストで優勝した事なかつたつけ? あれには金

持ち出てなかつたのかい?」

ヨシヒロは思い出しながら、顎を揺んだ口元を動かし、訊ねる。「あれは運が良かつただけだろ?。それか、向こうが遊び半分だったか、だな」

「そつかあ。でも、一矢報いた事に変わりねえじゃんか? スカッとした気分になつてもいいんじやねえの?」

「それには及ばんさ。十分勝利を喜んでいい。……だが、社会的地位は負けるだらうな」

「うわあ、虚しい~ぜえそれ」

「屈辱だ。恵まれた環境に生れただけのクズ共なんかに笑つてゐると思つとな。……だが」

ヨシヒロとコウスケはポカンと口を空け、目を丸くする。「恵まれた環境に生れた連中を「卑怯者」と嘲笑う事は出来ぬ……。下らないんだよ。恵ま

れた環境がないと何も出来ない奴も、その程度の奴如きを妬む事もない……」

端整な顔を歪ませ、テツトは不敵に笑んだ。

それもそうだな。と、ヨシヒロとコウスケは釣られて笑つて魅せた。

「ねえ、ちょっとお

そこへ割り込んで来た新たな声。

それは一転して女子の声。

張りのある活発な声であった。

それはモデル体系のすらっとした美女＝ノリカと、彼女より小さく、愛らしいぽっちゃり

具合の身体の少女＝ミヤ。

「楠に鳳、何の用だよ？」

「ウスケは頭部を傾け、質問。

「ああ、ゴメン瀬戸君じゃなくて、星渡君に」

「俺に？」

「う、うん……」

フランクに話しかけて来たノリカとは違つて緊張した様子で口を開くミヤ。

「実はね……」

02

放課後、この5人＝テツト・ヨシヒロ・コウスケ・ノリカ・ミヤはある拳銃所へ足を運んだ。その研究所とは鳳ラボラトリ。

鳳ミヤの祖父の研究室である。

その研究所まで街中を歩く5人。

「…………」にしても、突拍子も無い話だなあ。鳳のじーさん口ボツト開発者で、そのじーさんの

知り合いの科学者が作ったエスパー開発薬を使って良からぬ事をしようとしている連中が動き出しているので、鳳のじーさんは対エスパー口ボを作っていた

……とはなあ」

「だが、完成に間に合わず、鳳の祖父は逝去。なので、俺にそのロボットを完成させて欲しいという訳か……」

テツトに向つて、ミヤはこくつと頷く。

「うん……。遺言にあつたの。敵に感付かれないようにしてないといけないから、警察や有名な人へは伝えちゃいけないって……。だから、ロボットコンテストで優勝した星渡君に頼もうかなつて……」

「フ、実際に面白い話だ。どんなロボットが待つているのか、楽しみだ……」

獲物を前にした狩人の如く、生き生きとテツトは高揚。

「……で、何であんた達も来てんの？」

ノリカは渋い顔でついて来ているヨシヒロ＆コウスケへ話を振る。「バーク、そんな厄介な話、無視出来るかよ。敵とされるエスパーつてのが俺達を苦しめる

かもなんだろ？ むざむざやられるのを待つより、立ち向かう方がいいと思つたんだよ」

「瀬戸君……。相馬君は？」

「僕はイケメンヒーロー俳優に憧れている。だから、本物のヒーローになる又と無い経験をしたいと思ってね」

「はあん、ナルホドねえ……」

「つーかよ、鳳自身で何とか出来ねえの？ だって、科学者の孫だろ？」

「無理だよ……。あたし、全然機械弄りとか出来ないし。そもそも、

お爺ちゃんはあたしに

手伝えって無理強いしなかつたから……。研究所もお爺ちゃんが死んでから初めて見に行つたぐらいだし」

「そうだったのかあ」

「んで、研究所を見に行つたら、エスパーと戦う事に備えていたと分かつたんだよね?」

ノリカの顔を見て、ミヤは頷く。

「うん……。お爺ちゃんはあたしに手伝えとも戦えとも言わなかつたけど、知つた以上は放つておけないから……」

だらだらと話しながら、目的地へ到着。

住宅街より離れた湾岸地域にポツンと聳え立つ研究所。

ミヤが鍵を開け、小汚い研究所のドアが開かれた。

少々古びた設備だが、パソコンや製造機など、充実した設備がそこについた。

入室した5人は部屋を見回る。

「うつひやあ、スゲエな」

「うーん、まるで特撮ヒーローの秘密基地みたいだねえ」

「ウスケにヨシヒロは感慨耽る。

「どおん? ビックリした? これ、ミヤのお爺ちゃんの研究室なんだよお」

「お前が偉そうに紹介すんのかよ」

「ウスケは鼻を突き出し、気丈に振舞うノリカをじとじと見やる。

「別にイイジヤン?」

「んまあ、そうだけどな」

……と、会話しながら奥の部屋へと歩き進んでいく。

先頭のミヤがスイッチを押し、到着したドアを開く。

「皆、ここだよ」

「まつ……」

両腕を組んでこるテツトが淡々と感心しながら田線を持つていった先……。

そこには5つの人型ロボットが確認出来た。

どれも、素体フレームは完成しているが、装甲の取り付け具合がまちまちで、装着されていない部分に相当するパーツも見当たらない。紛れも無い未完成品である。

「おお……」

「これだね？」

ヨシヒロの聞いにミヤは無言で首肯。テツトは二つの間にか、近くのデスクにある紙束＝企画書を閲覧している。

「『機種名・テクノドウル〔TD〕……遠隔操作式ロボット。エスパーと戦い、相手をデジタルデータに変換させる〔データコンバート〕といひ、形で鎮圧するマシンである』……だそうだ」

そう資料の最初のページを読んだテツトはページを捲り、詳細を知っていく……。

「どう？ 星渡君、残り作れそう？」

テツトへ不安そうな表情でミヤは訊ねた。

幾らロボットコンテスト優勝者といえど、兵器レベルのものを造れるところのは無謀だろうか？ と、改まって思い、実際ビーフテツトは判断したのか気になるミヤ。

テツトは厳然と、それでいて黙々と企画書を閲覧……。暫し緊張の沈黙が続く。

ミヤに、ヨシヒロ、コウスケ、ノリカは返事を黙々と待つた。

「ふむ……」

「ど、どうなんだよ……？」

息を飲む一同……。

テツトは4人の緊張などいざ知らず、マイペースにも「テスクの引き出しを開けていき、物色をし出す。

「何か」を探している……。

「お、あつたか」

「な、何があ？」

ノリカは眉を捻る。

「こいつだ」

テツトはノートパットのようなもの=「Sボードを取り出した。

「これがどうかしたの？」

「TDを遠隔操作するコントローラーだ。そしてこれは……」

テツトは企画書にあるテキストを読みながら、淡々と「Sボード」を操作する。

「動かすのかい？ どう見ても完成していないと思つんだけど……」

ヨシヒロは顔を滲くし、華奢な素体フレーム剥き出しの未完成品5機を見つめる。

「いや……動かす訳じやないさ」

ミヤ達4人は意図が汲み取れず、脳裏に「？」を浮かべる。

テツトの持つ「Sボード」から赤外線のようなものが照射され、その光は未完成TDのうち、

1機に注がれる。

すると、その光を浴びた素体フレームは〇と一の羅列と化し、光に吸い込まれるかのように消えてしまった。

思わず、目を大きく開け、衝撃する4人。

「ちょ！」

「消えちやつたじやない？ どうすんの？」

慌てるコウスケとノリカ。

「大丈夫だ」

反対に落ち着き払つているテツトは再び操作し、再度赤外線のようなものを照射。

今度はその光から人型の〇と一の羅列が形成されていき、先程消滅されたかと思われた未

完成TD1機が「再召喚」された。

啞然。4人は目を疑つた。

「これがデータコンバートシステムか……。要するに対象を自由にデジタルデータ化出来る

という事だ。更に他の金属などを取り込む事で修復・パーツ開発も可能……だそうだ」

「よ、よく分かんないけど、とにかくスゴイメカなのね？」

ノリカなりに何とか解釈。

テツトは「量子変換力学が云々……」と小難しい解説をしてみてもいいところだつたが、

「まあ、そんな解釈でいいだろ？」と、無言で首肯。

「……で、結局残りを完成させられるの？」

ミヤは一番気になる真相をおろおろしながら問う。
「完成させられる。それどころか、自分で設計開発して新たなパ

ツも造れる。余裕だ」

ほつと胸をなで下ろし、ミヤは安堵した。

「良かつたあ～」

取り敢えず、ほつとした5人は居間へ移動し、ソファーに座つてくつろぐ。

「いやあ、良かつた、良かつたあ～」

ノリカがおっさん臭く首をコキコキ鳴らす。

「……けど、敵がどんな連中が分かつてねえんだよな？」

「気掛かりだねえ～」

コウスケとヨシヒロはふと気になり、考え込む。

テツトだけは黙々と企画書を見ながらSボーダーを操作中。

「おい、敵が分かつたぞ」

「マジでか？ 一体どうやつてだ？」

「実は探索用ステルス衛星機もあり、それもこいつで遠隔操作出来た。そいつを通して以前撮影された映像の中にそれらしきものを発見した。皆のSボーデからでも再生出来るからそれぞれ見てくれ」

4人はテツトの言うとおり、映像再生コマンドを入力した。

その映像……。

30代そこらの男、深大寺正十郎がベッドから起き上がる。

これはある研究室で行われた映像。

「どうかね？ 深大寺クン。身体が完全に超能力に馴染んだ、生まれ変わった肉体は？」

そう声をかけるのは白衣を着た老人D「毒島。

この姿にミヤは覚えがあった。

「あ！ この人！」

「知ってるの、ミヤ？」

「うん、お爺ちゃんの葬式に来ていた……」

「成程。知人の計画ゆえに知り得たのか博士は。だが、口で言つても無駄だと思い、独自で

対策に動いていた……。とでもいう経緯だったのだろうな」

「多分ね……」

ヨシヒロは整った己の顎をなぞる。

5人は映像の続きを集中する。

映像の人物2人のうち、若い方の男＝深大寺。

彼は高揚感に満ちていた。

「……感じます。力が満ち溢れるのを」

「そりがそりが、それは良かつたよ。では手始めにこいつでも！」

D「毒島は近くのビーカーを掴み、深大寺へ投げ飛ばす。

深大寺は逃げる素振りなど見せず、平手を翳す。彼は閉眼し、篤く拳を握る！

すると！ 突如ビーカーが盛大に粉々になる！

まるで、“握り潰す力をビーカーに飛ばした”かのように。

そう、これが“念力”超能力の一つ”である。

「ふむ。いいウォーミングアップだねえ」

「ええ。これも博士のお陰です」

「いやいや、人として当然の事をしたまでだよ」

「ところで、D「毒島。同士は現在何人集まりました？」

「現在542人……もう少し集めるかね？ それとも、このまま侵略しちゃうかね？」

「いえ……1000人ほどは集めなくては。まだ、待つ時期ですよ。

我らが理想、恵まれし

者に鉄槌を下す、エスパー格差社会の遂行は……」

深大寺の脳内に5枚の写真が1枚1枚、順番に散らばった。

1枚目＝悪政に憤慨し、自らの手で悪政駆逐すべく政治家を目指し、勉学に勤しんだ学生

時代の深大寺の写真。

2枚目＝努力の成果あつてか、一流大学合格を決めた写真。

3枚目＝同様に国家公務員試験合格＝政治家になった写真。

4枚目＝しかし、金口ネの無い彼は選挙で劣勢を強いられ、大敗した写真。

5枚目＝多額の借金を抱え、政界から速効で消えた惨めな深大寺の姿の写真……。

その写真を脳内で踏み付ける深大寺。

憎き悪……世襲エリートへ逆襲出来る。

深大寺は過去の無念を思い起こし、再度闘志滾るのであった。

「フフ、そりがね……」

深大寺とローラ・毒島は互いに不気味な笑顔を送った。

テツトは黙々と映像を別のものに切り替え、4人にまた新たな映像を見せる。

同施設内で、血氣立つた他の超能力者達が戦闘トレーニングをしている部屋を捉える。

獣化したエスパー同士の取つ組み合いや、物体操作訓練に明け暮れている連中……。

「ぐふふのふー、この力で世襲エリート共をズンドコに落つことしてやりますよーん！」

興奮するド派手なスーツの男を中心に、総じて異常・怨念めいたテンションであった。

まさか、本当に超能力を披露されるとは……。

テツトが見せた、信じ難い事実を目にしたヨシヒロ達4人は絶句。「……とまあ、敵はこういつた連中だ。こちらは訓練しつつ、奴らが本格的・大々的なテロ活動を行い次第、成敗する」

「え？ なあテツト。今のうちにチビチビと敵さん潰しといった方が良くね？」

「コウスケ、案を提示し、テツトの策に異議を唱える。

「そうよねえ）。確かに早いうちから潰しておく方がいいかも」ノリ力も深々と頷く。

「……いや……。奴らの行動は巧く利用するべきだ」「ん？ どういう意味？」

髪と顔をだらりと横へ傾け、ミヤは疑問をぶつけた。

「わざと事件を未然に防がず、ある程度はエスパー共を好き勝手にやらせる。教えてやるのさ。ヒリーと共に、恐ろしい存在に妬まれてしまつたって事をな…

…。一種の警告だ。格差の酷さを大々的に示そう」

4人は圧倒されつも、意図を理解する。

「流石に見殺しや人生を脅かす程の負傷を負わさせないが、ちょっと位は復讐鬼に甚振られ

て貰おう。多少の怨み辛みは晴らさせてやれ」

顔が引き攣るコウスケ。

「え、えげつないなお前……」

「憎しみを発散させる事のないまま、葬られる方がえげつないと思うが？」

「ま、まあ、そうだけど……」

「俺達はエスパー軍団の味方でも、エリート共の味方でもない。ただ、エスパーの野望、エスパー以外迷惑を被るエスパー 格差社会を防ぐ……。それだけの話だ」

「お、おう……」

「お前らだつて、決して世襲エリート共といったセコイ連中を支持している訳ではあるま

い」

「まあ、支持も糾弾もしても現実、意味ないしね……」

ノリカは飄々と表情を酸つぱくする。

「いいよ。僕もそれに賛成だー。やっぱ、ヒーローは古典的なピ

ンチの時に現れないとー。」

ヨシヒロはパチン、と指を鳴らし、爽やかに迎合の意を唱えた。

それ以降、TDの完成をさせていった。

5人の嗜好と戦いに必要とされる武装を考慮し、デザインを練り直したテスト。

その後半年程度で完成させ、5人は操作訓練をしつつ、敵が本格的に動くのを待つた

。

敵が動くまで準備をしながら、待つこと約一年後……。

午前8時。とある平日。

高校生・星渡テツトは爽快な風を受け、自転車を漕いでいた。

そう、登校中であった。

そこへ高級車・ベンツがテツトに並ぶ。次に、最後部席の窓が開く。

「おやおや、これは庶民高校・岩鉄高校の生徒さんじゃないかあ！」

妙に上ずつた声に、ねちっこい・鬱陶しい抑揚。

実に嫌味な口調……。

ベンツの窓から学生服を着た、テツトと同年代ぐらいの人物が顔を出し、そう口にした。

前髪が前方へ真っ直ぐ飛び進んでいる、實に邪魔臭そうな髪型の青少年である。

「實に健氣だ。庶民は通学も自転車で行かなきゃいけないなんてね。しかも、レヴェールツ

の低く、汚い公立なんかにッ！　ま、ブルジョワーアッ高校・金薔薇高に通っている僕には

関係ないけど」

テツトは微動だにしない無表情＝俄然無視。

淡淡と自転車を漕ぐ。

「可哀想に。碌な学校に通えない……つまり、碌な就職も出来ない……。これが負け組みと

いう奴があ。……ま、僕には関係ないかあ。僕には金もコオネもあるし。教えてあげるよ。

僕のパパーンは投資ファンドのCEOなんだぜ？　あと、僕は高学歴も確定だし

ベンツに悠々と乗つていいこのお坊ちゃんは、わざわざ車を運く

走らせ、他校の生徒を」

丁寧に侮辱し、ぐどい程に己の血漫をするのであった。

「ふん、下らん奴だ……」

ようやく口を開くテツト。

彼は嫌味を垂れ流したお坊ちやま何ぞの顔を見る事も無く、辛辣な言葉を綴つた。

「恵まれた環境に居れば、それだけのモノが出来て当然だ。となれば、自分より不利な条件の相手に対し、勝ち誇るのはあまりにも幼稚だと言える。何せ、条件が違うのだからな……」「はあ？」

「フ、理解力の無いバカめ……学校の勉強は出来ても頭は回らないか？ ならば、教えてやろう。お前は小動物を殺して強者を氣取るようなみつともない人間だという事だ。勝ち誇りたければ、正々堂々同じ条件で勝負して勝った時だけにしろ!」

ドスの利いた低音ボイス＆冷徹な虎狼の如し眼で威嚇するテツト。相手は思わず、弱き小動物の如く、背筋をピクンと震わす。

「んな……、何だとつ！？」

腰を少し浮かし、拳をわなわな振るわせる坊ちやま。

しかし、事実故に、言い返せない。

「ぬう、不愉快だ！ 爺！ すぐにコイツから離れろ！ 負け犬才ウーラが移る！」

坊ちやまは前で運転している執事の老人ヘヒステリック気味に命令し、テツトの下から工ジンガスという尻尾を巻いて去つていったのだった。

「たまにああいうのと出くわすんだよな……。ま、学校が近くだから仕方ないか。しかし、

全く下らん輩だ……」

前方へ消え去つていく高級車を無表情で軽蔑するテツトであった。

山の中にある高校の一つ、岩鉄高校。

この高校を上空より捉える「ステルス化した衛星カメラ」……。これはステルスサテライトと言い、校内をも解析し、映像を捉える事が出来る代物である。

大きさは一般軽自動車ぐらいの縦・横・高さ。

ステルスサテライトは校内の様々な部屋をチェックしていく……。不可解な映像ばかりが見つかった。

どの教室も授業が始まる前にも関わらず、半数近くの生徒が居ない。

廊下やトイレなど、他の場所を確認するが、その半数を補う人は見当たらない。

本日は特別何かある日でもないし、現在は秋なので特に病気が流行る時期でもない。

実に珍妙な光景であった。

旧校舎の人気のない階段にて、その事を確認する5人。

その5人はSボーダーと呼ばれるデヴァイスを使って、ステルス衛星機を遠隔操作している。

「ふむ。やはり、今日か……」

5人の中央に存在するテツトはある事を確信。次にテツトは左へ顔を回す。

左には男2人。うち1人・ヨシヒロが美顔を爽やかに悩ませ、両掌をひょいと翳す。

「他のどの学校も同じだよ……。半数近くが学校へ来ていないアリサマさ」

「こっちもだあ。小中高に大学、殆どの学校の生徒が消えてりあ。こりや、マジで今日が決行日だな」

「ヨシヒロ、コウスケ……。そっちもか」

テツトは女子2人＝ミヤとノリカの方へ目線を持っていく。

「うーん、学校だけじゃなく、殆どの企業も人らもやつぱり、居ないよお～」

「あちやー、こつちもだわあ～。ここまでいくと凄いモンだわあ

「都内企業もか……」

テツトは女子2名の様子より、結果を看破する。

そうしている間に、授業開始のチャイムが鳴る。

「つて、もうこんな時間かよ」「

苦い顔で予鈴の音を耳にするコウスケ。

舌打ちをするテツト。

「チ……。一旦教室へ行くか……」

5人は一斉に自分達の教室の階へ疾駆した。

……が、途中の廊下にあつた水入りバケツにリヤは足を引っ掛けてしまい、転倒。

床へブチ時けられる水。その水へ落ちるリヤ。

テツト達4人は、咄嗟に水被りを回避。一旦、走行停止する。

「あつちやー、やつちまつたなこりや……」

酸っぱい顔で髪を搔くコウスケ。

「どうする？ 拭く？ 無視する？」

ノリカは頬を引き攣らせ、仲間に意見を求めた。

が、いつの間にかテツトは無言で雑巾を踏み、スケート感覚で水拭いていっていた。

「喋る暇があるなら行動しろって事かい？ ナイスヒロイズムだ。

参考にさせて貰うよ」

キザつたらしくパチンと指を鳴らし、クスリと笑んだヨシヒロ。彼は水道付近にある雑巾を掴み、地面に落とし、テツトと同様スケーティング雑巾がけをする。

「買いかぶるな。面倒事は合理的に駆除するに限る……それだけの話だ」

テツトはさうと解釈の訂正を促す。

ヨシヒロは長い睫毛のある瞼を降ろし、不敵に笑んだ。

「フフ、そうかい……」

「いつたたた……」

ようやく立ち上がるミヤ。服はびしょびしょで、下着が透けて見える状態となっていた。

淡いピンクのブラジャーがくつきりと浮かび上がった。

「うわあ～びしょびしょお～」

「あ～あ、世話焼けるんだから……」

「ゴメン……」

「次から気をつけなよ」

「うん……」

ノリカはスカートからハンカチを取り出し、濡れたミヤの肢体を拭ぐ。

唯一いやらしい視線でミヤの胸元を眺めるコウスケはポケットからハンカチを取り出す。

「んじや、俺も鳳の濡れた身体を……」

しつとわざとらしい笑顔で女子2名へ向つコウスケ。

だが、ぬつと襲来したノリカの2本指に、コウスケの両目が突かれる。

「ぐほあーっ！」

「あんたは床拭きな……」

「チ……へいへい」

と、渋々、コウスケは雑巾を掴んだ。

水道前に投げ飛ばされる湿った雑巾。……後始末終了。

「くつそお～。思わぬタイムロスだつたぜ……」

踏ん張った顔で駆け抜けるコウスケ。

同じく、駆けながら涙目で謝罪するミヤ。

「ごめんなさい！」

とっくに予鈴の鳴り終えた頃。

5人は慌てて自分達の1の5教室へ駆け込んだ。

ここで、教師が遅刻に關して叱責する。

……と、いうのが定番だが、それは無かった。

教室内は5人などお構いなしに、困惑に包まれていた。

テツト達のクラスも半数近くの生徒が出席していない状態。

更に何故か教室のテレビが点いており、ニュース番組が流れている。

1時間目担当の女性教師が何度もリモコンで電源を切ろうとしているも、何故か点いたま

まという、妙な光景があった。

何でテレビ切れないんだろう? と、眺める残りの生徒達。テツト達5人はこの珍妙で、不気味な教室を見やる。

「んあ? テレビ?」

「何で点いているんだろ? 授業で使うつけ? 」

ぼんやりと疑問を呟くコウスケに、ミヤ。

「いや、そういう予告はしていなかつたハズだが……」

テツトは記憶と現状により、意図して点けられたものではないと看破。

彼ら5人の一番近くの席の加賀ナオキ君が、現状を5人に説明する。

「分かんないけど、さつき勝手に点いたんだ。で、先生が消そうとしているんだけど消えなくてさ」

「はあん? 消えないってえ?」

「このテレビは最新のもの。誤作動とは思えない……。妙だねこれ

は……」

難しい表情となるノリカに、ヨシヒロ。

そんな時、突如淡々と女子アナウンサーが疾走事件を述べているニュース番組から、いきなり、内閣官邸が映る。

「む！？」

反応するテツト達。教室内の皆も改めてテレビへ注目。

次に官邸を映すテレビから音声が発せられる。

「やつほ～、テレビの前のみ～なさ～ん！」「さげん麗しゅう～！」

ひょうきんな印象の若い男の声。

テツトにとっては聞いた事のあるこの声に、口調。派手なピンク色のスーツを着用したあの男が、自分を超能力者へ勧誘したあの男の姿がテレビの向こう側にあつた。

テレビの向こう側にあつた。

それはニュース等で御馴染みの内閣官邸である。

その官邸・会議場を背景にこの派手なスーツの男が居る。

その場違いな男がトリックキーに、タップダンスを始め、言葉を続けた。

「どもども～、初めまして。私、倉岡と申しますよん。で、その私目がナ～ゼ、内閣官邸に居るかと言うとですねえ～。……ぐふふふ」

倉岡は軽快な足取りで、ぴょんと横へ移動。

彼が退けた先、そこには戦慄の光景があつた。

ぐしゃぐしゃに凹んだりと、破損が荒々しく広渡る室内。

顔には分り易く打撲痕や出血が見られる老人・中年達……。

コテンパンに打ちのめされ、グロッキー状態の政治家達の姿があつた。

そして、そんな政治家連中を見下している人物が15人ほど存在している。

「じゃ～じゃじゃ～ん、クズやら、無能やらと叩かれまくついていてるもの何～だから日本を統括している政治家の皆さんはここのとこ、ボツコボツコになつています。これがどう

「いう意味が分つかりますかよ～ん？」

再びテレビの前に顔を出し、画面いっぱいに陰険な笑顔を押し付ける倉岡。

「教えてあげま～す。テロッちやつたんですよ～ん。ブ～ツクック！ 実にお間抜けな姿ですねえ～」

この映像は日本各地で放映されている。

テレビに注目している人々は衝撃を覚える他無かった。

04

小憎たらしい嘲笑をしている倉岡は詳細を更に伝える。
「ナ～ゼ、我々がこ～んな事出来たか気になりませんか？ 気になりますよね！？」

じりじりとこの人を不愉快にさせるのが得意そうな悪辣な笑顔を近づけながら尚も、倉岡はマシンガントークを連射する。

「実はですね～……我々はエスパー＝超能力者なんですよ～！」
カメラいっぱいに近づけた顔を急に倉岡は遠ざけ、横へささやくと消え入る。

「そしてそして、お待ちかねえ～。今回のテロの首謀者にして、我々エスパー＝テロ軍団・

リツチプレッシャー（RP）のリーダー、深大寺正十郎様の登場なりい～」

倉岡と入れ替えに30代前半そらの男性が闊歩して来る。

この30代そらの男、表情はやつれており、頬もコケており、まるで人間に戻りかけているゾンビのような風貌である。

深大寺正十郎と呼ばれたこの男は、見る物を呪いそうな程の邪念溢れる瞳をカメラへ真っ

直ぐ向け、声を発した。

「テレビの前の諸君！　我々は超能力を持つている。試しに1つの証拠を見せてやろう」

深大寺は後ろを向き、顔を血塗れにしている政治家1名へ向けて平手を翳す。

すると、牽引フックに吊られたかのように、その政治家が突如浮かび上がる。

「タリと口元を歪ませ、深大寺は掌を左へ向ける。

それに呼応し、浮遊している政治家は左へ引っ張られる。そしてそのまま近くの壁へ激突するのだった。

元々気絶していたので、悲鳴を上げる事すらなく、更なるダメージを喰らうのだった。

深大寺は鼻を突き上げ、白慢氣な顔で再びテレビに顔を向けた。

「ふふふ、どうかな？　……諸君」

1の5強室内。

教師をはじめとする多くの生徒達が目を疑っていた。

信じ難い現実に、ざわめく。ざわめかざるを得ないのだった。で、テツト達5人はといふと……。

いつの間にやら、教室から消えていた……。

テレビ前の深大寺は声明を続けた。

「この通り、この国を指揮する政治家は武力で我々が捻じ伏せた。理由は何か……それは、

この社会を変える事だ！　現在の世の中は生れた環境に恵まれし者が有利な格差社会であ

る！　その立場を逆転させるのだ！　具体的には庶民・貧乏人である我々超能力者が、恵まれし者共に天罰を与えるのだ！」

凛とした表情を以て、深大寺は拳を篤く握り締める。

「つまりは恵まれし者を徹底的にこき降ろし、貧乏人に没落させるのである！」

倉岡はひょっこりと隣に映り、仰々しく拍手喝采を送った。

「いや～！ 素晴らしい！ あの憎つたらしい金持ち共に天罰を与えるのですねえ～！」

「はい～、拍手！ 拍手う！ パラリラパラリラア～！」

「そして、具体的にはこうなる。倉岡！」

「はいはい～、皆さんに分り易く、紙芝居で説明しますねえ～」

スケッチブックがカメラ前に浮遊して来、勝手にページが捲れて行く。

これは倉岡の能力である。

幼稚な作画にミスマッチな、えげつない紙芝居がスタートする。

1ページ目。自分達を模した人物達が政治家や警察を殺害する絵。「まずは政治家さんや警察さんを殺しちゃいます。つまりは我々がこの国のルールを作る立場になっちゃいます」

パラリとページが捲れ、2枚目に突入。

自分達が他の人間を踏み付けている絵に変わる。

「次にエスパーが融通された社会にしちゃいます。はい～、エスパーじゃない人、か～わいそお～つ！」

じわじわとおちょくつた口調で倉岡は紙芝居を進める。

3枚目に切り替わる。

自分達が他者から金や物品を強引に奪う絵が出現。

「そしてそしてえ～、全ての勝利や財産・安定を我々が頂いちやいま～す。我々エスパーは

何やつても自由！ お金も地位も権力も全て力ずくで奪っちゃいま

「す！」

最後の4枚目へ突入。

路頭にて、非エスパーと書かれた人物の死体の山が描かれている絵。

「これによつて、クソ金持ちエリート共は貧乏で不憫な生活しか出来なくなつてしまいま～すよん！ ザマミロ・オブ・ザマミロですよんつ！ あーでも、「我々が恵まれていないと

判断した人」には攻撃はしませんよ～ん。それどころか恩恵を分け与えますよん。な～ので、

「ご安心をつ！ でーも、どうこう基準になるかは分りませんけどね～ん」

ふざけていて、ねちつこい語り口での紙芝居を終えた倉岡。

操術念力から開放され、スケッチブックは床に落ちた。

再び、深大寺はやつれた不気味な顔を突き上げ、画面中央に映る。「……という事だ。これより、政治家共にトドメを差す……。つまりは公開処刑だ！」

氣絶していった政治家勢……。

もとい、氣絶したフリをしていた一同だったが、この言葉には流石に動搖。

情け無い悲鳴を上げ、ボロボロな身体引き摺つて逃げようとする。

「フン、醜い悪足掻きだ……」

そう一警した深大寺の後ろで黙々と待機していた仲間エスパー連中が一斉に姿を消し、逃げていく政治家の目前に出現。

テレポーテーションである。

政治家一同は深大寺達15名ほどのエスパート隊軍団に囲まれた。

深大寺は高圧的に総理を中心とした政治家へじりじりと近寄っていく。

「総理、終わりだ……お前達金持ちの時代は。時代は我々エスパー

のモノのとなるのだ！

あの世で反省するがいい！ 世襲・英才教育を重んじ、不公正を容認した醜悪な政治をな！」

彼らを映像として捉えるカメラは倉岡が操るモノ以外にもあった。
……それは透明＝光学迷彩を装備した衛星機であった。

「いや、貴様達の時代も来ない…………」

謎の電子音声を耳にするこの場の全員。

その声の発生場所を探さんと、辺りを見渡す深大寺達。
「だ、誰だっ！」

深大寺と総理の間に〇と1の配列が人の形をし、出現。
それが瞬時にブルーを基調としたロボットと化した！
そのロボット、身長180cm前後。成人男性ぐらいの体格を誇る。

メインカラー・メタリックブルー、サブカラー・ブラックグレー、
クリアーブラックのア
ンテナ付きゴーグル他、センサーを搭載。

ぱつと見の装備として、両肩上にマシンガン、両腰にマグナム、
両脚に置まれたミドルラ

イフル、右腕にシールド状になっているが、実質は折り畳まれたロ
ングスナイパーライフル。

そして、胸部左上から右斜め下にベルトのように巻かれたライフル
を持つ。

総じて全身銃器の機影が燐然と現われた。

この機体こそが、さつきの電子音声の持ち主である。

「な！ 何だとっ！？」

予想だにしていないかつた来客に、深大寺達は眉を潜め、身構え
る。

「多少の鬱憤晴らしなら、目を瞑るのだが……流石に殺害の領域に

なると止めざるを得ない

「……何者だ？」

深大寺は怪訝な顔を形成し、謎の機影に問うた。

「機種名・【テクノドゥル（T.D）】、マシン固有名、【コマンド
オライオン】。貴様らの野望を
阻止する者だ！」

その言葉を言い終えると同時に両腰のビームガン＝マグナムを手
に取り、ガン＝カタの如
く構える！

まごう事なき、戦闘体制だ！

深大寺達エスパー隊口軍団・R.P.は察知した。

この、C.Oライオンと名乗る機体が敵であり、自分らと戦う事を！
「ほう、正義の口ボット気取りか！ 面白い！ 正義など子供の脳
内にしかない事を我々大
人が教えてやろう！ やれ！」

深大寺の指示の下、総勢15人の異能者が1機のT.Dへ飛び掛る！
「喰らえ！」

右側の3名が掌から火炎弾を連射！

これが彼ら3人の超能力のようだ。

瞬時に拳銃＝マグナムのトリガーを絞るC.Oライオン！

C.Oライオンは無数の火炎弾へハンドガン＝マグナムと右肩のマ
シンガンを外側へスラ

イド、右脚を半分分割し、ミドルライフルを展開！ ビーム弾を連
続で射出！

全ての火炎弾を撃ち抜き、相殺！ 爆煙が発生！

更にC.Oライオンは発砲！

爆煙を突き抜け、その先へ……。

火炎を操るエスパーへと向う光弾！

舌打ちをし、3人はテレポーテーションを図る。

しかし、1名遅れてしまい、Cオライオンのビーム弾の餌食となつた！

攻撃を受け、悶えるその男……。

その悲痛の叫びに、思わず、エスパー一同は動きを止めた。攻撃を喰らつたエスパーは悶えながら、己の身体が〇と1の羅列になつていく……。

見たことの無い症状ゆえ、深大寺は目を疑う。

「な、何だこれは……？」

「データコンバート……人間をデジタルデータに変換する……。先程の攻撃はコンバートシヨット。データ化プログラムを光弾にし、身体へ撃ち込んだものだ」

「そ、そんなデータ化な……」

「データラメでも現実だ。そして、これからお前らも“保存”されて貰う」

「保存だとっ！？」

Cオライオンは腕スリットからメモリーカードのようなものを射出。

そのカードは〇と1になつていくエスパーの身体に突き刺さり、カードがそのエスパーを吸い込んでいった！

文字通り、そのメモリーカードに先程のエスパーというデータが保存されたのだった。

「くそつお！　ふざけるなあ！」

激昂する残る仲間エスパー連中は血氣立つた表情で脚部と背中にジエットブースターを

装備・拳を鋼鉄にする能力を発動！　メタリックブルーのT-Dへ飛び掛けた！

四方八方から高速移動し、殴りかかつて来るエスパー連中の攻撃をかわしては両手・両

肩・両脚の銃器を大乱射して応戦するCオライオン。

「ほつ、身体能力強化か……」

余裕綽綽のCオライオンの操作主＝テツト。
ブルー＆ブラックの狩人型TDは重厚な外見に似合わず、軽快な動きで応戦。

しつちやかめつちやかな画の中、動き回っているエスパー達は次第に自分らの動きのパターンを読まれ、追い詰められる。終いにはデータ化プログラムを撃ち込まれていく！

あつと言つ間にエスパーは残り5人ほどになる。

あまりにも短時間に行われた事ゆえ、愕然となるしかない深大寺や倉岡をはじめとする残るエスパーであつた。

「ぬ、やるではないかCオライオン……。だが！　倉岡あー！」

「はいはい！」

倉岡はいやらしく、両指をくねくね動かす。

「さあて、問題ですよん！　テレビジャックを誰がどうやって行っているでしょーかつ？」

獰猛な大蛇の如し、目を開眼！

ドン！　と、両手を突き出す倉岡！

「正解はあー、私が操つているのでーす！　私、倉岡は無機物を操る超能力を持つているんですよねえー。つまり……ロボットである貴方も操れるんですよーんだ！」

一変、血氣立つた印象になる倉岡は操るべく、念力をCオライオンへ飛ばす！

……カシャツ！

Cオライオンはうろたえる様子は無く、額のアンテナ付きゴーグルを目元へセット！

そのゴーグルは実際には目に見えない「念力の流れを可視化」させ、自身へ迫る脅威を捉える！

確認！ 真っ直ぐにやって来る、操りの意を持つた波動を！
じオライオンは落ち着き払つたまま、床を足の裏で蹴り飛ばし、念力の流れから完全に逸れた！

その上で、低空中に位置するじオライオン、脚部ミドルライフルを下へ伸展させ、棒高跳びの棒の如く、床を更に蹴り上げ、完全に相手の魔の手から離れるのだった！

この、サーチングモードはゴーグルを額に上げたノーマルモードよりも、高度な演算能力が出来る反面、多くのエネルギー＝電力やセンサーの稼動率＝マシン発熱量を上げる。

何が起ころか分からぬ戦場。

念の為、エネルギー温存や機体に負担を掛けないようにすべきなので、必要時以外には基本的に使用しない形態なのである。

アッサリ回避された倉岡の攻撃。

念力を回避するなどあり得ないと思つていた倉岡は何度も瞬きする。

「ありつ？ 逃げた？ 念力は見えないハズなのに？」

「見えるんだよ……。こちらには“貴様らの念力”がな！」

脳髄へ疾る稻妻！ 絶句する倉岡。

倉岡の真横には、青いTDが銃口を構えているのだった。
じオライオンは即座に回り込んでいたのだった！

「うつしょお～ん！」

倉岡は鼻水を吹き飛ばし、両頬を押さえ、ムンクの叫びとなつた！
このままでは倉岡がコンバートショットの餌食になつてしまつ。

深大寺が倉岡の前にテレポーテーションし、咄嗟に倉岡を連れて姿を消す！

そして、危険な敵＝Cオライオンから離れた端へと再出現。

「ぐ……おのれ……。まさか、こんな敵がいたとは……。貴様、政府の者か？」

「違うな。俺はわざとお前らに政治家共をボコらさせた」

「何……？ では一体、何者なんだ……？」

Cオライオンはむくじと深大寺らにマグナムの照準を向け、答えた。

「言つた筈だ。エスパー格差社会を阻止するだけだと……。誰の味方でもない……」

掴みどころの無い存在……。

唖然となる深大寺と倉岡。

深大寺は数秒後、高笑いを開始。

「クハハハ！ それはご立派だな！ だが、面白い事を教えてやる！ 我々が政府を襲撃し

た同時刻、我々の仲間が警察や自衛隊を潰しに行つたぞ！ お前はそつちへ行つた方がいいんじやないのか？」

深大寺は眉毛を歪に動かし、悪辣とした顔で青いT-DNAに揺さぶりを掛けた！

「フツ。……必要ないな」

まさか……仲間が？ と、悪寒を察知する深大寺。

焦燥の汗を落とす深大寺へ銃口を真つ直ぐ向けるCオライオン。

「そうだ。貴様らの脳裏に描いた通りの事だ……」

Cオライオンのコマンダー、星渡テットは戦略通りと言わんばかりの、不敵な表情を浮かべた！

どうも、作者の権利です。感想・質問・指摘。何でもお待ちしております。

01

「オライオンが深大寺らと対峙する同時刻。自衛隊基地。そこは戦車などの兵器の死骸が散漫としていた。……にも関わらず、激しい戦闘音はまだ響いていた。

空間を飛び交うボロ戦車！

念力で戦車を振り回す少年の仰いだ指示の下、戦車は急落下！ その先には……。

「オライオン同様の人型ロボット＝TDの存在を確認。

こちらは騎士を髣髴させるデザイン。

メインカラー・メタリックシルバー、サブカラー・イエロー、クリアーブルーのセンサーを持つ。

装備は巨大なキャリバーをメイン武器に、オライオン同様肩や脚部にビームソードを先端に出現させるマニユピュレーターが折り畳まれている。

「可愛いねこの攻撃……。けどこの、【ワコミエルシュガリア】には通用しないのさつ！」

レシュヴァリエはキャリバーを大きく振りかぶり、目の前へ迫る戦車を両断！

戦車爆散！ 騎士自身の左右に火球を作るのだった。

岩鉄高校旧校舎階段にて、携帯ゲーム機のようなものを操作している5人の高校生。

そのうち一人＝ヨシヒロは貴公子を演じる舞台役者の如く、高らかに叫ぶ。

「フフツ、素晴らしい切れ味だ。さあて、レシュヴァリエー、置み掛けようじゃないかっ！」

ヨシヒロはTDを遠隔操作する装置＝Sボードのキーボードに自身の指を舞踊させた。

自衛隊基地にて、石化するエスパーはそのまま弾丸の如く特攻！レシュヴァリエに激突を試みる。

「次は石化能力か……。超能力は実に多種多様だねえ～」

ヨシヒロはSボードの液晶画面に表示されている2つあるアタックモードを「デス・アタックモード」から、「コンバート・アタックモード」へ切り替える。

そのコマンド入力を受け、彼の愛機＝レシュヴァリエはゴーレムエスパーへ向って、キャリバーで切り込む！

剣と騎士の織り成すハーモニー。

吹き起こる乱舞！ 空間に斬撃音が響いた！

……だが、岩石の肉体を持つエスパーは戦車のように真つ二つにされるのではなく、0と1の羅列で形成された切り傷を刻めた！
「グア、何だこれは……」

「フフ、コンバートスラッシュよ！」

妖艶に微笑む美男子ヨシヒロ。

次第に刻まれた0と1の切り傷は身体に広がっていき、遂には0と1で彩られた人影となつた！

その周辺で、また別の戦闘が行われている。

ズン！ と、バズーカを構えるTD。

カラーリングはメタリックグリーン＆ダークブルー、クリアーオレンジのセンサーを持つ、海賊型TD、その名は【グラントバンディッタ】である。

装備は右肩に背負つたバズーカ、両腕に内蔵されたアンカー、両脚にはアリゲーター・ハング・キャノンを持つ。

Gバンディッタは電撃を操る小学生エスパー 2人へ肩に背負った
バズーカを放つ！

巨大な光弾にあつという間に呑み込まれる2人はそのままと1
になり、直後に飛来したメモリーカードに吸収・保存されたのだつ
た。

「へへ～ん、大漁、大漁お！」

鼻と口の間を指で擦る男。

Gバンディッタを操るコウスケである。

「調子に乗るなよ！」

「お前の動きは見切つた！ バズーカブツ放つだけの鈍重口ボだろ
！？ だつたら！」

Gバンディッタの真横より、新たに2人のエスパーが挟み撃ちに
来る！

2人は瞬間移動し、突如Gバンディッタの目の前に出現したのだ！
腕をガトリング砲に変換する超能力を使い、海賊口ボヘ弾丸の雨
を放つ！

「ハツ、嘗め過ぎだぜ！」

不敵に笑むコウスケ。

豆鉄砲攻撃など特殊装甲を持つGバンディッタには効かない。

Gバンディッタはバズーカの砲身で片方を叩き飛ばし、もう片方を開いた手で驚掴みし、小さな玩具を捨てるかの如く、放り飛ばした！
しかし、一息着くのも束の間、今度は腕をハンマー化したエスパー3人が3方向から切り掛かる！

「ハン、やられつかよ！」

コウスケが叫んだ後、Gバンディッタの両脚からワニの口のよくなキヤノン砲アリゲーター・ハンギングキヤノンが展開！

獰猛な口を開き、相手3人へ口内にある砲身から砲撃をお見舞い！

2人は回避するが、1人はコンバートキヤノンの餌食になり、デタ化していく。

その上で両腕に搭載されたアンカーをシユート！

ワイヤーに繋がれたアンカーが残り2人の超能力者を巻きつけ、捕え、そこからエスパー同士を激突させる。

相手が衝突に苦悶する今がチャンス！ Gバンディッタがバズーカの銃口を回す。

巨大な砲身より放たれる極太の熱線！コンバートバズーカを喰らった超能力者残り2名はその変換熱線の餌食となつた！

受け持ちの戦闘終了。

Gバンディッタはバズーカを背中のランドセルへ連結させ、背部へ置み、両腰スカートにあるカードケースから薄いメモリーカードを射出！

0と1に分解されていく3人分のデータへ差し込んだ！

3人のデータはメモリーカードへと吸い込まれていったのだった。そのメモリーカードはブーメランの如く、Gバンディッタの手元へ戻り、その手に握られるのだった。

「ワリイな……。事が落ち着くまで眠つて貰うな……」

フツと力を抜く緑の海賊型TD。

「そういやヒデノリの奴、どうしてるんだろうな……」

何処か儂げにGバンディッタの電子音声は呟いた……。

所変わつて、警察庁本庁。

捻じ曲げられ、使い物にならない拳銃や防具。

死には至つていながら、打撲痕が造られた警察の身体が横たわる周辺。

パールパープル&ワインレッドのボディ、クリアーアイエローのセンターを持つ人型ロボットの脚部のカードホルダーから巨大なカードが8枚ほど発射される！

そこに縦横無尽に飛び交う巨大カードがあつた。

これはデータ化したエスパーを保存するものとは異なり、こちらは大きく、淵がブレードのように鋭利になつていてる。

その自立遊撃マシンのカードが空中に待機している超能力者達を翻弄。

「く、くつそおー。何だよこれ……」

身構えている間に飛び交うカード一枚の側面が1人の異能者を切りつけた！

「ぐあ！」

操つているかのよつこ、鋼の指がくいくいと動く紫のTD。
「ふふん、どおん？ ウィザースロットのカードビットは？」
超能力者連中を翻弄するカードビット操る魔術師型TD、【ウ

ィザースロット】が燐然と立っていた。

操る楠ノリカは一タリと舌舐めずりをする。

「くそっ！ こうなつたら！」

飛び交うカードビットに、逃げ惑う一方のエスパー連中は一斉にテレポーテーション。

ウィザースロットの周囲に出現した！ 接近戦に切り替えた。

「こんのお！」

「俺達の邪魔すんなあ！」

囮んだ5人は拳を金属化させ、紫のTDへ殴りかかる。

ウィザースロットは両腕を広げ、袖から光の針＝ビーム＝ードルが飛び出す！

次に上半身を回転させ、押し寄せる拳に応戦！

回転しながら、針攻撃が吹き荒れる！！

“特殊な”針殺を受けた異能者は悶え、0と1の羅列と化していつた。

ウィザースロットは一ードルを袖内に戻し、脚部から扇状のカードコンテナをオープン。カードビットを回収した。

「ま、コンバートディングってトコね。わつきのは……」

同場所にて、異能者を射抜く、電光弓矢が降り注ぐ！

白い装甲の右腕に固定された、弓矢型キヤノン砲が光の矢を発射

していく。

この腕の持ち主……パールホワイト&ピンク、クリアーグリーンのセンサーといった配色のボディを持つ、唯一の飛行型・天使型のTD、【エンゼクロス】だ。

トリックキーに動き回るそのエンゼクロスは同じく空中を動き回るエスパー・テロ集団の仲間を撃破していった！

「ふん、だつたらこれならどうだ！」

残る4人の異能テロリストは姿を消した。

……とは言つても、今回のはテレポーテーションでなく、存在はしているが見えなくなる＝透明化能力を使つたのである。

「テレポーテーションだつたら別の場所へ出現する筈……周辺に現われないつて事は……」

エンゼクロスを操る鳳ミヤは戦術を立て、キーボードを叩く。

天使型TDの顔横のある、イヤホンのようなウイング状パーツが前方に回り込みをし、目元へ覆い被さる。ゴーグルとなつた。

COライオンのゴーグルと同様、通常では見えぬ念力の波動や透明化した物質を捕捉出来るものである。

周辺を見回すエンゼクロス……居た！

右斜め30度と、左斜め25度の位置より、透明化したエスパーが2人ずつ襲来して来る！

これに対し、エンゼクロスの細い両脚のコンテナからリング状の物体を発進！

これはリングビットと称される自立遊撃武器である。

その、まるで天使の輪のようなリングは伸展していき、透明の敵へと駆ける！

アクロバティックに動くそのリングは透明の超能力者を輪の中へ入れるや否や、輪の直径を縮めていく！

ガシッ！と、鋼鉄の巨大リングに捕らえられる透明エスパー4人。

更に拘束されたまま、意図しない方向へ移動させられる！

リングビットに捕獲された透明化超能力者はそのまま縦一列に並べられた！

捉えられたエスパー一同は鳥肌を形成し、悪寒を察知。

自分達の目前に電光の弓矢を向けている白いＴＤが構えている！

放たれた！ ビームアローが！

4人のエスパーが逃げようと思つた矢先に葬られたのだった。

「ふう、ちゃんと戦えたあ……」

ミヤはほっと胸を撫で下ろす。無事、初陣を遂行した故。

02

官邸内。喉を唸らす深大寺が居た。

「貴様の仲間が我々の仲間と対峙しているという事か……」

「そうだ」

冷然と立つCオンラインが銃口を向けながら、深大寺・倉岡へ闊歩していく。

「Cオンライン、2つ聞きたい事がある

「何だ？」

「データ化された我々の味方は今、どういう状況にあるんだ？」

「簡単に言えば、脱出不可能の監獄に収監されている状態だ。データに身体が変換されているので、空腹・便意などは発生しない。死にはせん。不老不死の状態でヴァーチャル世界の無人島生活をする

ようなものだな」

「ほう……ではもう一つ、お前は我々の仲間は殺された訳では無いのだな？ 復活させようと思えばさせられる……」

「正解だ。だが、貴様らの力では無理だな」

Cオンラインはそう告げた直後にトリガーを絞った。

データ化プログラムを撃ち込まんと、コンバートショットを放つたのである。

「ひいいいいつ！」

涙をちびり、情け無い叫びを上げる倉岡。

しかし、深大寺はうろたえる事は無く、強気な顔をする。

「今はな……。だが！」

深大寺は倉岡を連れて姿を消した。

「お、俺達も逃げるぞ！」

と、残る数人も消え去った。

「逃げたか……ま、牽制しただけでも十分か」

脅威は去つた。

存命している、血祭りにされた政治家達は安堵に浸る。

「ふう、助かつたあ」

じオライオン、政治家連中の方を見やり、全員存命を確認。次いで、歩み寄る。

「さて……」そこからが本番だ

静寂な空氣に金属の足音が響く。

5秒ほどで政治家達の密集地帯に到着。

「ああ、ロボット君。助かつたよ。君が来なかつたらあやつく殺されるところだつたよ」

政治家達は完全に安心し切つていた。

彼らは賢い。

だが、彼らも所詮弱き人間。絶対的な恐怖から救つてくれた存在に安心してしまう。というか、警戒したところで、まともに歩けないほどボコボコになつた状態ゆえ、抵抗など出来ない。

しかし、ハツと思い起こす。

この青いロボットは「わざと自分達をエスパーにボコボコにさせた」とのたまたま事を。

思い出した頃には既にビームマグナムの銃口が自分方に向いていた。

「一つ言つておこう。奴らを作り出した原因はあんたら政治家にもあると」

「ど、どういう意味だね？」

政治家のうち、1人が怪訝な顔で問う。

「世の中、不公平があるのは仕方のない事かもしれない。だが、ある程度の是正は出来なくもないハズだ。奴らに殺されたくないけれどどうしたらいいか、分かるよな？　ま、頑張ってくれ。あんたらの仕事だろ？」

COライオンを通したテツトの主張。

電子加工音声なので、特定など不可能な声でそう促した後、COライオンは0と1になり、姿を消す＝データ化回収された。

政治家達は唖然となり、暫し沈黙に溺れたのであった。

同時刻、自衛隊基地のJ・シユヴァリエとGバンディッタも同様に消え去る。

警察庁のウイザースロットとエンゼクロスも同じく。

官邸・警察庁・自衛隊基地に待機していた無色の衛星機も飛び去り、退却。

これらはTD同様、テツトらの保有物・ステルス衛星機で、敵の監視追跡や、戦闘における視点をテツトからTDコマンダーへ与え、補助する役割などを持つ優れものである。

5機のTDは帰還した。

テツト達5人の持つ端末機＝Sボードによつて……。

ミヤが持つ、シルバー＆ピンクのSボード画面にエンゼクロス。ノリカが持つ、シルバー＆パープルのSボード画面にウイザースロット。コウスケが持つ、シルバー＆グリーンのSボード画面にGバンディッタ。

ヨシヒロが持つ、シルバー＆イエローのSボード画面にJ・シユヴァリエ。

そして、テツトの持つ、シルバー＆ブルーのSボードにはCOライオンの画面。

現在のTDはデジタルデータとして、このSボード内に保存格納さ

れている状態であった。

戦いは一旦幕を閉じた。

旧校舎階段に居る5人＝テツト達は一息つく。

「ふう、取り敢えず戦闘終了ね。あ～チカれたチカれた～あ」
ノリカはおっさん臭く首を鳴らす。

威風堂々と両腕を汲んでいるテツトが場を〆んとする。

「ま、実戦でこのぐらいやれれば上出来だろう。……これから徐々に潰していくぞ！」

4人は凛とした顔で首肯。

「おうよ！」

片方の掌へ豪快に拳を撃ち付けるコウスケ。

「格好よく、イケメンヒーローの僕が成敗していくさ」
モデル立ちをし、白い歯を輝かせるヨシヒロ。

「エスパーが支配する世の中なんて冗談じゃないつーの！ 絶対、潰すし！」

爺臭く、面倒そうな顔で首を鳴らすノリカ。

「うん……頑張ろうね！」

最後に、ミヤは皆へ向つて、内向きにガッツポーズをとった。

03

T Dとエスパーが戦いを繰り広げたその日の夕方。
夕陽に染まる廃工場。

ここには深大寺達エスパーテロ集団・R Pが集っていた。

負傷している彼らは回復能力を持つ女性エスパーからヒーリングを受け、休養を取つていたのだった。

「大丈夫ですか？ 深大寺様？」

「ああ、根本君、君のヒーリングのお陰でな」

ほつと安堵する榎木という名の回復超能力を持つ女性構成員。

「……で、どうしますよん？ 奴ら丁口を……合計5機あるようですが……」

しけた顔で倉岡は指導者へ今後の事を問う。

深大寺は顎を摘み、深刻な面持ちとなる。

「ふむ。そうだな……奴らは我々の障壁となる存在……だが、強い。我々は既に出向いた舞台の大半を奴らに滅ぼされたのだからな……」「もしかして、諦めるとか言わないですよねん？『冗談じやないですよん！ 恵まれた環境でエリートになつた坊ちゃん共の惨めな姿を見るまでは消えられませんよお！』

倉岡は激昂しながら、思い起こす。

自身が金持ちエリートを妬む所以を……。

倉岡は現在26歳。

エスパーになる前は大手商社で営業マンをしていた。

彼は「ごく普通の家庭に生まれ、3流大学を出て、数々の就職試験に挑み、ようやく採用された1つの企業で一所懸命働いていた。

……しかし、努力虚しく、彼は冷遇されていた。

同年代の高偏差値大学出身の社員からは、「お前、低偏差値クソ大學出身の癖に、よくこの会社に就職出来たなあ」とイジメ＝所謂アカデミックハラスメントを受けていた。

彼は芸達者な性格で、口の巧さを駆使して学歴差別をする連中を見返そうと思った。

結果として、彼らに負けない営業実績を積み立てていった。

しかしそれでも、差別・苛めは無くならなかつた。
社員として納めている成績は大差ないのに……。

それだけならまだしも、高学歴の同年代社員との出世競争にも負けてしまう始末。

成績に大差は無い。寧ろ若干倉岡の方が秀でている。なのに、この仕打ち。

理由は分つていた。高偏差値大学出身者の方=出世競争に勝つた相手は会社重役や取引先などのと血縁関係＝癒着コネ持ちであった。

倉岡は理不尽を叫んだ。

「くつそお、何が学歴だよ～。何がコネだよ～。」

「一か、そもそもあいつら、後になつて訊いてみたら、金持ちはお陰で良質な勉強が出来て、高偏差値大学に合格出来た連中じやないかあ……。親に恵まれただけじゃないかあ……。」

純粹に努力のみでエリートになつたのならまだしもよん。

「ムキキのキー！」「冗談じゃないよん……。」

と、何度も吐露。……倉岡は屈辱にのた打ち回つたのだった。そういうつた経緯ゆえ、エリート潰しを実現せずにいられないのである。

現在……。

倉岡は地面を憎き相手と見立て、チンケながらも、蹴り続けている。「安心しろ。断念という文字は私の脳裏に存在しない」

「ですよね～ん。その言葉を信じてましたよん！」

満面な笑顔で揉み手を繰り返す倉岡。

「しかし、奴等は強い。ゆつくり弱点を探つていいく事にする。戦う場合、流石に拙いと思つた時は逃げる」ことを念頭に置け！」

残り・合計900人ほどいる、エスパー一味は無言で指導者の命令に御意した。

一方、テツト達5人は自転車で学校から帰つてゐる途中であつた。
「あ～、チカれた、チカれた～」
首を鳴らすノリカの耳にある店舗を捉える。
メイドカフェを発見。全員自転車のブレーキをかける。
「あ、メイドカフェ！ ちょっと寄つてかな～い？」
コウスケは嬉々と指を鳴らした。
「お、いいね～。初陣の疲れをメイドに癒して貰つてか？」
ミヤも笑顔で頷いた。

「うん！ 行こ行こ！ カオリに会いたいし！ 今日、働いてる日だもん」

「悪いけど、僕は水しか飲まないよ。無駄にカロリーは摂取したくないんだ」

ヨシヒロは鬱陶しい長髪を弄りながら主張。

「俺も水で十分だ……」

両目を閉じ、両腕を組んでいるテツトは歩きながら前以て言つておく。

「あ、そ。まあいいわ。決まりっ！ 『メイド・にゃんこ』へレッツソラ「オー！」

5人はメイドカフェ・入り口へと向づ。
が、入り口前の段差に、ミヤは躊躇、転倒。
ミニスカートからパンツが捲れ上がってしまつ。
「んぎやっ！ ……痛たた……」

ニンマリと笑うノリカ。

「わお // ミヤったら、セクシー」

「うおおおおっ！？」

「ウスケは思わず赤面。

見ではならぬが、見たいものを見にしたのだった。

彼は普通に下心を持つている男のようで、こつそりと、内心悪いなと思いつつも、ミヤの薄ピンク色のパンツ及び、むつちつとした尻肉を脳内保存しておくのだった。

「フ、僕は空を見上げている……。今日の空は僕の次に美しいね……」

…

さらりと、紳士的に、「自分はパンツを見ていない」と、主張するヨシヒロ。

「この事態は短いスカートを履いていた点及び、足元への不注意が招いた。……ま、自己責任だな……」

しつと箴言し、両眼を閉じているテツトは淡々と入口へ歩いていった。

「『』尤もだねえ。こういうので、『いや／＼ん、見ないでエツチイ
』と暴力振るわれたりするのは不条理だしねえ……」

ヨシヒロは爽やかな冷笑し、テツトの後に続いた。

ハの字になる眉毛。しょげた顔で唇を尖らせるミヤ。

「……いや、あたし別にパンツ見られても暴力は振るわないんだけ
ど……」

怪訝な表情でスカした仲間の男2人を凝視するノリカとコウスケ。
ノリカは眉を捻り、首を傾ける。

「我らがリーダーさんは何が言いたい訳？」

「あれじゃね？ パンツ見られても怒るなつづーか」

「え？ そういう解読？」

「間違いねーって」

コウスケとノリカ、ぐだぐだ喋りながら、店内に進むのであった。
客入りの少ない現在の店内の、大きなテーブル席へ腰を落とす5人。
そこへメイド＝ノリカとミヤの友人＝川元カオリが注文を取りに
来る。

「お帰りなさいませ、『ご主人様』」

「うむ、只今帰ったぞカオリ君！」

ノリカは男装の麗人のような、低音の声音を作り、“ご主人様”
を演じる。

「すっかり板に付いてるね、カオリ」

ミヤが柔軟にアルバイト中の友人に話しかける。

「まあね」

ストレートロングヘアのメイド、カオリはにっこり笑み、
「では、ご注文をお伺いますが……」と、注文に入った。

10分程度の時間が経過。

テーブルにはパフェなどの食べ終わった、食器のみが並ぶ。

試着室のカーテンが開き、チャイナメイド姿のノリカとミヤが登場！

「ふつふ／＼ん！ どおん！？」

「に、似合つかな？」

自信満々に胸を突き出し、モテルポーズを探るノリカに、嬉しそうな赤面でもじもじするミヤ。2人の太股がチャイナドレススリットからチラリと覗かせる。

「わ～、2人共、似合つてる～」

ノリカとミヤに予備のメイド服を借用させたカオリが嬉々とカメラで写真を撮る。

「ふふん、このノリカ様は何着ても似合つに決まつてんじやん？」

男子達、どお、これ？」

只ならぬ自信を持つノリカは豊満な胸を突き出し、連れの男子3名に評価を仰ぐ。

テーブル席に座っているコウスケは恍惚な表情で2人を見つめていた。

胸の谷間ときわどいラインまで見える太股……。

健全な男子高校生にとつて、あまりにも刺激的であつた。

「お、おう……。イ、イイんじやね？」

「コウスケはちゃつかり、脳内保存し、今夜のオカズにしよう」とつそり決意するのだった。

「ふふん、当然っしょ！……つて、残り2人の反応は？」

「無いと思うよノリカちゃん、あれ見てよ……」

「んんっ！？」

ミヤの言う事を確かめるべく、ノリカは残り2人＝ヨシヒロ・テツトを散策した。

ヨシヒロは写真撮影場の鏡に映る美麗な自分自身を凝視し、次々とヒーローポーズを行つている。

実に熱心だ。無駄に思えるほど……。

「う～ん、あのポーズも、このポーズもどれも素晴らしい……しかし、ヒーローポーズは欲張るものじゃない……。どれかを取捨選択しなくては……。ああ、恥ましいよ全く」

唚然と顔を引き攣らせるノリカ・ミヤ・カオリ。

次にテツトへ目を向ける。

テツトは淡々と先程の戦闘映像を凝視していた……。

黙々と戦闘を振り返り、今後の戦闘の為にも分析を行っていた。
ああ、こちらですか……と、言わんばかりの呆れた反応を示す

女子3人。

「な、何やつてんの、アレ?」

唯一事情の知らないカオリは素朴な疑問を呟く。

「ロボットの設計……かな? 次のロボットコンテストの……」

ミヤは何とかそれっぽい言い訳を捻出。苦笑いを交え誤魔化しに入った。

「ああ、成程ね。連霸を狙うって事ね」

言われてみればそうだな。と、しつくり頷くカオリ。

今日は初陣も終わった事だし、後はゆったりするつもりであつた……。

しかし、そうもいかなかつた。

テツトのジボードがエマージェンシーコールを受ける。

他、4人のモノも鳴り始める。

ヨシヒロ、ノリカ、ミヤは即座にテーブルへ集合。

「む、ステルスカメラが察知したか……」

テツトはステルス衛星カメラから送られて来た映像を見やる。

すると先程、テレビを賑わせた深大寺の部下のエスパー集団の仲間が出現し、町中で大暴れし出すではないか。

「エスパーなら何やつても許される世界になるのも時間の問題だ!」「俺達の恐ろしさを教えてやる!」

……と、盛大に鬱憤晴らしを始めた。

テーブルに集まり、その映像を見終えたテツト達5人。

「成程……。一般への牽制といったところか……」

「ちょっと、ヤバいじゃんこれ!」

「今すぐ止めにいこうぜ!」

ノリカとコウスケは出動を急かす。

真摯な表情で首肯するテツト。

「ああ。流石にこの場合はな……。行くぞ！」

司令塔の命令を受け、真摯な表情の4人は御意。各々のSボーダーを構え、操作すべく、手を動かす。

「……にしても、何かシユールよねコレ。遠隔操作式だから移動しないでいいから、こうなるんだけど……」

アクション創作物では一斉に駆け出すなどするのが通例。ではあるが、この5人の持つTDには不要。そのズレた行動な為、ノリカは寒い笑いを浮かべてしまつのだつた。

「シユール？ 便利と言え。便利と。」いつは都内限定でならどんに離れていても遠隔操作は可能だからな「

テツトは厳然と訂正を述べる。

「はいはい、そうですね～」

苦笑いを交えノリカは流れを濁す 。

辺り一面に念力や火炎・電撃放射の、超能力が吹き荒れる。市街地に破壊の嵐を巻き起こすエスパー一味。掌から火炎放射させて、狂乱的な笑いを上げる幹部。

外見的に地味でひ弱そうな男ばかりである。

「ヒヤッハッハハ！ 最高の気分だあ！ こうも、本格的な破壊が楽しいとは思わなかつた！」

そこへ閃光の弾丸が横切る。

背筋がビクつき、反応するエスパー一同。

一斉に向いた視線の先=5つの機影・TDがあつた！

「来たな！ TD！」

中央の青いTD・Cオライオンは一步步み、言葉を続ける。

「お前らとは直接会うのは初対面だな。なので、言つておく。俺達はお前達全てを否定しない。憎き相手を多少甚振るぐらいなら許容する」

「何……？」

「つまり、無闇な破壊・牽制活動は止めて貰おう。エスパー一同は「ああ言つてゐけど、どうする?」と、1か所に集まり、談合する。

信用出来ねーよ。

いやでも、あいつら、政治家をボコつてのを止めなかつた実例があるぜ?

確かに……。

そうは言つても、俺らエスパーの楽園国家作りを邪魔する存在だ。戦うべきだろ。

それもそうだな。

よし、殺さうぜ?

……と、談合終了。

即座に5つの機影へ攻撃を開始!

○オンライン、レシュヴァリエ、Gバンディッタ、ウイザースロット、エンゼクロスは戦闘態勢に入る。

それぞれ、同数ずつの敵と応戦開始!

「やれやれ、悲しいよ全く。彼らはチンケな憤り晴らし程度に留まつてはくれないのか……」

迫り来る適を相手に、レシュヴァリエは剣術を駆使!

次々とコンバートスラッシュで敵をデータへ誘つた。

……しかし、真横のエスパーが姿を消し、騎士TDの真正面へ移動。真正面から透明化したエスパーが襲来!

レシュヴァリエ、額の左端から左斜め上へ伸びているカッターのようなツノが折り畳まれていき、フェイスを覆う甲冑的マスクバイザーとなる。

○オンラインのゴーグル同様、これにより、見えないものを可視化させる!

「学習が足りないなあ。味方から聴かなかつたのかい? サーチン

グ機能を！」

キャリバーで敵の透明の拳を受け止め、その隙に脚部のマニュピュレーターを広げ、ビームソードを発生！

突つ込んできた相手を下から弧を描くように、コンバートスラッシュした！

「ずうおりやああつ！」

Gバンディックタは右腕のワイヤーで繋がれた腕部アンカーを発射！
その攻撃は残念ながら回避される。
続いてもう片腕のアンカーを放つ。
こちらも並外れたジャンプにより、かわされる。

「おし！ 掛った！」

上空へ飛んだ相手に応じ、バズーカの向きを上30度に修正。コンバートバズーカ、発射！！

極太の光の一閃にエスパー勢は飲み込まれ、0と1になつた！
Wアンカーの陽動作戦成功である。

両腕を突き出すウイザースロット！

腕シンジンダーが回転し、ガトリングモードに切り替える。
腕周りの裾リングからビームガトリングが掃射される！
攻撃を喰らい、吹っ飛ばされていくエスパー戦闘兵一同。
「テレポーテーションして囮むぞ！」

「おう！」

現場リーダーエスパーの指示の下、一同は姿を消し、ウイザースロットの周辺に出現した。

「喰らえ！」

囮んだ6人の超能力者は火炎・電撃をパールパープルの魔術師口ボヘ放射！

「ふふん、喰らわないっての！ カードビットッ！」

脚部から扇状のカードケースがオープン！ カードビットが発進

する！

それらは表面を向き、火炎と電撃の「盾」となった！

瞳孔を開き、衝撃に誘われるエスパー勢。

「んなつ！？ こいつは切り裂く武器だけじゃなかつたのか！？」

「ふふん、その通りっ！」

ウイザースロットはジャンプし、エスパーの作った円から出る。次いで、腕シリンドラーを回し、今度はビームニードルを出現させる。

「はい、コンバートステイング！」

電光の針に貫かれた標的はデータ化のプログラムを打ち込まれ、0と1に分解されていった！

唸り上げ、超能力者達5人はそれぞれ、蛇・牛・ゴリラ・豹・鷲になる。

ビースト化能力を発動させた！

5匹の動物は天使型TD・エンゼクロスへ飛び掛る！

足の裏と翼先端のブースター、噴出！

エンゼクロスは軽快な身のこなしで、回避していく。

回避出来るのはいいもの、ちょこまか動く相手に照準を定め難い状況でもあつた。

「うーんど、こういう時は……！」

ミヤは策を閃き、キーボードを叩く。

脚部装甲に収納されてある、拘束サポートアイテム・リングビットを発進させる！

捕獲を試みる！

巨大な輪つ渦が飛び込んでくる牛を通過させ、即座に直径を縮ませ。動きの鈍い牛をまずは拘束！ 続いてゴリラも同じように捕らえた！

……しかし、残る蛇、豹、鷲は素早しつこく、中々捕まらない。

かに思えたが、何時の間にか3匹の真横を取つたエンゼク

ロスがアロー・ゴニットの弧=弓部を前方へ倒し、シザーモードにして一気に3匹をガツシリ挟む！

そしてそのまま、ゼロ距離コンバートアローを贈呈した…！

「ふう……」

データコンバートされた相手を見て、ミヤは安堵の息を捨てた。

折り畳まれた砲身が広がつていぐ=ショルダーマシンガン＆レッグルミドルライフルの銃身が光の反射で輝く。

更に、両手に構えるマグナム＆胸部ベルト状のライフルが前方へ立ち上がる！

「一斉掃射だ！」

じオライオンは身に纏う銃器を展開し、一斉にビーム弾を射出！ 対峙するエスパー達へ放つた！

もはや、逃げ道の無い程、空間を埋め尽くす乱射であった。

それはまるで、虛空に星座を描くかのような広大なショット……。抵抗する間もなく、標的はデータへ“変換”されていくのであった。

戦闘終了である。5機は淡々と姿を消した。

メイドカフェ店内で、先程の戦闘を終え、一息を落とすテツト以外の4人。

「あ～疲れた」

「まさか、連戦するとは思わなかつたよ俺
げつそりとするノリカと『ウスケ。

顔が一瞬、老化する程に。

「そうだな。それだけに、回復は小マメにな

テツトはSボードの裏蓋を外し、単3電池2本を新しいものに交換し、Sボードを操作。

オートリカバーを選択し、画面を「NOW RECOVERI NG」と表示させる。

「それもやうだねえ。んじゃ、僕も」

ヨシヒロ、ミヤはテツトと同様、バッテリー交換をし、各自のデータとなつてゐる状態の愛機の回復を実行。

「じーっ……」

と、メイド店員、カオリがジトつと5人の所作を眺める。
その事に気付き、テツト以外の4人は仰天。

「わああっ！ カ、カオリ！？」

「ノリカア～、あんたら何やつてんの？」

「ゲ、ゲームだよお……5人揃つて戦うヤツ……」

苦し紛れに、ミヤはゲームだと言い張る。

「ウスケも焦燥しながら、作り笑顔で頷く。

「そうそう、ゲーム！」

「僕達の、マイブームなのさつ！」

無駄に爽やかなイケメンスマイルを送るヨシヒロ。

「ふうん、ま、いいけど、あくまで口はメイドカフュ、メイドで楽しんで下さいね、ご主人様」

快活な表情でウインクし、カオリはテーブルの空食器をお盆に乗せ、調理場へと、去つて行つた。

マイペースにSボードで、今回のもたな戦闘を振り返るテツトを余所に、4人は「誤魔化せたか……」と、萎むように脱力するのだった。

ミーハーナー 01 『実験！ テツト&ヨシヒロはメイドに萌えるか？』

ノリカ・ミヤ・カオリとその他メイドスタッフはここを談合していた。

「ねえねえ、あの2人がメイドに攻め寄られたら、どんな反応するんだろ？」

メイド店員＝カオリはにやにやしながら一同に疑問を投球した。ノリカはノリノリで話を加速させる。

「確かに気になるねえ。あのスカした2人が赤面発情し、崩れるかどうかは」

「あの2人が赤面発情？ 想像付かないなあ～」

ミヤは困ったような苦笑いを溢す。

「でも、クラスメイトで顔を知ってるあたしら3人では効果は薄いと思う。そ・こ・でー！」

出陣！ メイド店員の1人、身長145？・ロリぶりつこメイド・サユリが鏡の前で自惚れ真っ最中のヨシヒロのペースを狂わすべく、参上！

サユリはわざとずつこけ、ヨシヒロへ抱きつこうとする。自分のキュートセに自身のある彼女はこれでイチコロだと看破しき、実行に移した。

ハツと倒れ来るサユリを察知したヨシヒロは咄嗟にターンし、傾く彼女を抱き抱える。

それはまるで姫を救出した貴公子のようであった。

「大丈夫かい？」

爽やかな笑顔に、白く輝光する歯。まさにイケメンである。

「きや、きやつふ～ん、申し訳無いですぅ。サユリ、ドジっ子なモノでえ～」

「ふふ、下手な演技だね……。まあそれが持ち味なのかもしねりないけどね」

げ、バレてる……。と、笑顔が氷結するサユリ。

結局ペースを崩し、赤面・発情などさせられなかつた。

「さ、仕事に戻りたまえ、メイドガール。僕はイケメンヒーローpõe一ズ考案に忙しいんだ」

渋々身を引くサヨリ。

まじめことなき、作戦失敗である。

悔しがるノリカ・カオリ。

ミヤは「やつぱりね……」と、失笑。

心機一転。

今度はテツト陥落へ攻め入る！

挑戦者は当スタッフ最大爆乳を誇るエリサ。豊満で弾力性抜群のおっぱいを暴れさせ、無駄に身体をくねくねさせ、テツトの目前へ！

これでどうだ？……と、息を呑む女子一同。

「あのあ～ん、ご主人さまあ～ん」

妖艶な言い回しで、エリサはテツトを「主人様と呼称した。「む？」

エリサの存在に気付くテツト。

カオリは勝ち誇った、あぐどい顔をする。

「これはいけないしょ！ エロサ……いや、エリサのパイオツには流石に参るでしょ！」

「うはあ～、楽しみ、楽しみっ！ 鼻血ブーとかやれよお～」

「ノリカちゃん……。鼻血ブーは古いよお……」

テーブル席前。エリサは脳内で、

どお？ 早くあたしのおっぱいに興奮しなさい？

と、魔性の笑みを浮かべる。

しかし、テツトは平常通りのクールフェイスで、動搖の色も脈動の激化も見られない。

「む、店員か……。そうだ、水のおかわりを貰おう」

テツトは渋々と水を飲み切ってカラのコップをエリサの目の前に移動させ、再度Sボードに目を通し、分析を再開する。

己の色香に引っ掛からなかつた事がこの上なく、ショックであるエリサ。

彼女は放心状態の中、こう返す。

「か、かしこまりました……。ご主人様……」

端に隠れて見ていたノリカ・カオリらは顔で目一杯悔しがった。

「くつずれネー、あいつら！」

ノリカはバナナに滑った時並の、盛大なズッコケを披露。

「あ、やつぱり……」

柔和にミヤは苦笑いを行う。

カオリらメイド達はわなわなと怒り昂ぶる。
お、おのれえ！

全ての客を萌えさせて来た我々があ～。

修羅の獄炎を纏つメイド陣であつた……。

そんな事など知らず、テツトやヨシヒロせマイペースに各自のやりたい事をやつていていたのだつた。

テツトは心中で呟く。

(やれやれ、楠らめ。馬鹿馬鹿しい事を……。俺は女などといふ、不確かな存在に幻想・欲望は抱かん……。幻想を抱くのは自分自身だけで十分だ……)

ミーティナー 02 『ステルスサテライトの濫用は止めましょ う』

ぬつとカメラ目線で現われたコウスケ。

「おっす、俺コウスケだ。皆、女子の裸見たいよな？ 僕もだ！ 今回はステルスサテライトを悪用……いや、有効活用して女子更衣室を覗こうと思う！ テツトやヨシヒロは興味ないって断つたけど、俺は見たいからさあ。んじゃ、撮影開始イ！」

「コウスケは嬉々とステルスサテライトを使い、ノリカ・ミヤ達が学校の女子更衣室で着替えをしている映像を撮影した。

室内には数々の下着……。露出された女体の数々があつた。

「あ～あ、また胸だけ大きくなっちゃたあ～。身長の方を大きくしたいのにい～」

「と思うように育たない自分の身体……。萎えるミヤの顔。

やや苦しそうにブラジャーを装着する。豊乳が窮屈そうに暴れる

……。

「それ、嫌味？」

ノリカは後ろからミヤの胸を揉み出す。

他、カオリら友人らもミヤの豊乳の爆発しそうな揉まれ具合に注目。

「うわ、何これちょっと…」

「うらやまー」

「もお～、止めてよお～

頬が真紅と化すミヤ。

ノリカはそろそろ勘弁しておこうと、荒々しい乳揉みを停止する。

「っていうか、ノリカちゃんんだって結構大きいじやん

「やつだけど、あなたには負けんのー。自分に無いものほど、憧れるものは無いよお～」

「や、そう?……」

3分の1ほど納得はするが、どうも釈然としないミヤであった。

「いやあ、目の保養……。保健の勉強になつたなあ～」

鼻の下を伸ばし、コウスケは感慨耽る。

……が、彼の背後に瘴氣を纏う般若と化したノリカの姿が迫つて来ていた。

複数あるうちの、彼女のステルスサテライトが更衣・入浴時には男子を監視するよう設定していた。その為、覗きがバレたのだった。そして暗雲に囲まれたコウスケは……。

「えぎや～つ……！」

EP・03 『ヒリートデストロイヤー』

01

旧校舎階段最上階にて、ラジカセからダンスマージックが響く。ノリカの指示の下、ヨシヒロとミヤがエアロビダンスをしていた。

「はいー、ワンジー、ワンジー……。つて、相馬君あんたはテンポ早過ぎ!」

ノリカはヨシヒロを指差し、一旦ダンスを止めた。

「う～む、難しいねえダンスって。イケメンヒーローになる為に必要だと思い、楠さんに伝授して貰っているけど……。ダンス……実に奥深い」

一方で、ミヤは息を切らし、田を回している。

「で、ミヤは所々遅い。一定のリズムでやらないとダイエットにならないよ」

「う、うん……」

階段に座り、ヨシヒロ、ノリカ、ミヤは汗ばんだ肌をタオルで拭う。

「……にしても、凄いねノリカちゃん、元子役バツクダンサーだけの事はあるよお」

「色々あって中学で辞めたけどね。でも、せつかく習つたモンだからたまには有効活用しないと、って感じ?」

ノリカはニヤハハと笑い、自身の巨乳を突き上げ、モデルポーズを決める。

賑わう3人の一方で、テツトは淡淡を思索にのめりこんでいる。

テツトはデータコンバートしたエスパーを拘留させているメモリーカードを凝視していた。

残る敵は3分の2以上。

まだまだ多い。どうしたものか……?

現状、情報面・固体のスペックはこちらが上。だが、手数の多さと何か隠し持つてそうなD-r毒島に警戒をしない訳にはいかなかつた。

彼は幼き頃からマイペースで孤高な人間である。

基本的に並ぶ事も、他人と同じ事をする事も、他人に仕切られる事も、他人といざこざで縛れる事も、他人に迷惑掛ける&掛けられる事も嫌う。

彼は誰かの影響を受け、新しく何かを始める事は無い。

結果として、自分で選んだ事しかしない。

機械工作も自身が小学生の時、ぶらりと立ち寄った模型店で、自分で見つけた趣味である。

親や友人・知人の薦めなどではない。

ロボットコンテストも単純に勝算がある上で面白そうだからやつた事だ。

そんな彼は何より他人にペースを狂わされるのを嫌う。

故に仕切る。故により合理的な手段で厄介事を駆除する性分なのである。

そんな彼は何度も、より優れた戦略・解決手段をすべく、思案を重ねるのだった……。

旧校舎階段の、テツトら4人より少し下。

コウスケは1人、携帯電話を使用していた。

コウスケのサッカー部仲間だったヒデノリはエスパー隊口を行った日以来、連絡も取れず、学校に来ていない。

何度も連絡しても通じない……コウスケは携帯電話を閉じ、落胆した。

「またかあー。ヒデノリの奴、家にも居ないとはな。ホント、あいつどうしてんだろ?」

コウスケはヒデノリとの出会いを回想し始めた。

あれは中学1年時、サッカー部新入部員が揃つて自己紹介する時の事だ。

「三島ヒデノリっす！ 野望は親にスポーツ叩き込まれただけの糞スポーツエリート共をブツ潰してプロサッカー選手になる事つす！」

2年・3年の先輩陣もコウスケら他1年も、顧問もその突飛な言葉に目を丸くした。

「ほう、スゲエ野望じゃねえか。理由は何だよ？ テメエをそこまで搔き立てる理由」

3年のキャプテン、村田がヒデノリを面白く思い、半笑いで訊ねた。

「それは……このままでは夢がないからっすよ。だって、悲しいじゃないっすか！ 親にスポーツ叩き込まれないとスポーツ選手になれないなんて……。だから、親に英才教育を受けていない人間が口になつて夢を与えなきやいけないと思うんっすよ！」

コウスケは心臓から衝撃を受けた。

ヒデノリの意見・信念に感銘を受けたのである。

「はあ、そりや凄いな。……でも、無理だな。俺ら、超弱小だし」「そうそつ、だってスポーツエリートじやねえもん」キャプテンの村田をはじめとする先輩陣が失笑し、愚かな夢想だと告げる。

「そりかもしんないけど、悔しくないんすか！？」

ヒデノリは腹から声を張り上げた。

「そりや、悔しくないと言つたらウソになるけどせ……。無理なモノは無理だろ。現実見ろ」

村田は本心と事実の狭間の結論をさらうと述べる。

複雑な空気が周辺に渦巻いてしまう。

「お、俺も……エリート共に一矢報いたい！ 親の力を借りて勝つセコイ奴に勝利する爽快感を味わつてみたい……。マンガみたいにさ」

ヒデノリの隣のコウスケが声を震わせながらも迎合。

「おお！ 本当か！」

ヒデノリは歓喜興奮し、コウスケと勝手に握手した。

「ああ。スポーツは正々堂々であるべきだかんな！ 英才教育なんか打ち碎こうぜ！」

それ以降、打倒スポーツエリートを目指し、コウスケとヒデノリはサッカー練習に明け暮れた。

今更努力したところで、追いつけるかは分からぬ。

だが、次第とヒデノリのただならぬ執念に圧倒され、コウスケ以外も触発されて、打倒スポーツエリートへ燃えるサッカー部の面々。

あらゆる時間を割いてサッカースキルの研鑽に研鑽を重ねた。

スポーツエリートに惨敗を喫し、自分らの努力が嘲笑されるまでは

……。

あれは聖アスリート学園との練習試合の事である。

試合は前半の時点で0対3と圧倒されるコウスケ達、岩鉄高校サッカー部。

「ハウスケ・ヒデノリ達はそれでも、諦めず挑んだ！」

自分達だつて一生懸命キツツイ練習に打ち込み、試合に臨んだ故に。

そして何より恵まれた環境で努力出来た憎たらしいスポーツエリートに一矢報いたくて、最後まで足搔いた。

しかし、残念ながら少年漫画的な逆転展開はなく、リードを更に広げられ、0対4で無念の惨敗となつた。

拳句の果てには相手チームの一人、一段と憎らしい顔をした球城ダイスケから屈辱的な言葉を送られた。

「なあ、お前ら、この試合で俺らからボール取つたこと、あつたつけ？」

ダイスケを中心としたこの試合の勝者にして、全員親に英才教育を施されたサッカーエリート一同は侮蔑嘲笑を負け犬達に贈呈。

「んふっくくくく！ 取つた事、ねーよなあ！ フールドゲームだつたモンなあ～」

「つか、お前等体デカイだけの小学生じやねえの？ レベル低過ぎ！」

「いやそれ、小学生に失礼だろ。あ、間違えた俺らのようなスポーツエリートの小学生に対してだつたわ。ヒヤッハッハ！」

他人を馬鹿にする事に長けた一品の顔がそこに羅列されていた。

流石にこの一言には憎悪を抱かざるを得なかつたヒデノリ達だつた……。

「このヤロ……。サッカー教えてくれる親の元に生れただけのクソが……」

「ハン！ 運も実力のうちなんだよ！ 生まれながらのま・け・い・ぬ！」

中央のダイスケが悪態一杯の顔でヒデノリを更に煽る。

「そうそつ、クズの親はクズ！ 科学的に証明された遺伝だよなー 残りの面々も憎たらしさトップ争いに食い込める顔で侮蔑嘲笑の嵐を起こす……。」

翌日の教室で愚痴るヒーテノリ。

「あ～、クソムカツクぜ！ 特にあの球城ダイスケって奴！ 顔も言つ事も全部カンに障りやがる！」

「コウスケは欠伸をしながら、机上のサッカー雑誌を手に取る。

球城ダイスケが『プロ入り間違いなし！ 元サッカー選手球城ダイサクの息子、唯我独尊のサラブレット、球城ダイスケ！』と大きな文字が羅列されたページを捲った。

「あいつ、親がプロだもんなあ。上手くて当たり前かあ～。お、次のページもこいつの話か」

「何！？ 「コウスケ、どんな話だ？」

眉をうねらせ、詠み進めるコウスケ。

「……何々？ 父・ダイサクは語る。『僕はダイスケにサッカーを押し付けてはいません。僕が現役で活躍する姿を見て、3歳のダイスケはサッカー選手になりたいと思ってくれたようです。なので、そんな息子に応えるべく、自分がサッカーで培った全てを託そうと思いました。とは言つても、基本的な努力方法を教えてだけなPositiveButton（笑）。ですが、そのお陰か、サッカーだけでなく、学校の勉強も非常に優秀な成績を残してくれています。親としてこれほど嬉しい事はありませんね』……か……」

ヒデノリ、髪の毛を乱雑に搔き、憤慨を爆発させた。

「カツ、いいご身分だ！ 運良く教育上手な親の元に生れただけのクセしてよお～」

愚痴々と吐露するヒデノリに、コウスケは苦笑いで諭す。

「まあまあ、ヒデノリ、その辺にしておこうぜ」

「わーつてるよ。けど、納得いかねえ。スポーツを知り、努力するチャンスが不平等なのはどうかと思うつての」

「まあ、極端な経験差があるなんて、競技としてちょっとな……。つーか、そもそもスポーツって気楽に楽しむモンじぇねえの？ 大人の英才教育介入自体が邪魔な気がする

「だろ？ その上、エリートじゃないとプロになれないってのも、虚しいんだよな」

「ハハツ、まだ、あいつら全員がプロになるって決まつた訳じゃねーじゃん」

「コウスケ……。そうだけどさ」

「それに、不安定で寿命の短いサッカー選手になつても苦しいだけだつて。親にサッカー選手になるようプログラムされたサッカーエリート口ボの哀れな末路を見て、馬鹿にしどこつじやん？ そう思つてた方が気分イイつて！」

コウスケはカラ元気な感じの笑顔を作つた。

本人なりにビデノリを励ましてているのである。

しかし、肝心のビデノリは糀然としない顔を形成していた……。

回想を終了したコウスケはハツとなる。

もしや……、と氣になつたコウスケはSボードが保存している全てのエスパー連中の映像を見てみた。
まじまじと凝視し、改めて探つた……。

それは、まるで難易度の高いキャラクター探しゲームのようであつた。

暫し、その地味な作業を続けるコウスケ……。
額から汗が一滴、流れ落ちた。

「！！ マジかよ……」

予想は的中。

友は今迄戦場に出向いていないだけで、RPの談合には参加していた。

「…………なあ皆、ちょっと！」

「コウスケは周辺に居るテツト達4人を呼び、4人のSボードへ映像をアップリンクさせた。

そこでヒテノリが実際にいきいきとした顔で、肉体武器化の超能力訓練を行っていた。

ヒテノリの笑顔は非常に真っ直ぐに、歪んでいた。

「……成程、スポーツエリートに対する妬みから、あちらに入つたかもしない……と」

テツトが纏めた要約に首肯するコウスケ。

「ああ。あいつ、スンゲエ悔しがつてだからなあ）。それに、幼い時に父親を亡くして、父親とキヤツチボールしているような奴、羨んでいたらしいから」

そよ風のような溜め息を落とすコシヒロ。

「ま、ここ最近スポーツの上手い奴及び、プロスポーツ選手になるのは親に英才教育を施されたスポーツエリートばかりらしいからね。……ううん、悲しいねえ。先鋭化する代わりに公平性が失われるとは……」

「へえ、スポーツ界もそうなつてたんだあ。何か世襲政治家みたいだねえ、そういうの」

ノリカはそう、感想を呴き、飄々と紙コップジュースを飲んだ。
「英才教育愛けりや誰でもなれる訳じやないけど、まず必要な条件つづ一かな」

「ふうん、そうなんだ……」

呆気になるミヤ。ミヤは複雑な心境になつた。

恵まれた環境・先鋭化された環境の影響を受け、大きな結果を残す人間の話はよく聞く。

自分も、科学者の孫と言う、珍しい環境に生まれた存在である。
……しかし、ミヤ自身は祖父の影響を受け、工学・科学に興味を持つ事はなく、それどころか、理系科目・機械の苦手な少女として育つた。

他の人は祖先・環境の影響を受けたりしているのに、自分は一体何なのだろう？

祖父の遺志を継ぐ、技術力の高い少女になるべきだったのだろうか？

それとも、科学者の血縁に持たなかつた人間に對し、優位に立つのは卑怯なのでならない方が良かつたのだろうか？

今更考へても不毛ながらも、ミヤは一人、悶々とするのだった。

その時である。

センサー キヤツチ！ エスパーが出現し、争いを始めたと知らされる。

テツト達5人はSボードに目をやり、示された場所を把握する。
「場所は……む？」

テツトが、その続きを言おうとした時、コウスケが先にその内容を叫んだ。

「聖アスリート学園だつ！？ あつこは俺達サッカー部が最もボコボコにやれたトコじやんか！」

「確かに、スポーツ選手教育に特化した学校だつたつけ？」
ノリカは記憶を巡らし、呟く。

「よし、じゃ早速……」

緊張し、出撃を試みるコウスケ。

「……いや、待て」

「テツト、何でだよ！」

「この映像、よく見てみろ……。試合しているだけだ……」

「ウスケ達4人はきょとんとなり、テツトの言葉を確かめるべく、再び目を液晶画面に向けてみた。

げていた。

確かに試合と言えば試合である。

しかし、現在の得点は、エスパーチーム＝10点、聖アスリート学園サッカー部＝0点という、通常ではあり得ない点差……。

ゲーム展開はエスパー側が圧倒的。

彼らはサッカーボールごとテレビジョンして、ゴール手前に現われ、ボールをゴールネットに叩き込む・サッカーボールを念力で操り、相手とボールを遠ざけるなどと、トンデモないプレーをしていた。

要するに超能力を駆使して反則的に点を稼いでいるのだった。

「くつそお……。超能力なんて無茶苦茶だあ……」

元サッカー選手息子で、プロサッカー選手間違いなしと謳われたこの男、球城ダイスケは息切れを起こし、滅入っていた。

通常なら、相手を息切れにさせて、自分は涼しい顔をして勝利を飾るというのに、真逆の立場を味わっていた。

「どうだ！？ 一点も取れない処か、試合中ボールに触れられない気分はよお？」

悠々とドリブルをするヒデノリが悪態を贈呈し、ダイスケを引き離した。

目が氷結するダイスケ……自分らがやっていた事をやられる立場に立たされるとは……。

その毒々しい言葉を見舞つた相手を見やる。

本人は負け犬の一匹如き覚えるような程、律儀では無い。故に、ダイスケ自身はヒデノリの事など、覚えていない。だが、平凡な環境に生まれ、特化したサッカー教育を受けられた者なのは分かる。

そんな雑兵風情が超能力を得て、自分達を完全駆逐する……。

「ざけんな！ スポーツエリートであるこの俺様達がお前らクズな

んかに！」

不条理な試合展開に苛立つダイスケは奮起！

ドリブルするヒデノリを追走！

ダイスケは併走する仲間2人と、3方向同時スライディングで奪おうと突っ込む！

が、相手の超能力により、ボールが突如上昇し、ダイスケは無駄に滑るだけに終わった。

ダイスケが立ち上がるうとしたその時！

……には、既に1-1点目が決められてしまっていた。

黙々とこの「コールドゲーム」を視聴するテツト達5人。

「やつぱり来ていたか……。ヒデノリ」

厳然と眉毛をV字にするコウスケ。

「ハハッ、……にしても、凄いねこれ。まるで、大人が子供を甚振つてているようだよ」

美男子・ヨシヒロは爽やかな苦笑いを溢した。

ノリカは長い睫毛の瞳でぼんやりと「コールドゲーム」を観戦しながら、「コウスケに問う。

「ねえ、これってヒドイものなの？」

「ヒドイ処か、ファンタジーだよ。サッカーは大抵1~3点取り合つて決着するモンだ」

「ふうん。無理ゲーって、奴？ イヤなものねえ……」

ノリカのその言葉はこつそりと子役ダンサー時代の経験も含まれていた……。

コウスケは再度、「コールドゲーム」の映像を見やる。

超能力で相手をあしらい、不気味な笑顔でボールシュートを決めれるヒデノリの映像……。

「ヒデノリ……。お前、こんな事やって楽しいのか……？」

コウスケは眉間に狭め、険しい表情で黙り込む。

一方的な試合はその後も続いた。

もはや、ゴールはボールのサンドバック状態。

相手・聖アスリート学園側はのらりくらり走り回り、疲労するだけ。

一瞬とて、相手のボールを奪えない有様。

サッカーエリート連中に徹底的に屈辱を絶望・無力感を与え、ヒデノリ達エスパーイレブンは勝利を飾った。

15対0の大大大圧勝であつた！

観客という形になつてゐるベンチの控え選手達はひそひそと「ザ
マアみる、レギュラーのカス共」と嘲笑に耽つていた。

人一倍、己をサッカーエリートと自負するダイスケは怒り狂い、拳を地面に叩き落とした。

✓ ✓ ✓ ✓ ✓ ✓ ✓ ✓ ✓

そ！ あり得ねえ！ 相手がエスパーではあっても、この俺様達が……親に英才教育を施された俺様達サッカーエリートが負けるだとおつ！？

ダイスケに呼応され、憤慨に悶えるサッカーエリートの面々。

たのだから。

そんなダイスケ達を人型の影が覆う。

……勝者 エフハリモロムの一回である
嘲笑堪えた、爆発しそうな憎たらしい顔のヒテノリ達が膝を地に
着けた相手を見下す。

ヒテノリは以前自分らを侮辱した相手、球城タイスケに、ある言葉を悪辣な笑みを添えて、プレゼントする。

「なあ、お前ら、この試合で俺からボール取ったこと、あつたっけ？……あ！ゴメン、無かつたよなあ。わざわざ聞いてゴメンなあ）。ハハハハツ！」

ヒデノリ達は馬鹿笑いを撒き散らし、更なる屈辱・不快感を送信。すると、食つて掛かるかのように、ダイスケ達は吼えた。

「ざけんなクソがあ！ 超能力使えば勝てるの決まってんだろ」のタ！」

「そうだそうだ！ 卑怯過ぎんだよ！」

「正々堂々と戦えー！ インチキ軍団が！」

聖アスリーート学園サッカー部の面々は揃つて、猛抗議に出た！

「はあ！？ 何言つてんのお前ら。テレビショーンやサイコキネシスを使っちゃいけないルールなんて無いぜえ～？」

冷淡な顔を近づけ、刺殺するかのようにヒデノリはダイスケに反論を放射。

確かにその通りではあるが……。と、口籠る一同。

そうしている間に、ヒデノリに次の言葉=辛辣なトドメの一撃が強襲！

「つーか、お前らだけには言われたくないし。お前らだつて卑怯つて言えば卑怯だろ？ 何せ、サッカーの英才教育を施して貢える環境に運よく生れたからなあ！」

「そりそり、正々堂々するんなら、スポーツ始める時や教育環境が同じじゃないとなあ～」

「はいはい、ブーメラン、ブーメランー！」

「今月の“お前が言うな”大賞受賞作だなこりや、クハハハハツ！」

最後に、中央のヒデノリが、一步前に出て、惨めに膝を突いてくるダイスケの胸倉を掴み、捻る！

咄嗟の事な為、ダイスケは怯え、ビクつく。
獰猛な眼をしたヒデノリらに……。

「俺達はお前らと違い、スポーツを知るのが遅かった……。スポーツをみっちり指導してくれる人と出会えなかつた……。何もかも不利な条件……。分かつたか！ 努力でどうにも出来ない格差の悲惨さをなあ！」

ヒデノリ達は無念の日々を思い起こす。

幼少期＝父親とスポーツ出来る環境の同年代の少年を見て、指を咥えていた事。

少年期＝努力しても追いつけない。スポーツエリート相手に完敗される日々。

青少年期＝スポーツエリートに負けたままでは悔しいので、何度も挑むが、敗退する日々。

……特にヒデノリは幼い時に父を亡くしている為、余計に羨ましい・妬ましいのだった。

今、そんなヒデノリがダイスケに頭突きをかまし、掴んだ胸倉からダイスケを投げ飛ばす！

ダイスケは地面に叩き落された！

痛みに唸りつも、再起していくダイスケ……。

そこへ、ダイスケ達を囲み、木霊する侮蔑嘲笑のラッショウが飛び交う。

人生最初で最大の屈辱を痛感するダイスケ達であった。

「ち、ちきしょおお……」

喉を潰すかのように、屈辱にのたうち回るダイスケ達……。

ヒデノリ達エスパーは満面で、悪辣で、正直な、歪んだ笑顔に溢れていた。

……その時である。

「お前達、それで満足したか？」

響く電子音声。

「！」これはまさか……

「深大寺さん達が言つてた……」

警戒／身構えるエスパー・アスリートの衆。

味方により、この声の正体は把握している。

予想通り、Cオライオン、Gバンディックタ、レシュヴァリエ、ウ

イザースロット、 Hungゼクロスが出現！ 5機は燐然と並び立つ！

「来たか……TD」

ヒデノリは眉を捻り、 ファイティングポーズを形成した。

03

対峙する5つのTDと11人の超能力者。

戦闘開始！

……するかに思えたが、 COライオンは何故かダイスケ達、 聖アスリートが学園の連中の前に向く。

身構えていた反動か、 ヒデノリは脱力という排気ガスを噴射。そして、 メタリックブルーの射撃型TDは何と！ ダイスケの顔を無常に飛ばした。

「んぐはっ！」

蹴り飛ばされたダイスケは後ろの仲間に激突。 ドミノの如く、 倒れていった。

Gバンディッシュタラはその様子を傍観する。

「ウスケ、 先程の事をフラッショバックさせる 。

……それは出撃前。

エスパーとスポーツエリートのコールドゲームの最中。

「お前自身がスポーツエリート共をボコる！？ 何でまた……」

その提案の意図が分からなかつた。 コウスケはテツトに答えを求めた。

「これは実験だ。 あえて苛め程度ならOKと促してみる……。 エスパー共の反応を一度、 見ておきたい……」

「ま、 試しにいいんじゃない？ 無駄かもしれないけど……。 しかし、 君も面白いことを考へる人だ」

ヨシヒロは前髪を搔き分け、 さらりと迎合した。

「い、 いいのかなあ……」

困惑し、ミヤは首を傾げる。

「無念を晴らさぬまま葬る方がよっぽど鬼畜だ。恨みの一つや二つ
ぐらこ、晴らさせてやれ」

「う、うん……」「…

一理アリと言えば、アリな話ではある。

悶々としつつも、一応納得するミヤだった。

「ウスケ、両腕を組み、難しい表情を形成。

「なあ、俺がそれ、やつちやダメか？」

「止めておけ。サッカーで無念を味わったお前がやると、エリート潰しの快楽へ溺れる危険性がる。だから、俺が客観的にボーダーラインを決めてやっておく

「お、おひ……」「…

自分にサッカーエリートに対する嫉妬心が全く無い訳ではない。
奥深くにある事は否めない。故に渋々納得した自分を思い起すウスケ……。

「ウスケは海賊型の愛機を通して、狩人型T-Dの行つ“実験”を再度傍観する。

「おい、お前ら」「…

と、Cオライオンは再び電子音声を発し、蹴り飛ばしたサッカー界のサラブレット達を冷淡に見下す。

「んな……？ 何で俺達を蹴るんだ！ 俺達はエスパー犯罪者に苦しめられる一般人だぞ！？」

「フ、100人に一人だけには笑つてくれそうな、渾身のボケだな」
Cオライオンはヒデノリ達異能のサッカープレーヤーの方へ首部分を稼動させた。

「お前ら！ 恵まれた環境に生まれたエリートは嫌いか？」

きょとんとなるヒデノリ達だが、即迷い無き返答を飛ばした。

「つたりめえだろ！」

「よつし、ならば更にクソエリート共を甚振るうではないか」

「な、何つ？」

怪訝な顔を形成する一同。

誰もがエスパーを討伐しに来たとばかり思つていただけに。Cオライオンはダイスケの首を突如掴み、吊るし上げた！

そして何と！

「言え！ 泣きながら、小便漏らしながら、『僕ちゃん達は優秀なパパ～ンのお陰でサッカーが上手くなつたでしゅう～。アスリートとして卑怯な存在でしゅう～。不利な条件の相手を苛めて喜んでいる低レベルな人間でしゅ～』とな……」

流石に激昂するダイスケ達一同。

「はあっ！？ ふざけんなロボットの分際で！～！」

己のエリートスポーツマンの誇りを汚す行為など出来る訳がない。球城ダイスケらは断固拒否の姿勢を取つた。

Cオライオンは手首を捩り、吊るし上げているダイスケをそのまま逆さまに。そこから地面に投げ付け、頭から突き刺した！

頭から地面へダイブさせられるダイスケであつた。

「調子に乗るな。お前らは被害者でもお客様でもない

「な、何だと……」

他、聖アスリート学園サッカー部・レギュラーメンバーが顔を顰める。

更には顔が地面に突き刺さつてゐるダイスケの腹に蹴りを叩き込むCオライオン。

「やれ！ さつき言つた事を」

「わ……分かつた。だから、助けてくれ」

地面に埋もれながらも、言葉を返すダイスケ。

「そつか……よし

と、Cオライオンは逆さま状態のダイスケの脚部を掴み、芋掘りの如く引っこ抜いた。

「げほつ、げほつ！」

土塗れの顔を払い、乱れた呼吸を整えるダイスケ。

既に泣きたい気分であったが、プライドとしてそれだけは抑えていた。

「この仕打ちを遠目で見ているーションゼクロスの持ち主＝ノリカ・ミヤは困惑

「うわ、えげつなー」

「良いのかな、あんな事して……。ただの嫌がらせだけで気が晴れてくれた方が、データコンバートをせずに済むとは言つたけどお……」

「……」
ウイザースロットとエングゼクロスの持ち主＝ノリカ・ミヤは困惑に浸る。

「不毛だねえ～。この程度で気が済む程度の怒りなら、わざわざHスパーになんてならないと思うけどねえ～」

「シユヴァリエを通してヨシヒロは辛辣な主張を述べた。

最後に、Gバンディッタは悶々と苛められるエリートの姿を眺め、思つた。

「……ハハハツ、ヤベエな。俺が直接やつてたら、ゼッテーエリート苛めが楽しくなって、ブレーキリかなくなつちまつだらうな……」

「ようやく、顔面土塗れになつた混乱から再起したダイスケ。

「ほら、どうした？ やれよ。泣きながら、小便漏らしながら、『僕ちゃん達は優秀なパパ～ンのお陰でサッカーが上手くなつたでしゅう～。アスリートとして卑怯な存在でしゅう～。不利な条件の相手を苛めて喜んでいる低レベルな人間でしゅう～』と…」
威圧的に立つブルー＆ブラックのTド。

軋む歯茎……。

憤慨を堪えつも、ゆつくりと口を動かしていくダイスケ。

「お、俺は……」

即座に冷徹な鋼の蹴りがダイスケを襲い、真横へ飛ばされた。

「（僕ちゃん）だ。一文字一句間違えるな

「クソ……分つたよ。やればいいんだろ？」

ダイスケはよろめきつつも、立ち上がる。

「僕ちゃんは……」

またもや、じオライオンにボロ雑巾の如く放り飛ばされるダイスケ。

「涙と小便はどうした?」

「つて、んなもん! 出せと言わされて出せるか!」

起き上がりながらダイスケは猛抗議する。

「お前、プロサッカー選手になる気、あるんだよな?..」

「ま、まあな」

「ならば、勝利・敗北時に涙を流し、感動的な画を作る力は必要だろ。それに、トイレも出でうと思うときに出せんと、時間が決められている試合の時に困るんじゃないのか?..」

「そ、それは……」

「プロになる気なら、今ここで涙と小便を漏らせ。いい練習だ」

「う、うう……。い、苛めだあ~」

「そうだ。苛めだ。お前より不利な条件の相手にしていた事と同等の理不尽だ。どうだ? いい気分したかあ?..」

じオライオンはダイスケを高圧的に見下す。

背丈は変わらないのに、異様に大きく見えるじオライオン。……。

誇りとして抑制していた涙が、遂に噴出するダイスケであった。

じオライオン、今度はヒデノリ達エース少年らへ向く。

「……この程度なら許容する。どうだ? これだけで満足出来るか?
? 更にはRPを辞められるか……?..」

突きつけられた要求。考え込むヒデノリ達。……。

(さて……これで、どういう反応を示すか……。これで満足してくれるといいが……?)

テットは冷静に眉を顰める。

そう、これは1つの実験であった。

別に倒すのが難しい相手ではない。

しかし、ずっとデータコンバートによる、絶対的な逮捕という形

ばかり採るのも如何なものか？

そもそも、ずっと彼らを端末に拘留しておぐのも如何なものか。

理想としては相手にテロ行為を辞めて貰う事ではある。

ふと、そう考えたテツトは試しに実行してみるのだった。

「全ツ然、足りねえーー！」

ヒデノリは歪んだ顔で空間へ叫んだ！

「ワリイけどよお。この程度じゃ全然気が晴れないんだよー。」

「そうだ！ そうだ！ 倭らが受けた怒りはこの程度で治まらねえ

！」

エスパーチーム11人は不平不満を吐き散らす。

「そりだなあ。こいつらには2度とスポーツ出来な身体にでもしないとなあ

「そりそり、他人がスポーツ出来るのに、自分は出来ない悔しさ位、与えねーと！」

「リハビリさせて、その間スポーツ出来ない悔しさとブランクを与えるつてのも面白れえな。徹底的に凋落させてやる！」

ヒデノリはくしゃくしゃに歪んだ笑顔で、鼻を突き上げた。

「つー訳で、足の1本・2本折らせて貰うぜ！」

エスパーアレブンはダイスケ達曰掛け、突進！ 魔手を伸ばす！

ヒデノリは右腕をキヤノン砲に変換。エネルギー弾を放射する。

「う、うわあああああっ！」

ダイスケ達スポーツエリート連中は怖れおののき、咄嗟に両腕をクロスし、身構える。

「チッ……」

（オンライン、早撃ちガンマンの如く、瞬時にビームマグナムを構え、発砲。

ビーム弾がダイスケ達へ襲来するエネルギー弾から真っ向激突し、相殺させた。

「やはりこうなったか……。柄にもない実験などするものではないな」

「全ぐだよ」

隣にレシュヴァリ工らが並ぶ。

「悪は所詮悪。改心する事などあり得ないのヤ。あるとしたら、元来善人な存在が嫌々悪事をやつていいような場合のみヤ」

田シヒロはレシュヴァリ工を通し、自論を述べた。

「……そうだな。よし、戦闘だ！ 流石に相手にとつて取り返しの利かない致命傷を与える事は認められん！」

テツトの指示の下、5機のTDは散開！

今度こそ戦線に乗り出す！

04

「つおりやあ！」

「コウスケの操作により、Gバンディッタは腕部に内蔵されたアンカーを発射！」

ヒデノリの右腕にアンカーのワイヤーが巻き付き、捉えた！
そのまま、ワイヤーを引き戻し、ヒデノリを引き寄せるメタリックグリーンの海賊TD。

「ぐ、このつ！」

ヒデノリは左腕を突き出し、腕を日本刀に変身させる！
鋭利な刃と化した腕で、ワイヤーを切り落とす！

が、これもGバンディッタ＝コウスケの計算のうち。既に必要なまでに接近していたヒデノリの両脚を自身のから伸びたモノニアリゲーター・ハングで掴み、両手でヒデノリの両腕を掴み、押さえつけた！

「なあ！」

「何だよ！」

「お前、さつきの試合、楽しかったか？ あんな勝ち方して楽しかったか！？」

Gバンディッタは真摯な眼差しで、相手に疑問を投げた。

「楽しかったよ！ 今迄勝てなかつた相手をボコボコに出来たんだ

！ 楽しくない訳がねえ！」

「……そつか。 そうだよなあ

「だろ？」

「……でもなあ」

「ウスケはわなわなと歯軋りをする。

「んあ？」

「ずっとそんな勝利ばつかだとどうだよ……？ 飽きて来ねえか？ 競技は正々堂々同じ条件でやるべきものじゃねえのかよ！」

「！！」

「他人にやられて嫌な事やつてんじゃねえよ！ お前、憎んでる相手と同類になつてんぞ！」

「ウスケ、キーボードを叩きながら思いの丈をぶつける！ 痛烈な針を受け、ヒテノリは黙り込む……。

エンゼクロスはアクロバティックな空中浮遊をしながら、エスペー相手にヒット＆アウエーな攻撃を繰り広げていた。

「くつそお！ 邪魔すんなゴルア！」

石化＝ゴーレム形態となり、タックルしに来る敵勢。

華奢なボディのエンゼクロスはブースターを噴出させ、字を描くように回避。

石化している一回は互いにぶつかり、地面に転落。

ミヤは非常に困った顔をしていた。

「あの～、お言葉なのですが～、皆が皆、親の影響を受けて、技術を施される訳ではないんじやあ……？」

科学者の孫娘ではあるが、全く科学的な知識も技術もない少女・科学へ興味を持つ事の無かつた少女は疑問を投げかけてみた。

「はあ～？ 何が言いたいんだテメエ！」

「いや……その、恵まれた環境にいるからと言つて、優秀な人間になるのは限らないと言いますか……。その……結局はその人次第と

言いますか……

「だから何だ！」

「恵まれたエリートが嫌いな感情は変わんねーよ！」

「そうだ！ そうだ！ 恵まれた環境の奴がイイ思いしている限り、俺達は不平を言い続ける！」

聞く耳持たず。鉱物と化した自身らの肉体の如く、エンゼクロスの一論を弾く！

岩石人間達は攻撃を再開した！

執拗なまでのタックル・突進のラッシュ！

「あ～ん、この人らと会話出来ない！」

ミヤ、涙目になるも、現在は戦闘中。

即、戦闘に集中し直す。

「う～ん、しようがないなあ……」

エンゼクロスの腰から伸びたウイングのハッチが開き、超薄型で細長いミサイルが露出！

それらが発射される！

これらミサイルはホーミング機能を持ち、センサーが認識した標的＝岩石人間と化した異能者を容赦なく爆撃！

激しく飛び交う後、巨大な爆煙が散らばつた。

……煙が退いていく。

その中には人間の姿に解除され、気絶しているエスパーの面々が。まさに恰好の餌食でいる状態。

輝く電光の弓矢！

エンゼクロスはトドメのコンバートアローを放つた！

全ての敵を射抜き終え、パールホワイトの天使型TDは地面にスツと降りた。

「う～ん、そんなにスポーツ選手になりたかったのかな、この人ら

……。他に夢、無いのかな……？」

ミヤはエンゼロスを通して、素朴な疑問を天へ飛ばした。
反つて来る事なき、疑問を……。

「オンライン、レシュヴァリH、ウイザースロットはそれぞれ背中を合わせ、自分達を囲むエスパー達に身構える。

「にしても、凄い殺氣ね……いやあ、圧倒されりやつわあ～」

「悲しいものだよ全く……。戦つても、彼らの怒りを消すまでのことは出来ない……ヒーロー番組みたぐ、ハッピーエンドに出来るかなこの一連は……？」

ノリカとヨシヒロは只ならぬ殺氣・怨念に、苦笑いながらも圧倒される。

テツトだけは涼しい顔で策を思案……。

「よし、一気にデータコンバートだ！ フォーメーション！ 」

「OKえ～！」

「フフ、あれだね。了解だよ」

「オンラインはそのまま待機し、レシュヴァリHとウイザースロットは正反対方向に駆け出す！」

ウイザースロットは走りながら脚部ハッチを開き、カードビット8枚を射出！

周囲へカードは広がって、飛び進む！

ちょこまか動き、敵の目を錯乱させる。

「くそ、鬱陶しいな……」

「潰せ！ 切り裂かれるぞ！」

うち1人の指示の下、腕をキャノン砲と化すエスパー連中はカードへ狙いを定め、発砲！

しかし、カードビットは表面で完全防護・側面で弾丸を両断したりと、駆逐し、そのまま敵勢へ突き進む！

「やられるかよ…」

気を昂ぶらせ、身構える超能力者ら。

「へ？」

……だったが、カードビットは自分達へ攻撃をするのではなく、通過するだけだった。

どういう事が理解出来ない一同。

呆氣になる彼らは通り過ぎていったカーデビットを「こいつ、何処へ行くんだ?」と、見送った。

そんな彼らの背後には既に閃光の弾丸＝コンバートショットが来客していた!

「あ……」

「クソ、フェイクかーつ!」

彼らが連携作戦だったと知った、その時には既に〇と一に変換されていたのだつた。

反対側の敵陣へ、果敢に飛び込む光の騎士＝レシュヴァリエ！
キャリバーを構え、斬りかかる！

……にしてはまだ距離がある。

攻撃体勢を取っているだけだと思つたエスパー連中だつた。

……しかし、レシュヴァリエ＝ヨシヒロはその予想に反する事をした。

柄の部分が倒れ、キャリバーの半分が上下反転し、刃の代わりにビームパネルもとい、銃口からしきものが露出！
まごう事なき銃＝ライフルモードへと変形した！

「拙い！ あいつ射撃するぞ！」

1人の超能力者が看破したのはいいものの、既にトリガーは絞られていた。

走りながら、射撃して来るレシュヴァリエ！

慌てて、逃げ惑う敵陣であつた。

「やられっぱなしでいられるか！ 囲むぞ！」

一同、テレポーテーションし、左右、後ろ、真上が無防備なメタリックシルバー＆イエローの機影へ襲来する！

「フフ、来たね！」

レシュヴァリエは肩・脚のマニピュレーターを展開！

その先端からビームソードを噴き出す！

キャノン砲の腕から放たれる実弾を切り裂く！ 切り落とす！

「く、くそお……」

「ギミック、有り過ぎだろ！」つらー。」

「ああ、まだ使つていないギミックも沢山ある」

その声の発生主＝テット＝のライオンのハンドマグナム、ショルダーマシンガン、レッグミドルライフルの総射が容赦なく出向いて来た！

その乱射は虚空にオリオン座を描いた。

盛大に轟く銃撃音！

10秒後、その周辺には3機のTドビグラウンドに散らばつてあるメモリーカードのみが存在していた……。

05

戦闘も残すトコ、Gバンディッタとヒデノリの1戦のみ。

バズーカ砲撃や、アンカーを腕に固定したまま、ナックル攻撃を

したりと、近接戦闘と射撃の両方を行うGバンディッタ！

ヒデノリも左腕の電動ノコギリ、右腕のガトリングで接近戦＆射

撃線を披露。

Gバンディッタが鋭い碇部を向け、殴りかかる！

ヒデノリは寸前で回避！

ガトリングの雨を至近距離で放つ！

Gバンディッタ、上半身を横へ回し、潜水艦を着込んだような造形の胸部にある、前方中央のタービンを回転させる！

ストームを巻き起こし、相手のミサイルを吹き飛ばす！

そうしている間にヒデノリがGバンディッタの後ろへ回りこみ、電動ノコギリを振り被る！

唸りを上げ、回転する刃！

なんの！ と、Gバンディッタは開いている腕を突き出し、腕内のアンカーをシューート！

ヒデノリ諸共弾き飛ばす！

激しくぶつかり合うGバンディッタとヒデノリ。

肉体強化はされているものの、サッカーの試合を、超能力を使つた後での戦闘。

流石に疲弊し、呼吸が荒くなる。

ヒデノリは地面を蹴り、後退。一旦停止し、荒い呼吸を整え、休息。

「ハア、ハア……」

Gバンディッタも有限な電力で動いているので、今後のペース・サービングを考え、相手と同様動きを止める。

「なあ、お前」

「何だよ、しつけな」

「さつきの試合ははさあ……あれだよ、いい年した大人が子供を甚振つて勝ち誇つてるようなモンだぜ？ 流石にみつともねえだろ！ 目元を歪ませ、ヒデノリは斜め下へと唾棄する。

「……ああ、んな事は分かつてゐよ！」

「……何？」

「でもなあ、あいつらスポーツエリートだつて、同じ事やつてるじやねえか！ 自分らより経験値や教育環境の劣る相手、フルボッコにしてドヤ顔かましてんじやねえか！ それでいて、“僕は天才じやありません。努力の人間です”とか、のたまいやがる！…」

「それは……」

「あいつらは他の人より小さい時から、しかも親に本格的なスポーツ教育されてるズルイ立場のクセしてよお！ スポーツマンなのに、正々堂々としてねえじやねえか！ ムカツクぜ！」

「確かに正々堂々じやないのは分かるけど……」

□籠るGバンディッタの電子音声……。

コウスケには言い返す言葉が見つからない。

「だからなあ！ 天罰を与えてやつてんだよ！ 今迄優位な立場から弱者を虐げた悪人共にな！ その為にはなあ、同じ穴のムジナに

なるしかねえんだよおー！」

猛獣の如く顔を歪ませ、ヒデノリはGバンディッタの背後へテレポート！

「ぐ……」

「終わりだああああああっ！」

ヒデノリの腕＝電動ノコギリが空中へ登り……振り下ろされた！

「んなりー！」

即座にGバンディッタは地面を蹴り、身体を回転！ スレスレで回避！

次いで、バズーカの砲身を棍棒のように使い、上から天誅を下した！

「ガハツ！」

鈍重な鉄槌を受け、ヒデノリは地面に叩き落された！

Gバンディッタ＝コウスケはバズーカの砲身をヒデノリからゅっくりと放す。

「なあ……虚しいだけだって、圧倒的に勝ち続けたって。優位な立場の奴らには、そいつら同士で高レベルのゲームさせりゃいいじゃんか。住み分けつづーかさ」

柔軟な口調で諭すGバンディッタを見上げるヒデノリ。

「お、お前……」

「でもって、プロの試合見て、『スポーツエリートの癖に情け無いぞ』とかって、文句言えばいいじやんか。それも結構樂しいって……」

ヒデノリは俯き、表情が見えなくなる……。

「つむせえ……」

口籠り、唸るヒデノリ。

思わず、身構えるGバンディッタ。

「つむせ——————つ！——！」

空間に響き渡る怒号！

唚然。ピタリと動きを止めてしまつGバンディッタ。

「嫌だね！俺は……俺は優位な立場に立ち続けたいんだ！勝ち続けたいんだ！弱い奴をボコり続けてえんだ！」

羅刹と化したヒデノリの顔は一瞥を吐き飛ばし、テレポーテーションで消え去った。

「ヒデノリ……」

Gバンディッタは荒れたグラウンドを見渡す。

ビームなどの焦げ跡……。所々に散在するクレーター。

何とも酷い光景。

これがサッカーグラウンドだつたとは思えない程、混沌と化していた。

「……俺だって、スポーツエリートはズブリイと思ひナビさ……。でもさ……」

Gバンディッタの鋼の拳は握られた……。ゆっくりと、篤く。

そこへ新たな声が来客。

「あ、あのー」

ベンチに身を潜めていた控え選手らが恐る恐るオライオൺらに歩み寄る。

「んん？ 何か用か？」

「ぶっちゃけ、『ザマア見ろ!』って思つやいまして。球城らがボコられんのを見て」

「君達は……。もしかして、ココの控え選手かい？」

レシュヴァリエの問いに、正解を伝えるべく、控え選手達は首肯。「はい……。球城らよりヘッタクソな連中っす。……でまあ、紹介はそこまで、本題なんんですけど……。どうにかして英才教育、潰せないっすかね？」

「ん？ 何でお前らがそんな事を言つんだよ？ 球城らよりも下手つつつても、スポーツエリート校の生徒だろ、お前ら？」「Gバンディッタは素朴な疑問を投げかけた。

控え選手勢の中央の1人が息を呑み、頷く。

「……確かに、俺らは親に小さい時からスポーツ叩き込まれてこの

学校に通う事は出来たけど、そのスポーツエリート同士でも熾烈な競争があつて……。でまあ、俺らは負けて控え落ちつす。プロなんかマジ論外つす。だからその、今迄の事が全て無駄になつてんつすよね

「何つーか、撃ち碎かれたんつすよ」

「もう、サッカー部辞めてリーマンになる為に勉強しようかつて程に」

「努力はしたんだ……。小学校上がる前から親父のスバルタ教育に嫌々ながらもずっと耐えて来たんだ。けど、弱い。……多分、才能の差なんだろうよ」

「いや、親の教育の巧みさかもな。如何に無理強いにならないようサッカー選手になる努力を継続出来る人間に精神誘導する親の手腕つーか、教育者と相性良かつた運つーか、……」

「5つのTDは黙々と彼らの涙ぐましい独白を聴きに入る。

「だから、内心呪つちゃつてんすよ。スポーツ選手になれないような奴にスポーツを叩き込んだ親を……」

「要するに英才教育なんか極一部の人間だけを勝者にするだけで、殆どがミスマッチな英才教育押し付けられて人生狂わされたり、英才教育を受けられなかつた人間を不利にさせる酷いモノなんつすよ！ 殆どの人間を不幸にするだけなんつすよお……」

「辛氣臭い顔を俯かせて、彼らは主張を終えた。

「あ～、分かる、分かる。中途半端に入り込んでじやつと余計に何とやらよねえ～」

「ウイザースロット＝ノリカモ親に薦められたモノ＝子役バックダンサーで上手いかなかつた経験がある。その為、自分と重なる部分があり、しみじみと同意。

「……成程。『尤もだな』

「オンライン達は悲劇のサッカーエリート崩れ達の叫んだ苦悩を、しかと受け入れた。

「どうにかなんないつすかね……」

「例えば、気楽に子供だけで、大人の介入無くスポーツで遊んで、その中からプロになるつづりにするのは無理なんですかね……。これなら、以前よりも文句はないし、辛い思いもしないと思つけど」「残念だけど、今は……無理だろうな。今は……」

Gバンティッタが弱弱しい声音でムナクソ悪い現状を渋々吐露。

「あんたらなら、何かスゴイ事出来そうだと思って、勝手に色々とブチ撒けました……。すんません」

「いや、気にするな。主張は自由だ」
じオライオンはそう諭す。

「じゃあ……」

軽く頭を下げる一同はそう言い残し、控え選手もとい、英才教育に呪われし若人達はグラウンドを後にすることになった。

5機のＴＤの持ち主らは物思つところがあつて、沈黙を続けた……。

直後に雨が深々と降つていくにも関わらず。

6

その日の夜。鳳ラボラトリに寝泊つたノリカ・ミヤは寝室で睡眠していた。

ミヤは慎ましく縮こまつて寝ているが、ノリカは布団を蹴り飛ばし、ネグリジエをだらしなく、着崩したまま身体をゴロゴロさせる。案の定、じろりとベッドから落下。

その音を聞き付け、ヨシヒロが入室。

ドアの先=床に寝そべるノリカを見て、爽やかに呆れた。

「やれやれ、またかあ。はしたないレディーだなあ……」

柔軟な表情で彼女を抱え、ベッドへ戻そうと囁むヨシヒロはノリカをお姫様抱っこする。

そのまま、ベッドへそっと戻す。

まさに貴公子的振る舞いであった。

「むにゃむにゃ……。恵まれた環境も、そうでない環境も全部ウザイツツーの！ んにゃむにゃ……」

突如叫ぶ寝言に、ヨシヒロは軽い驚きを見せる。

「寝言か……。ダンスやっていて、辞めた過去と、スポーツエリートについての寝言かな？ 意外と話さないんだよねえ、この娘は自分の事を。被害者面したくないのかな？」

「うん、そうだよ」

ミヤがいつの間にか起きていた。

ヨシヒロはミヤの声に反応し、ミヤに目線を持つていく。そつとヨシヒロの両手がノリカの身体に布団を被せた。

「おやおや、君の方が起きちゃとはね」

ヨシヒロとミヤはぼんやりと話をし始める。

「成程、金や権力を使って我が愛娘をゴリ押しする親を持つライバルに負けて、嫌気が差し、業界から去ったのか……」

「うん……。まあ、元々お母さんに薦められたものだつたから、未練はないらしいけど」

ミヤの口より話されたノリカの過去にヨシヒロは感慨耽つた。

「ナルホド。だから控え選手達に共感したのか……」

「うん……」

「ん？ でも、何故彼女は僕を止めないんだ？ 僕は彼女が去った業界へと進もうとしているというのに」

……ノリカは自分の話題で話をしている2人など気付かぬ程、呑気そうな顔で爆睡中。

「多分、他人の夢を奪う権利はないからじゃないかな？」

ミヤは難しい顔をして友の意図を推理してみた。

「へえ～。意外と氣遣い屋さんだな。……さて、そろそろ退出するか。長居し過ぎたよ」

「お休み……」

柔軟な笑顔でヨシヒロはそつとドアを閉め、女子2人の部屋から姿を消した。

同じ頃、テツトとコウスケは近所の模型店で車型競技玩具・コンパクトフォーミュラーを店舗コースにて走らせていた。

テツトの青いマシンとコウスケの緑のマシンがテッドヒートの真っ最中。

テツトのマシンはコーナーやループなどのテクニカルな箇所で抜きん出る。

反対にコウスケのマシンはストレートで稼ぐ。

接戦の末、ミリ単位の差で青い方=テツトのフォーミュラーが先にゴールラインを通過。

テツトのコンパクトフォーミュラー勝つた。

「あちやあ～。俺の負けかあ。今回のセッティング、自信あつたんだけどなあ

2人は各自のマシンを手に取り、走行スイッチをオフにした。

「フツ、技術力では負けられんさ」

「言つなあ。でも、これで俺の3勝5敗。ボロ負けじやねえ。次は勝つぜ」

「ああ。楽しみだ……」

テツトとコウスケは互いに爽やかな笑みを交わした。

2人はノリカが集めるまでは親しい訳でも不仲な訳でもない、只のクラスメイト程度の間柄だったが、共に戦う同士になつた際、小学生時にコンパクトフォーミュラーに熱中した者同士であると判明。以降、定期的に懐かしのマシンを掘り出し、遊んでいたのであった。本日のは気晴らしが目的である。

テツトとコウスケは自分のフォーミュラーをボックスへ収納し、もう一つのコースで繰り広げている若手サラリーマン同士のレースを観戦する。

赤いマシンと黒いマシンの戦い。

赤いマシンがスタートダッシュでリードする。

が、黒いマシンは加速。赤いマシンとの差を縮めていく……。

「よし、行けーっ！」

「そろはいくか！　逃げ切れ！」

と、サラリーマン2人は童心に帰り、熱中・没頭。奏でられる走行音。抜きつ抜かれつの接戦。

その様子を穏やかな目で観戦するコウスケとテツト。「いいよなこういう、不公平の小さいゲームは」

「まあな

が、コウスケはふと表情を物憂げにしてみた。

「……けど、何でスポーツや人生は不公平ありまくりなんだろ？」

「ま、トイホビーやカードゲームと比べ、スポーツは生まれながらの体格なども付きまとうからな。その上、教育環境も大きく左右する。人生も同じで多種多様な環境＝手持ちカードがあるからな……。全く、運任せの理不尽なゲームだ」

「ホントそれ、運が左右する事なんて納得し辛いんだよなあ」

テツトはDボードを開き、現在時刻を確認。午後9時30分近くを回っていた。

「そろそろ帰るか」と、テツトは帰りをコウスケへ仰いだ。

闇夜に照る街灯……。

テツトとコウスケは無気力的に夜道を歩く。

「なあ、テツト……。夜風つて涼しいな……」

「まあな……。む！」

テツトはあるものを発見し、すっと立ち止まる。コウスケも釣られて停止。

「おいおい、いきなりどうしたんだよ？」

「……あれを見ろ」

テツトが放るように指差したその先を見やる2人……。

やや遠くより走つて来る人間＝ジャージ姿でランニング中の球城ダイスケであった。

「球城ダイスケじゃねえか……」

だが、球城は水溜りに足を取られ、水を被つて転倒。しかし、即座にむくりと彼は立ち上がる。

「ふ、ふへへへ……」

球城は不気味に顔を歪ませ、嗤い出す。

「大した事はねえな。何せ俺はスポーツエリートだ。そうだ、エスパー共は何だかんだでＴＤがそのうち全滅させる。俺がサッカー選手として輝く未来は揺るがねえんだ……」

すると、彼の腕時計のタイマーが鳴る。

その音を聞くや否や、拳動不審に球城は震え出す。

「くそっ！ タイマーが！ 時間通りにトレーニングメニューをこなせなかつたあ！」

上下左右不気味に動き回る田に、何者かに操られたかのように不気味に踊る両手指。

「ヤベヒ……。プロへと遠のく墮落の第一歩じやねえか。こうなつたら、さつさとトレーニング再開だ！ 急けた分、取り戻さねえと！ メディアや家族の期待に応えなければならねえんだ……。俺には、プロサッカー選手以外の人生は許されていられないんだ！」

一心不乱に球城はぎこちない足取りで再度駆け出した。

そう、既にサッカー雑誌などで注目されている彼にサッカーから逃げる選択行動・サッカーで突出しない事など、もはや万死に値する話なのである。

進んでいくうち、やや遠方の工事中区域を横切る。

そこにあつた迂回指示を担うロボットと一緒にだけ重なった球城ダメスケ……。

そんな球城の姿を無言で見入っているテットとコウスケ。

「何か……呪われてるって感じだったな……。今思えば、あいつに悪い事したかなあ。横柄な態度もプレッシャーの捌け口だったのかもな……」

「知ってるか？ 一流スポーツ選手の中で、勝利後に笑顔で緩む奴はそのうちの極僅からしい。球城の奴はどうだろうな……？」

「うへえ、まさにスポーツするだけの口ボットだな。つか、英才教育で幸せになつていい奴つて、誰なんだううなホント……？」物憂げな表情のテツト・コウスケは再度歩き進み、夜道へ消え入った……。

「なあ、テツト……。夜風つて、寒いな……」

廃工場。

いつもの通り、ラボには収まらない数のエスパー テロ集団・R P
がこの広い場所に屯していた。

「やはり、T D 5 機は厄介だな……」

額を指数本で支え、深大寺は頭を痛める。

「うつす。それに何だかんだで敵対する存在っす。ヤツラは
唯一帰還したヒテノリは強く首肯した。

「ある程度、こちらの憂さ晴らしは放任するとはいえ、結局我々が
やりたいトドメは差させない！ 美味しい飯の匂いを嗅がせてくれ
ても食わせてはくれないようなモンですよ～ん！ 余計にフラスト
レーション溜まりますよ～ん！ ムキキのキー！」

眉間に皺を集中させ、倉岡は地団太を踏みながら、不満・怒りを
吐露。

「ふむ……報告によれば、まだ新たなギミックを持つてているという
し、何とも邪魔なロボットさんだ……」

「深大寺さん、ヤツラがいる限り、我々がこの国を蹂躪し、恵ま
れし者共を没落させることがなんて出来やしませんよ～ん！」

倉岡はお絵かき帳に書かれたC Oライオンの自作絵を何度も踏み
続けながら、自分らのボスへ現状打破を求める。
深大寺らは黙然と対策を講じる……。

「……仮にあれが遠隔操作式だったとしよう。その場合、あれを操
つている持ち主を探してみよう。取り敢えず戦闘を起こし、その間、
他のメンバーが持ち主を探のだ」

「でも遠隔操作式つて、現時点では憶測つすよね？」

ヒテノリは怪訝な表情で首領へ確認を取る。

「ああ。だが、博士が言つてたんだ。遠隔操作式ロボットを開発していた知り合いの話を」

「！まさかその博士が作つたものだと？」

メンバー一同、ハツとなる。

「恐らく……としか言つていなかつたけどな。まあ、とにかく一回やつてみよう。そして、必ずデータ化された仲間を解放し、我らが理想郷、エスパー格差社会を創設するのだ！」

倉岡・ヒテノリを含む一味は無言で御意した。

02

その後も、戦闘を重ねるTD5機と超能力者達

徐々に減少していくエスパー連中。

仲間を減らしつつも、戦いを辞めない。

敵の正体さえ掴めば、一気に逆転出来ると信じて、彼らは戦い続けていた……。

ある土曜日。

ラボ内の風呂場にて、肌にシャワーを浴びせるミヤ。バスローブを肢体に巻きつけ、台所へ。

「ふあ～、さっぱり、さっぱり～～」

火照った頬。ミヤはボディソープ・シャンプー関連の香りを漂わせる。

冷蔵庫からパックの紅茶と牛乳を取り出し、ミヤは3つのコップをそれぞれへ注いだ。

「……にしても、ホントいい、何でもあるよね～」

ぽんやりとコップに注がれた牛乳を飲みながら、このラボ内を見渡すミヤ。

彼女言つ通り、ここには何でもある。

冷蔵庫・厨房・冷暖房・テレビ・パソコン・風呂・居間などなど

……。

5人で暮らしても丁度いいほどの環境である。

「お爺ちゃん、いつの間に用意してたんだろ、こんなのがいつ」というとミヤは祖父・D・鳳の事を思い出す。

13年ほど前だらうか？

両親を事故で失ったミヤは祖父のD・鳳に引き取られた。祖父であるD・とミヤはマンションの一角に住んでいた。

D・鳳は面倒見もいい祖父であつたが、研究熱心でもあつた。

「ミヤや。お爺ちゃんと研究所へ行くかい？」

幼き日のミヤはいつも熊のぬいぐるみを抱きしめて、祖父の誘いに対し、いつも返していた。

「ヤダ。ミヤ、口ボツト嫌~い。くーたんと一緒に“マジカル乙女コーナー”を見たいもん」

熊のぬいぐるみ=くーたんを抱きしめるミヤは頬を膨らませ、拒否。

……しかし、D・鳳は怒る様子もなく、そつと小さな孫娘の頭を撫でた。

「そうか、そうか。口ボツトは嫌いかあ。うん、それならしうがない。家で大人しくしていなさい。夜7時には弁当買って帰るから」

「うん。分つたあ。ミヤ、待ってるう

「うん。じゃ、行つてきます」

「行つてらつしゃーい」

また別の日。

マンション。祖父=D・鳳の書斎。

彼はパソコンのデザインソフトウェアで、T-Dの原型を設計していた。

Hンゼクロスと似ているが、現在の完成品と比べ、芋臭い。

まだまだ、原案段階のようだ。

そこへ小学生低学年ほどのミヤが絵本を持ってやって来る。

「お爺ちゃん～、えほん読んで～」

「「めんよ。保存したいものがあるんで、保存するまでちょっと待つておくれ」

「うん」

パソコン画面。新たなファイルの中へ設計図を保存する。

「いつも思うんだけど、何作ってるの～。どうでもいいモノなら今直ぐ止めて、ミヤと遊んで～」

「う～ん、「めんよミヤ。それだけは出来ないんだ」

D 「鳳は優しく諭す。

「どうして～？」

「それはね。ミヤとミヤ以外の皆を守る為か。だけど、大丈夫」

D 「は椅子から立ち上がり、用上記のミヤの隣へ腰を降ろした。

「ミヤと遊ぶ事もちゃんとやるよ。そう、誰かを救う為に他の誰かを傷付けては本末転倒なのだからね」

この時のミヤには何を言っているのか良く分らなかつた。とは言つても、寛容な祖父である事に違ひはなかつた。

ふつと我に帰る女子高生の・現在のミヤ。物憂げな顔をしていた。
「……「ermenねお爺ちゃん。機械の好きな子にならなくて……」

申し訳なかつた。

本当は機械好きな孫娘の方が、祖父にとつては嬉しかったのではないだろうか？

そう思つと、今は亡き祖父に対し、居た堪れない心境となつてしまつた。

訓練ルーム内。

リフティングしているコウスケ。現在、友人ととの対立で複雑な心境である……。

そんな時、ドアを叩く音。

次いで、ミヤの「入るよー」という声が。

「んあ？ どうぞー？」

サッと開く自動ドア。

そこへ普段着を着直したミヤが紅茶の入ったカップを乗せたお盆を持って來た。

「瀬戸君。はい、紅茶。テーブルに置いておくね」

ミヤはお盆」とテーブルに置き、自分は近くの椅子に腰を落とす。

「お、サンキュー！ いつただきま～す！」

カップへ手を伸ばしたコウスケは紅茶を口にした。

「……ねえ、ヒテノリ君の事、気になる？」

ピクリと耳を動かし、紅茶飲みを一旦休むコウスケ。

「言つまでもねえよ」

「……だよね」

「あいつの考えも分かるだけに、全否定出来ねえんだよなあ～。けど、やさすがにやり過ぎつてのも間違いない訳で」

「……そうだね……」「……」

「コウスケは懐かし気な涼しい顔になり、言葉を続けた。

「俺、小学生の時、コンパクトフォーミュラーフリー、車の玩具を競争させるトイホビーが好きでさ。これイイんだよな。生まれ持つた体格なんて関係ないし、スポーツや勉強に比べ、親・大人の介入・恩恵が殆ど存在しない。金掛け沢山パーつ付けても重たくなつて遅いから、金掛けりやイイつてモンでもねえ。ある意味正々堂々に近い競技なんだ。……だけど、スポーツや人生はそうはいかねえのは何でなんだろ?」

「うん……」

ミヤは男児向けトイホビーというものは知らない。見た事が無い。だが、何となく『正々堂々氣楽に勝負する事が素晴らしい』と言いたい事は分かつた。

ふと、コウスケはミヤが持つて來たお盆に目が行く。

カツプは自分のと合わせ、3つ。

「あれ？ 残り1個、テツトに持つていく奴じやね？ いいのかあ？」

ハツと立ち上がるミヤ。

「あ！ そうだった！ じゃ、行つて来るねー。」

いそいそとお盆を再び持つ、ミヤはテツトの居るパソコン室へと向つた。

その、小動物がちよこまか動くような画に、思わず笑い噴く口ウスケ。

「タハハ！ あれが科学者の孫娘かよ。普通なら、5人の中で一番仕切るべき立ち居地だろうによお。……ま、必ずしも能力は遺伝するとは限らないって事かねえー」

パソコンルームにて、テツトは黙々とパソコンを弄つていて。画面にはじオライオンと類似しているが、それよりも先鋭的なデザインの設計図が……。

その机の横へカツプがミヤの手より、置かれる。

「紅茶、隣に置いておくよー。」

「無駄にじご苦労だな」

きょとんとなるミヤ。

「気遣いなど無用つて事だ。このラボを提供するだけで十分な貢献だろ」

「そうなのかな……？」

首を傾げ、悄然とするミヤはお盆を抱き、ソファへ腰掛けた。「あたし、何も出来ない事に情けなく思つちゃって……。だからさせて氣配りでもと……」

ミヤはテツトが集中している先=パソコンの画面を覗き込んだ。画面には現在どのT-Dも使用・搭載していない謎の武器=三角型の銃身3つが四角形に組み合わされるよう設計された三連銃の画面が。更にその三連銃は左右下3方向へ展開する動きを見せる。

所謂アニメーションによるギミックショミコレーションである。

「……凄いね星渡君……。一人で何もかも出来て……」

長い睫毛を下ろし、倦げな顔を作るミヤ。

「お爺ちゃんの孫に相応しいのは星渡君みたいなタイプなのかも……」

テツトは無言のまま、パソコンのキーボードを弄る。

「だつてあたし、T-Dとか作っちゃう天才科学者のお爺ちゃんの孫なのに、ぜ～んぜん、機械とか工業とか疎くて……。とこりか、好きになれなくて。今迄お世話になつてた癖に、それ相当の恩返しも何も出来ないなんて」

「フハハハハツ！」

「！？」

高く整つた鼻を突き上げ、テツトは高笑いをした。

「血筋に翻弄されると下らんな。遺伝など絶対的なものではない。親・祖先と関係ない仕事をする人間など幾らで居る。寧ろそちらの方が多い位だ」

つぐづくこの男は良くも悪くもの事実を論破する。ミヤの表情が緩み、ほつこりした。

「そ、そうだねっ！ 自分は自分、つて奴だよね！」

元気着いたのか、ミヤは小さく細い腕を使ってガツツポーズしてみた。

そんな時、ステルス衛星カメラから緊急通信が。

「む！」

「あ、反応が！ 一体何だらう？」

2人は各自のSボーデを開き、確認に入る。

深大寺らが重大な会話をしている映像……。

「ほう、トップの裏会話か……。重要度が高いと衛星機が判断したのだろうな」

様子をSボーデ越しに見るテツト、ミヤ。

上半身裸の深大寺はトレーニングルームからDHC毒島の部屋に来る。

「どうだね？ 新たな能力は」

「最高です博士。一段と漲るこの力……。これなら、TDCに勝てる」

「そうかね。嬉しいよ」

テツトらに傍受されている事など知らず、深大寺とDHC毒島の会話は続く。

「タリと口で二字を描くDHC毒島は、机に置いていたコーヒーを啜る。

「いやあ、今の私が居るのはDHC毒島、貴方のお陰です」

「何だね。深大寺君、今更」

深大寺は物寂しい顔を形成。

鼻息を緩やかに溢す。

「昨日、夢に出たんですよ……。エスパーになる前の悪夢の時代を「そうかね。可哀想に。あの頃がよほど君の心を傷付けたようだね」「そのようです……」

深大寺は過去を振り返った。

それは遡る事、20年近く前になる。

深大寺は極普通な家庭に生まれ、学生生活でも積極的に学級委員・生徒会を務めたりと、リーダーシップ溢れる男であった。

また、正義感も強く、苛めに止めに入るような男でもあった。

その正義感の延長上からか、彼は学生時代から、様々な所業・失態により国民に野次を飛ばされる日本政治に対し、批判的考え方を持つていた。

日本の政治は腐っている。自分がこの腐った日本政治を改变させて魅せる。

世襲のお坊ちやまなんかに、庶民が大半の国民に応えられる政治など出来る訳がない。というか、出来ていない。庶民の自分なら国民の気持ち・需要を汲み取れる政治家になつて、素晴らしい国家を創れるハズだ。だから、絶対に政治家になるんだ！

……と、意気込み、政治家になるべく日夜勉学に励んでいた。

食事睡眠以外はひたすら勉強と言つても過言では無い程、勉強に勤しむ。

自身の志す日本良化へと導く政治家への夢、果たさんと。
血反吐吐き続けるほどの努力の末、高偏差値大学入試・国家公務員試験までは何とか合格に滑り込んだ。

……しかし、政治家として働き続ける事は出来なかつた。
幾ら努力しても手に入らない、政治家必須の3バン=ジバン（後援組織）・カンバン（知名度）・カバン（選挙資金）は深大寺にはない。

彼の持つ、人柄・リーダーシップ・信頼性で支援金やある程度の知名度を調達したものの、結局、多額の借金を無碍にしてしまつた。無謀な挑戦の末の、無残な敗退を喫する深大寺であつた……。

この敗退……納得がいかなかつた。

憎い……。恵まれた環境におんぶに抱つこの人間が。

そんな人間が優位に立ち続け、不利な立場の人間の夢を奪い、劣等感・理不尽を味あわす現実が許せない……。

それを変えようと働きかける事すら出来ない。

深大寺は悪鬼羅刹の顔で怒り狂つた。

そこへ例の如く、派手な色のスーツの営業マンらしき男=後に味方となる倉岡が現われる。

そして、悪魔の囁きを深大寺の耳元へ贈呈した。

深大寺は倉岡に連れられ、ある研究室へと足を運んだ。

目前には、笑顔で歓迎するDr.毒島の姿が。

ペロリと不気味に舌舐めずりをする白衣の老人・その影が深大寺を包む。

「私はDr.毒島。不幸な人間を救う、正義の科学者だよ」

「本当に、私を無償で超能力者にしてくれるんですか？」

「勿論だとも！ 私は人々を……特に恵まれない人々を救うべく、

無償で技術を提供するのだからねえ」

黙然とテツトは映像を閲覧中。

「ほう、向こうのパワーアップの知らせか……」

「それなりの動機があの人らにもあるんだね……」

ハツと、ミヤは祖父の言葉を思い出す。

「誰かを救う為に他の誰かを傷付けては本末転倒なのだよ」と、いう言葉を。

「悔しい思いをしてきた人を救うコンセプト 자체はいいけど、だからといって他の人を苦しめるのは違う気がする……」

呟くように主張するミヤ。

「俺も同意見だあ」

「コウスケが入室。彼は真摯な表情をしていた。

「世襲のエリートらを懲らしめて、結局不利な立場を味わう対象が変わるだけだ。それどころか、もっと酷い格差を生むかもしない。それを許す訳にはいかねえ。……けど、それを阻止する事しか出来ねえのかな、俺ら」

3人の脳裏に、以前面識したサッカーエリートになり損ねた連中の悲哀ノテツト・「コウスケにはフレッシュヤーに呪われている球城の姿が交錯する。

「何か気の毒だつたよね。あの入ら。親の言つ通り頑張つたらしいのに……」

「ふむ。そうだな……。改めて考えてみようか……」

「ああ……考え方ぜ」

テツト、「コウスケ、ミヤは黙々と思案の海に潜る。

一方、ラボに貯蔵しておきたい食べ物・飲み物の買出しに出ているヨシヒロとノリカ。

2人は現在デパートに居る。

お菓子売り場にて、どの菓子を買おうか選んでいるノリカ。

「え～っと、ミヤはイチゴ味、あたしがブドウ味つと」

ノリカは籠にチョコレート2つを放り入れた。

ふと、気付くノリカ。

一緒に来たハズの人物＝ヨシヒロの姿が見当たらない。

「あれ？ 相馬君は……」

周囲を見回すも、それらしき存在は確認出来ない。

「奇遇だねえ。僕もベルセルクジャー、好きなんだあ」

「へえ、お兄さんもなんだ」

「特に5話で5人の心が1つになるのが良いんだよねえ」

男児と青少年らしき会話の声。ひくひくと動くノリカの眉毛と耳。青少年の方の声に聞き覚えが物凄くある。

ノリカは声の発生源＝向かい側へと渡った。

「やつぱり！」

ノリカが向かい側へ移動してみると、食玩コーナーで、ヨシヒロと見知らぬ男児が嬉々と剣王戦隊ベルセルクジャーのプラモ入りラムネを見ながら、トークに弾んでいた。

「うんうん」

男児は渋く両腕を組み、何度も頷く。

「あと、11話も素晴らしい話だつたね。自分の事を棚に上げ、被害者面する一般人らにブラックがビシッと説教かますトコとか」「お兄さん、渋いねえ）。まああのカタルルシスは相当だからね」「少年君、君とはいijjyース飲みが出来そうだよ全く」「嬉しいですねえ、いつか飲みましょよお兄さん」

「つて、何やつとんじゃー！」

ノリカの怒鳴り声に男児は驚き、脱兎の如く、逃げてしまう。

「うわあ、怪人ガミガミババアだー！ 逃げろー！」

両腕を翳し、鼻息を荒げて大憤慨するノリカ。

「だ～れがババアじやー！ あたしゃ正真正銘の現役女子高生じや

ー！」

ヨシヒロは呆れ、冷笑。

「ふう、大人げないなあ……」

「戦隊モノで喜んでいるあんたに言われたくないわー！」

「この人は分かっていしないな……と、ヨシヒロは失望感溢れる目線を送り、鼻で笑う。

「やれやれ……。君、古いタイプの人間だね。ヒーローに感動する心に対象年齢など無いんだよ。そんな事も分らないのかい？ だから、ババアなんて言われるんだよ」

歯軋りし、苛立つノリカ。脳も沸騰していく。

だが、ヨシヒロは寸前で、沈静の一斬を見舞つた。

「おつと、ヒステリックに怒るのは止めたまえよ。ここには『パートなんだ。迷惑になる』

「チツ……覚えてろよ、特オタナルシストめ……」

ノリカは般若の顔で歯軋りを繰り返すのだった。

道路。買い物袋を持つて歩くノリカ。

その後方、ベルセルクジャーの主題歌を口ずさみながら、飘々と歩くヨシヒロ。

「希望のツルギは僕らの胸に」 剣・王・戦・隊ツ、ベルセルクジャーッ ノーブレス・オブ・リュージュッ！」

突如、止まる女性の方の足。

ふと、ノリカの視野に入つたもの……。

小さな映画館だった。

その看板の中にノリカは自分の好きな恋愛ドラマ「どろぬウーマン」の映画版があった。

「へえー。どろぬウーマン、映画化されてたんだ。今度見に行こうかな？」

「なんだ、不愉快の垂れ流し、泥沼茶番劇かあ。僕、ああいうの、苦手だな」

ヨシヒロは小さく嗤い吹くのだった。

ギロリと蛇のような目でヨシヒロを睨み付ける！

「ああん！？ 今なんつった！？」

ヨシヒロは恐れる事など微塵にもなく、主張を華麗に誇り上げた。
「恋愛なんて独占欲によるエゴじやないか。そんな下衆な人間の茶番劇は、僕は苦手だね」

「はあん？ 随分とヒネた事言つじゃない。何かトラウマでもある訳？」

ノリカは酸っぱい表情で真相を探りに入った。

「トラウマ……といふと、ちょっと違うかな？ もうだねえ～」

ヨシヒロはノリカに恋愛を疎む理由を話した。

ヨシヒロの両親は彼が幼い頃より、ケンカの耐えない夫婦であった。

美男子のヨシヒロの親という事もあって父も母も相当な美男美女で、その為か、結婚後でもやたらと異性に好かれ、互いに浮気が多い行動をしようちゅうやつていた。

流石に現在では色恋に枯れ、大人しく夫婦をしているが、ゴタゴタ・ドロドロの色恋沙汰を毎日のように見てはうんざりしない訳がないヨシヒロ。

そういう経緯により、ヨシヒロは恋愛を毛嫌いするようになった。反対に面倒な親を無視出来る絶好の暇潰し手段としてヨシヒロは幼い時からずっと特撮ヒーロー番組を見ていた。

エゴと色欲塗れの両親とは逆に、世の為人の為に戦うヒーローに感動を覚えた。

今でもその感動を持ち続けている。

それが相馬ヨシヒロなのである。

「へえ～。色々あるんだねえ～。悪い事、言っちゃったかなあたし」「気にしないでくれたまえ。僕の心は狭くないよ」

「つてか、あんた俳優志望じゃなかつたつけ？ 恋愛モノ嫌がつてちや、食つていけないんじゃないのぉ？」

眉毛を歪に動かし、ノリカは首を傾げながら睨んだ。

「フ、苦手な者・共感出来ないものでも演じきるよ。大体、経験なんて必要でもないと思うよ。例に犯罪したことない人間が犯罪者を演じる事なんてザラだし……」

ヨシヒロは美顔を斜へ向け、鼻で晒つて魅せた。

まあ、『尤もといえば』『尤も』。

ノリカは呆れ、両肩の力を抜いた。

「はあん。ナルシストと特撮オタクのハイブリッド……忙しいキャラね、あんたは」

ヨシヒロは突如、バク転をし、本人がカツコイイと思つてているポーズを取る！

「ヒーローは世の為人の為に動ける素晴らしい人間だよ……実際に健全で、人類の指標となるものさ。いや、教科書と言つてもいい……」

「はん、随分言つてくれるじゃない……」

ノリカ、虚勢を張りつつも言い返せず、言葉を詰まらせる。

「僕は恋人一人のみを守る心の狭い人間よりも、なるべく多くの人間を守るカツコイイ人間になりたいものだね……。まあでも、クズへは鉄槌を下された後に助ける主義だけど……」

ヨシヒロは本人にとつてカツコイイと思うポーズを新たにとり、美麗に語つた。

「それが、あんたのヒイロイズムねえ～。ムカツクけど、立派ジャン……」

「君はどうなんだい？ 戦いに参加していって事は、それなりに正義感があるんじゃないかい？」

見透かしたかのような笑いを交え、ヨシヒロは核心を突いた。

本人も認めたのか、釣られて笑い出す。

「ふふ、そうね……あたしはただ、ミヤの役に立ちたいだけよ……。そりや、エスペーが支配する社会になつて欲しくないのもあるけどさ……」

「へえ……」

「あの子、どつちかつーと、引っ込み思案だからさ……。あたしが居ないとあんたらを仲間に出来なかつただろうしね」

「フフツ、確かに……」

目を閉じ、美男子は風に靡かれた。

そこへ突如、見知らぬ女性の悲鳴とSボードのエマージェンシーサウンドが同時に響く。

「な、何？」

「悲鳴と反応が同時に……？ 確かめて見よつか」

ヨシヒロはSボードを開き、確認。

電撃や火炎を放射する人間＝エスパー連中に襲撃され、逃げ惑うカッフルらしき男女の何組かの映像を芽にする2人。しかもその場所はここから近くである。

「間違いないよ。悲鳴とセンサーが反応した場所は同じ……」

ヨシヒロの予想的中。ステルス衛星機の知らせと悲鳴は同じ事象であった。

04

Sボード画面で放映される映像……。

噴水や洒落たカフェのある場所にて、カッフルらしき存在が、容姿が微妙なエスパー連中が繰り出す念力や火炎・電撃放射に苦しめられていた。カッフル達は必死で逃げ惑う。

「いやーっ！ 止めてーっ！」

「俺達カッフルが君らに何をしたと言つんだ！ 止めてくれ！」

うち1組のカッフルは一方的な暴虐に意義を呈した。

しかし、エスパー勢の表情は悪鬼羅刹と化しており、「止めてくれ」という安い言葉程度で止まるとは到底思えない怨念を纏っていた。

「ムツカツクなあ、わざわざ人前でいぢやつきやがつてえ！」

「リア充爆発しろお……」

「存在そのものが腹立つんだよ！　まるで自分達がいちやつく事が神聖であるかのように振舞いやがって！　お陰で恋人持たない人間が否定された気分にさせられるんだよ……」

「寂しい気分にさせられるんだよ！　どうにかしやがれ！」

「そうだ、そうだ！　いやつくんなら家のなかでこっそりやれ！　人前でやんな！」

只ならぬ熱量と怨念のオーラで放たれた激昂！

火球や雷の矢を発射し、憎きリア充カツプル共を消さんと暴れるエスパー達。

「お、横暴だーっ！」

彼氏の方が不条理を叫びながら、爆発に吹っ飛ばされ、空中へ抛り飛ばされた。

まるで、ペットボトル口ケットのよつに軽い飛びっぷりだった。

壁に背中を預けるヨシヒロ＆ノリカ。

近くのビルの壁に隠れ、その様子をラボードを通して閲覧。

「今回はそう来たか……やはり、恋愛は下らないエゴだなあ。この世に恋人など居なければ、こんな事件など起きなかつたのかもしないねえ～」

「まだ言うかあんたは……」

「事実だからね」

ノリカは無言で呆れ、肩の力を抜いた。

「……しかし、僕ら、現場の近くに居るけど、このまま戦つて大丈夫かな？　エスパー連中に僕らがTD操つてんのバレるのは拙いようだ……」

ヨシヒロは現状分析し、危険・リスクを危惧する。

「あんた、ヒイロイズムはどうしたの？　ここから離れている間に死者出るかもよ？」

反対に、ノリカは挑発的にヨシヒロに次に如何なる行動を取るか選

択を強いる。

確かに呑氣に隠れ場を探してから戦うのも拙い。

「……そうだねえ。引き下がる訳にはいかないかイケメンヒーローとして……」

「はん、そうこなくつちや！」

両者、不敵に唇を動かし、Sボードを構える。

05

「君達っ！ 待ちたまえっ！」

気取った口調で閃光騎士＝レシュヴァアリエが舞台の主役と言わんばかりに、光臨！

「ハン、見苦しいハつ当たりは止めな！」

その隣に紫の魔術師、ウイザースロットが出現！

「やつぱり来たな！」

「ふへへ、狙い通り……」

ハツと、眉を顰めるヨシヒロは「狙い通り」という言葉を脳内にしつかりと引っ掛ける！

何か裏がある。

そう察知するも、現状を放つておく訳にはいかない。

このエスパー連中はこれから本気でカッブル共を殺す気のようなので。

故に……戦闘スタート！

レシュヴァアリエは5人の超能力者との対戦を受け持つ。

降り注ぐ火炎放射！

それを左腕に固定されたシールドで防御！

散開し、レシュヴァアリエを囲み、残り4人は火炎・電撃を放出！

対するレシュヴァアリエは両肩・両脚のマニユピュレーターを進展させ、今回は先端からビームソードではなく、ビームバルカンを発射する！

迫り来る攻撃を相殺した！

直接戦うのは初めてではあるが、深大寺らから強敵であると知らせを受けている一同。

改めて手強さを痛感する。

「やれやれ、君達、哀れだねえ」

「シユヴァリエはキャリバーを下ろし、呆れ出す。

恋人を持たぬ自分らを惨めに思つたのだと判断し、エスペー一同は憤る。

「んだと！？ テメエもしかしてモテる人間か！ その面出しあがれ！ 異性がドン引きする位にぐしゃぐしゃな顔にしてやる！」

ガイコツに皮が張り付いただけのような外見の男、本田が血眼になつて憤慨！

見えぬ攻撃＝念力波を放つ！

「それは勘弁して欲しいなあ。僕、俳優志望なんだよねえ！」

騎士TD・レシユヴァリエ、額左端のカッターホーンを畳み、マ

スクバイザーに変形！

サーチングモードに！

バイザーを通して見える映像……。

念力の流れを捉え、レシユヴァリエは華麗な足さばきで念力波を回避。

そのまま駆け出し、キャリバーで本田を叩き飛ばす！

ドボン！ と、散る水飛沫。本田は噴水へと落ちた。

額を触れ、呆れるヨシヒロ。

「そもそも、僕は君らが恋人を持たない事を哀れんでいるんじゃないんだよ……」

「何イ！？」

どうやら自分らが思つていた感想と違う意味合いで憐れんでいたらしい。

真意を聞くなど、一同は動きを一旦停めた。

「哀れんでいるのは都合のいい他人に縋り着こうとする弱き心に対

「…」

弱い心
？

「 そ う さ つ ！ 都 合 の い い 他 人 な ん か 存 在 し な い ん だ ！ 求 め た と こ ろ で 虚 し い だ け じ ゃ な い か つ ！」

「シユヴァリエはキャリバーを後ろへ放り、両腕を広げ、高らかに謳つた！

まるで舞台の主役かのように振舞う。

口ボットがやつてゐる為、何とも珍妙な光景だ。

この機体はまたモヤ舞「俳優の如く台詞を紡ぐ！」

「そんな心捨てて、皆、ヒーローの心を持とうじゃないか！見返りなど、都合のいい他人など求めず、世の為、他人の為！ 素晴らしいと思わないかい？ 大丈夫！ 恋人なんか居なくても生きていけるよっ！」

おいおい、いきなり何を言い出すんだこいつは？

「ヒ、ヒーロー……？」首を傾げたり間抜けに口を開けるエスパー一味。

「シユヴァリエは強く首肯。

「そうさー、ヒーローのように強い心を持つう！　ヒーローは時に孤独でも、味方より敵が多くても戦う……見習つてみないかーい？」
しけた田でエスパー隊組織の一昧は「どうするよ？」と、顔を見合わせる。

……を無理だな

卷之三

卷之三

「え……」
ヨシヒロの希望に反した痛烈な返事がマシンガンの如く、押し寄せて来る。

「俺はお前ほど心が強くない！」つーか、出来ていたら現実と向かい合って、エスパーになんてならねーよ！」

「つか、お前脳みそ何歳だよ！ ヒーローなんてテレビやマンガの世界だけだ！ 現実にはエゴイストしか居ないんだよお！」

「現実の人間は弱いんだ！だから傷を嘗め合ひつ相手を欲しがるんだよ！ 悪いか！」

レシュヴァリエは圧倒され、半歩下がる。

無念……。

訴え虚しく、一蹴された。

「ああ……。そうなのかあ……悲しいよ全く。弱き心は悪だなあ……」

落胆するレシュヴェリエの隙を窺い、敵連中の1人がこつそりとテレポーテーションし、投げ捨てられたレシュヴァリエのメイン武器、キャリバーを手に取った！

「ヒーロースピリッツを共有出来ないとは……。嫌だなあ、多種多様な人間って……」

ヨシヒロはレシュヴァリエ共々、悄然と頭を落とす。

そういう間に、キャリバーを突きの構えにし、エスパーが猛進！

「うおー！ 自分の武器で潰れろー！」

その声でようやく己へ来る攻撃の存在及び、武器が奪われた事に気付くレシュヴァリエ。

「うわ……。いつの間かキャリバー盗られてるよ……」

応戦すべく、残る武器＝各装甲のマニコピコレーターの展開を試みる。

……これもいつの間にか残りのエスパーがレシュヴァリエのボディにしがみついており、ギミック稼動を邪魔しているではないか！ 絶句するヨシヒロ！

「んなー？ 落ち込んでいる間に！ 参ったねこれは……」

キャリバーを持つエスパーは飛翔し、レシュヴァリエの真上に！ 続いて、垂直落下！ 確実に頭から体躯を真っ二つにする作戦に出る！

「ぐ、ぐそ……」

「シユヴァリエは身動きがもう取れな……。」

「……とでも言つと思つたかい？」

「……い訳でもなかつた。」

額部のカッターホーンからビームカッターを飛び出させ、巨大な電光刃を額に構える！

敵のキャリバー垂直降下をビームカッターで受け止め、即座に弾き飛ばす！

次いで、わざと身体を傾け、寝そべるような体勢を取り、レシュヴァリエは地面に叩き落ちた！

「ぐあああっ！」

落下激突の衝撃でレシュヴァリエから放り飛ばされる4人のエスパー。

今だ！

「シユヴァリエは両肩・両脚のマニユピュレーターを今度こそ広げ、ビームソードを先端から噴出です！」

「纏めて……コンバートスラッシュ！」

地面に叩きつけられた4人の超能力者は起き上がろうとするが、起き上がる前に変換プログラムを打ち込む斬撃＝コンバートスラッシュの餌食となつた！

4人を撃破はしたが、一息する暇もなく、キャリバーで切り掛かる最後の1名が襲来！

「仲間のお……仇だあ！」

大剣は振り下ろされた！

「なんの！」

ヨシヒロは瞬時にキー・ボードを叩き、対応指令を愛機へ送つた！

掴んだ！！ 真剣白刃取り！！

寝そべつたレシュヴァリエは「両足の裏」でキャリバーを絶妙なタイミングで挟んだ！

まさかの神業。

衝撃を脳に走らせるエスペー！

「白刃取りだとおつ！？」

更にレシュヴァリエは両手を地面に着け、上半身を起き上がりさせ、そのままブレイクダンスするかのように脚部を捻る！

相手そのものを回転させ、地面に叩き落した！

パラソルへ放り落とされた最後の1人。

「ハハハ……。今度からは容赦なく倒そう……」

失笑を交え、反省するレシュヴァリエは起き上がり、キャリバーへ手を伸ばす。

「くつそお！ セめてのせめてだ！」

パラソルを下敷きにしているエスパーは念力波を放ち、キャリバーを粉碎した！

ブレード部分右半分が動物に齧られたかのように滅却されてしまふ……。

「うわあ……。壊されちゃったか……」

ヨシヒロは顔を酸っぱくし、溜め息を捨てた。

どうだ！ と、悪ガキのような笑みになるエスパー。

しかし、彼の前に甲冑らしきものの影が被さる。

「悪いけど、武器がある限り、データコンバート出来るんだよねえ

」

轟く斬激音！

脚部のマニコピューレーター先にある電光の剣が目標を切り裂いた！

06

同場所にて、ウイザースロットVSエスパー復讐鬼。

腕をリボルバー やガトリング、バズーカなど、銃器に変身させ、敵一同は紫の魔術師TDへ一斉掃射！

対して、広がっていくカードビット！

縦横無尽に動き回り、周辺に被害を出さぬよう、怒涛の防御を魅せるカードの表面！

「も～、こいつら、器物破損させる気満々でやんの……。鬱陶しいつたらありやしないつ！」

苛立ちつつも、ノリカは複雑に指を動かし、カードビットに防御を託す！

……しかし、負担は大きく、1～2枚ほど破壊されてしまう！いつもなら5体で戦うところを今回は2体で受け持つている為か、必然的に1体1体の戦闘負担が加味される……。

そういう状況下であっても、このままではいられない。

そう判断したノリカはカードビット操作をオートモードに切り替え、ウイザースロット本体を動かす！

腕のシリンダーがカチカチと音を立て、回転。バルカンモードに！

両腕を上30度ほど上げ、閃光小弾を豪雨の如く、発射！と、同時にサポートアイテム、カードビットを即座に退却させる！敵の動きを固定させ、こちらが防御一辺倒となっている。と、思わせて、防御キャンセルと攻撃を同時に行い、極端な攻撃へ転じるのだった！

ノリカの戦略にしてやられた敵陣はデータ化する弾丸を撃ち込まれていった。

前衛が攻撃を集中して葬られる一方で、後衛は散開！

空中に緩やかな曲線を描き、ウイザースロットの真上に移動！真上からの一斉掃射……逃げる道など地下へ潜らない限り、存在しない、至高の攻撃場所である。

味方を無駄死に「正確には死ではなく、拘留だが」を無駄にしない為にも、容赦なく各自の持つ重火器をブツ放つ！！

「フハハッ！ 逃げ道はないぞっ！」

勝った！ そう悟るエスパー勢。

「はあん、こう来た訳ねえ～。だつたらコッチはこいつするまでよお！」

ノリカの指がキーボード上でタップダンス！

散開していたカードビット6枚がウイザースロットとHスパー達の攻撃の間に割つて入る！

只単に防御をするのかと思ひきや、カードビットはそれぞれ均等な位置で停止。

更にそれらを光の線らしきものが繋いでいく。

真上・真下から見れば一目瞭然なのだが、陣形……というよりも、魔法陣を描いたようなものになる！

カードビットが描く魔方陣のようなものは光輝き、上方へ毀れんばかりの光円柱を伸ばし飛ばす！

「カードフォーメーション！ ゲート・オブ・ノヴァッ！！」

そのビームタワーは降り注ぐ銃撃・砲撃を呑み込み、相殺した！しかし、相殺した為、更に上に位置するエスパー勢へは攻撃を届ける事は出来なかつた。

「あちやあ～、8枚全部じやなかつたから、このまま倒せなかつたかあ！」

相殺出来た事自体は嬉しいが、本来の効力を發揮出来なかつた為、ノリカは少々残念がる。

「……まあいいわあ！ まだまだ戦えるし！」

エスパーらは魔方陣形成の、広範囲攻撃に恐れを抱き、新たな戦法に出る！

「接近戦に切り替えるぞ！ それならカードフォーメーションも使えまい！」

「ラジャー！」

5人の超能力者はテレポーテーションでウイザースロットの周辺に出現！

今度は両腕を剣やチャーンソウなど、近接戦武器にチェンジ！一心不乱に切り掛かつた！

応戦すべく、ウィザースロットは袖からビームードルを取り出す！

チャンバラ合戦となる！

しつかり防御は出来るが、中々攻撃に転じ難い状況……。
ノリカは眉をひくひく上下させ、苛立つ……。

「あ～、何か腹立つて来たわあ～。そもそも、こいつらにはモテる努力本当にしたのかつて説教したいんだけどなあ…………」「ニードルで攻撃を受け止めては弾き飛ばすの繰り返しを行う紫のTD。

敵勢の1人、このチンタラした状況に激昂。

「くそ！ しつけえんだよ！」

「こっちの台詞だつづーの！ あんたらの不満なんか、他人にや知つたこっちゃないんだつづーの！ ホント、腹立つんだけど…」

ウイザースロットは憤慨と同時に右腕のニードルを収納し、バルカンモードへ切り替え、目前の敵へブツ放つ！

鉄鋼の剣とチエーンソウ＝両腕をクロスし、防御を取るが、相手は遠く吹っ飛ばされる！

「そもそも何だよ！ ある程度の復讐は許してくれるんじゃなかつたのかよ！」

背後から腕バズーカを撃つエスパーが疑問もついでに投げる。

その答えをノリカは愛機を通して、伝える。

「いや、あんたら明らかに殺す気だつたつしょ！？ 流石に殺しは放任出来ないっての！」

「うるせえ！ リア充実を爆発させて何が悪い！」

と、吼えながらチエーンソウの腕を振るう相手をウイザースロットは身体を反転させ、回避。同時にニードルで突き飛ばす！

相手は肩を突き刺され、差された部分が0と1にさせられる。身構えるウイザースロット。

今度は姿を消す敵……。

ウイザースロットはそのまま、待機。

クリアーライエローの魔術師らしい造形の1つとなっている、口元のマスクローブが上＝目元へ上がり、バイザーとなる！ サーチングモードとなり、見えぬ敵を捉える！

無色の敵一同は標的＝紫の魔術師型ロボットヘソード・チエーンソウを振り翳した！

「よし今だつ！」

斬られる……ギリギリのトコでジャンプ！　相手同士を激突させる。

更にカードビットの表面を前にし、エスパー勢を押し競饅頭状態にさせた！

「カードフォーメーション、プリズンド・デス！」

エスパー連中を押し当てたカードビットは一旦離脱し、表面からビームを一斉掃射！

身動きがようやく取れるようになつたかと思つたら、トドメの集中攻撃。

何も言い残す間もなく、データとしてエスパーは葬られた。やつと終わつた……。

ノリカはオバサン臭く安堵の息を抜く。

「…………」にしても、悔しいけど、相馬君の言う通り、恋愛つて醜いエゴなんかねえ。あたし、ドラマの綺麗な恋愛、見過ぎだつたのも……。自分自身、経験もないしなあ……」

もやもやするノリカは葛藤の中、脳が噴火し、キレる。

「あ～もう、知るか知るか！　あんたらの理想の人間なんて現実いねえよ！　恋なら2次元にでもしておけー！　萌えアニメで萌え」とか、ブヒィーとか言つておけー！　他人にハツ当たりすんなやーつ！！」

思いの丈を吐き飛ばし、我に帰るノリカは失笑・自虐した。

「…………って、相手葬つた後に何言つてんだろあたしや…………。まあでも、戦いながら説得なんて呑気過ぎるかあ～。そこまで技術ないし」ノリカ、脱力し、コンクリートへ尻を落とした。

敵を全て電腦の世界へ封印した。

事件を落ち着かせた。

「あ～疲れたあ～。精神的に……」

ノリカは買い物袋から先程購入したペットボトルの炭酸グレープジュー^sスを豪快に飲んだ。

「お疲れさま」

隣のヨシヒロは淡白に労い、自身は己の顎を摘み、思案に浸る。ヨシヒロは妙に引っ掛けっていた。

「……にしても、妙だ。恋人漬しが、奴らの目指すエスパー格差社会作りに関連するのだろうか……。それに、テツト達3人が今回戦いに現われなかつた……。まあ、こちらに関しては僕らだけで十分だと思ったのかな？」

……見ている。

観られている。

そんなヨシヒロとノリカの姿を。何者かが……。

「……見ていたか？」

「ああ、間違いない。奴らは“戦つていたTDと同じ事”を喋つていた”

「うむ。博士の言つ通り、一般人が遠隔操作していたものだつたか……」

「よし……」

ヨシヒロ・ノリカを覗く面妖な影……複数の影。
それが動き出し……。

何かが迫っている事も知らず、休息に浸るノリカとヨシヒロ。

「んじや、僕もスポーツドリンクでも飲もうかな？」

ジュー^sスを飲むノリカを見て、ヨシヒロも飲みたくなり、買い物袋へ手を伸ばす。

その時！ Sボードが警告音を発する！

「……」

ヨシヒロは即座にDボードの液晶画面へ目を送る。
ノリカは慌てて、ペットボトルから口を離し、ヨシヒロに何が起
こつたか訊ねる。

「ちょ、何？　また敵！？」

ヨシヒロは目が凍結し、絶句。

「さうか……そういう事だったのか……」

ヨシヒロの言葉が理解出来ないノリカは具体的な内容を問う。
「はあん！？　どういう事？」

「ヒヤーハツハツハア！　こういう事だあ！」

挑発的な口調……。どう考へても味方ではない。

考えられる事はただ1つ。…………新たな敵。

狭いビルとビルの両隙間からエスパー隊組織・R.Pの仲間が到
来！

エスパー連中は空中を浮遊し、上下の空間を占有。
逃げ場を完全に封鎖している。

……つまりは、散策部隊にヨシヒロとノリカを発見され、囮まれて
しまったのであつた！

詰まるところのピンチである。

互いの背中を合わせ、険しい表情をする2人のT.O使い。

「う、嘘でしょ…………しかも囮まれちゃつてるし……」

「成程ねえ……。さつきの戦いは僕らを探す為のものだつたか

美男子の方は爽やかに呆れ笑いを溢す。

「つて、笑つてる場合じゃないし！」

2人を囮んだ猛獸の如しエスパー達が……雄叫びを上げ、飛び掛つ
た！！

01

敵に囮まれてしまつた以上、ヨシヒロとノリカの採るべき選択は限られている。

1、諦め、降伏すること

二人の性格・信念的に不可能。といふか相手が応じるとは思えない。

2、真っ向から戦う！

出来なくはない。しかし、先程の戦闘でエネルギーを消耗し、武器も破損させてしまった。

手持ちの予備バッテリーに交換すれば再び全開で戦えるが、損傷したバッテリーを回復修理するには、鉄屑など、金属を取り込み、リカバー用のデータにするしかない。

武器修復を抜きにしても、今この状況でバッテリー交換を呑気に行えるか？

……大変厳しいだろう。

相手はエスパーで、現在の自分らは丸腰の人間。

「さて、どうしようかな……」

ヨシヒロは半ば諦めの入った口ぶりで失笑。

「どうもある訳ないでしょ！ 戦いあるのみ！」

「けど、この敵数に、現在のエネルギー配分が釣り合つとは……」

「分つてゐつて！ あたしが暫く踏ん張るから、その間、あんたは

バツテリー交換しな！」

「やっぱ、そうなる？』

「それしかないつしょ？」

「まあね……」

ヨシヒロは「やつてやるか！」と、眉を釣り上げた。

が！

「何もさせねえよ！」

ヨシヒロ・ノリカ双方の目の前に敵1人ずつの姿が唐突出現！ テレポーテーションで、強引な先手を相手は仕掛けて来た！

エスパー2人はSボードへ手を伸ばす！

衝撃音が狭い空間に響く！

ヨシヒロとノリカへ接近したエスパー2名の首は機械で構成された手に掴まれ、放り飛ばされ、後方の仲間と激突した！

鉄鋼の手に鉄鋼の体躯……。

メタリックブルー＆ブラックグレーの装甲の持ち主。メタリックグリーン＆ダークブルーの装甲の持ち主。

CオライオンとGバンディッタが助けに来た！

思わず、安堵の息を漏らすヨシヒロ・ノリカ。

「げ！ 味方が来やがつた！」

と、敵陣がうろたえた瞬間、電光の矢がエスパー連中へ降り注ぐ！

パールホワイト＆ピンクのボディの機体……。

「味方は絶対、守るんだから！」

空中からエンゼクロスがビームアロー乱射攻撃して來た！！

「くそ、一旦退避！」

このままではエンゼクロスに倒されるだけだ。

現場リーダーの指示を受け、一斉散開！

封鎖された通路が開く。

「今だ！ 逃げるぞ！」

マグナム乱射で敵を牽制しながらの、Cオライオンの命令。ヨシヒロ、ノリカは無言で首肯し、狭い通路から脱出した！

眩しい太陽が待ち構えていた。

が、そんな事気にする暇もなく、一心不乱に2人は疾駆！

2人と併走する2機＝Cオライオン・Gバンディッタとその上空から同行する1機＝エンゼクロス。

「助けて貰つたのは嬉しいけど、何でギリギリまで来なかつた訳え？」

ノリカ、Cオライオンを見やり、半ギレで問う。

「まあ、作戦があつてな……」

「作戦……？」

ヨシヒロは眉を歪な形状にする。

「そうだ。これを好機に、一気に畳み掛ける！　いいか、よく聞け……」

司令塔のCオライオンはその、一気に畳み掛ける策を手短に説明した。

そうしている間に魔手が再び強襲する。

「逃がすかー！」

大きく響く声が後方より確認！

一旦退却した敵陣が再度襲来する！

敵勢は火炎・電撃・バズーカなど様々な射撃・砲撃をお見舞いする！

Cオライオンは立ち止まり、後ろへ身を向ける。

「ここは俺に任せろ！　Gバンディッタとエンゼクロスは2人が完全回復させるまで守つてやれ！」

「分った！　任せろ」

Gバンディッタは走りながら、頷いた。

「……でも、一人で大丈夫？」

「問題ない。そちらこそ気をつける。敵は共通してテレポーテーシヨン能力を与えられているからな」

「うん……」

エンゼクロスはチラとしオライオンの背中を見て、生身の仲間の護衛へと飛び去った。

同時刻。単身、敵勢へ燐然と立ち構えるじオライオン……。次々と折り畳まれた肩・脚の銃器が暴れんと広がっていく。

「全て撃破だ！」

空間を火球の羅列にせんと、多数の銃口からビーム弾が豪雨を越える勢いで総射！！

3分の1は回避に成功するも、この先手に3分の2が人間の姿をしたデータに変換される！

「よし……。まずまずだな……」

テツトは拳を篤く握る。

……しかし、全滅させた訳では無い。

油断は禁物。現に残党が左右へ回り込んで来た！

じオライオンはガン＝カタで押し寄せる敵陣へ対抗した！華麗な身のこなしで、標的を乱れ撃つ！

混沌と入り乱れる異能の人間が電腦封印とされていく……。

02

息を切らし、走り抜けるヨシヒロとノリカ。

バチツとジボードのバッテリー・カバーをばめ込む2人。走りながら何とかバッテリー交換は成功したようだ。

「よしつ！ これで全回復うつ！」

ニカツと唇を緩めるノリカ。

「さて……、次は……」

周囲を見回すヨシヒロ。何かを探している……。

目的の物……場所……。

あつた！

「……あの中になら!」

ヨシヒロの視線の先=古びた町工場。

この中に金属=愛機の攻撃の要・キャリバー修復材料が全く置いていない訳がない。

即座に方向転換し、駆け込む!

ノリカもヨシヒロの動きに反応。

彼に追随した。

「あ、工場！ 修復すんのね！ OK！」

工場目掛け駆け込む！

だが！ バルカン攻撃が突如、押し寄せる。

腕がバルカン砲のエスパー5人ほどが出現！

連射攻撃により、行く手を阻む！

ヨシヒロ＆ノリカ、一旦走行停止。

「ちょ、邪魔すんなゴルア！」

人差し指を突き上げ、上ずつた声でノリカは怒り吼えた。

「ま、正体を突き止めた以上、本腰上げて畳み掛けに来るか普通……」

…

ヨシヒロは爽やかに失笑。

そこで、緑の海賊ロボットが間に割つて入り、ワイヤーで本体と繋がった碇=アンカーを発出！

うねるワイヤーが、5人纏めて縛り上げる！

「俺が相手だ！」

Gバンディッタは人差し指を内側へ仰ぎ、挑発！

次いで、ワイヤーを巻き戻しながら、横へ放り飛ばす！

コンクリート製の塀に叩き付ける！ 鈍重な衝撃音が轟く！

「ようし、今のうちい！」

指をバチンと鳴らし、ノリカは目的の場所へ再び駆ける！

「暫くは頼むよ！」

ヨシヒロは颯爽と仲間=緑の海賊TDへ背を向けた。

再び仲間と共に戦う為に……。

ドア前へ到着！

仕舞つている扉をヨシヒロは、日頃の努力の成果＝ヒーロー飛び蹴りをかまし、無理矢理ドアを開く！

室内へなだれ込む！

息を荒げ、辺りを散策する2人……。

「！あれ！」

ノリカが指差した先＝束になつた鉄パイプが横たわつている。
「よし、リカバリーパーツ、発見！」

鉄パイプの束へと駆けるヨシヒロ・ノリカ。

「くたばれ！」

その言葉と共にまたもや、新たな刺客が召喚！
今度の敵4人は全員冷凍光線を発射する！

同時に、超薄型ミサイルが2本、反対方向から出陣！
敵の冷凍光線を喰らい、凍結させられた！

「ぬう、おのれ……」

冷凍ビーム発射能力を持つ4人が喉を唸らせ、向かい側の機影を睨む。

身構えているエンゼクロスの姿がそこにあつた！

「2人共、急いで！」

「サンキュー、流石親友！」

「親友じゃないけど、助かつたよ！」

ノリカ、ヨシヒロはエンゼクロスに戦闘を任し、目的へと動く。
しかし、敵は多い。

冷凍ビームを放射するエスペー！

冷凍光線がヨシヒロ・ノリカへと襲来！

「イケメンヒーローを……舐めないで貰いたいね！　ンハツ！」

ヨシヒロは高くジャンプし、アクション俳優さながら、冷凍ビームを跨いだ！

「あ、あたしだってえ！　つて、んがつ！」

ノリカは力むが、落ちているスパンに足を引っ掛け、ズッこける。

格好良く避けられなかつた。

ダンスで培つた能力と咄嗟のアクションの能力は似て非なるモノなようだ。

しかし、幸いにもそのお陰で冷凍ビームを回避した。

舌打ちし、悔しがる冷凍ビームを放つたエスパー。

そこへエンゼクロスのリングビットが出現し、これ以上の攻撃を阻ませる！

その隙にSボードを開き、キー ボードを叩く。

ヨシヒロ、ノリカはSボードから赤外線のようなものを放出させ、鉄パイプに照射。

光に包まれた鉄パイプはコンバートアタックを喰らつたエスパー同様、0と1に分解されていく。

今回の場合はそのまま、Sデヴァイスが照射しているレンズの方へデータ化された鉄パイプの束が吸い込まれていく。

鉄パイプは姿を消し、Sデヴァイス内の修復データとして、取り込み変換された。

次に、ブレイクパート・リカバリーの項目を選択。

キヤリバー + 金属データ =
カードビット + 金属データ =

「NOW RECOVERING」という文字及び、回復度を示すメモリが液晶画面中央に出現。

エンゼクロスは単独で4人のエスパーと対峙。
四方八方から放たれる冷凍ビームを、持ち前の高い機動力で回避していく。

しかし、ここは室内。

得意の空中を使った移動が難しいので、苦戦していた。

ついにはビームに当たり、左足を凍結させられてしまう！

これにより、歩行は不可能となる。

「しまつた！」

ミヤは焦燥する。

飛行もこの低い天井では難しい。

その上、左足が凍つてしまつては今まで走り回つて回避していた事も出来ないし、片脚のブースターだけ噴出出来ないので、空中移動もバランスが悪くなつてしまつてはいる。

非常に拙い状況である。

「よし！ 置み掛けるぞ！」

「おうよー！」

4人のエスパーは執拗にエンゼクロスを追い込む！

……ヒュン！

一直線に駆け抜ける電光の弾丸……。

それらは冷凍ビームと激突！

熱弾と冷凍化光線の衝突により、蒸発煙が発生！
相殺された！

「何つ！？」

まさか？ と、エスパー勢が睨んだ先に、ライフルモードのキヤリバーを構えた白銀の閃光騎士＝レシュヴァアリエが再光臨していた！

間入れず、カードビット8枚全てが右往左往飛び交う！

7枚は敵を翻弄し、1枚は天使型TDの脚部の氷結部分のみを器用に切り裂いた！

脚を動けるようにした！

「！ やつた！」

エンゼクロスが見向けた先＝完全復活・MAX充電完了のレシュヴァアリエ＆ウイザースロット！ と、持ち主、ヨシヒロとノリカが強気な顔でサムズアップを送る。

時間稼ぎへの感謝の意を込めて。

「さあて、大暴れするよおつ！」

「最高の力タルシス、逆転の開始さつ！」

高揚するノリカ、ヨシヒロ！

彼らの愛機、レシュヴァリエ・ウイザースロットが地を蹴り、駆け出す！

「このお！」

4人のエスパーはテレポーテーションで1箇所へ集結！ 合体冷冻光線で迎撃！

「フフ、冷冻攻撃の対策は回復中に考案させて貰つたよ！」

ヨシヒロはキーボード上に色白の美しい指で華麗にフルツを奏でる。

レシュヴァリエは突如、右真横へ移動し、右肩・右脚のマニュピュレーターを伸ばす！

端に置いてあるリフトカーを掴み、レシュヴァリエは身体を回転し、掴んだリフトカーを投げ飛ばす！

リフトカーは氷結化光線の餌食に！

広大な冷冻ビームを、リフトカーを盾にすることでの、防いだ！

「んなつ！」

「やりやがつたなあ……」

渾身の一撃を無碍にされ、憤るエスパー4人。

その隙にカードビットが彼らを囲み、彼らを押し込み、サンドイッチにする！

相手は動けなくなつた！

その時だ！

射撃体勢のエンゼクロス……コンバートアローを1つずつ、お見舞い！

……30秒後、メモリーカード4枚がエスパー達の居た場所へ散らばつた。

周辺の敵を全て撃破！

……かに、思えたが。

ゾンビゲームの如く、新たな刺客が今度は6人・わらわらとお出ましになった。

しかも、ヨシヒロ・ノリカに、直接接近！

「とつておきの能力を魅せてやる！」

と、いきり立つ刺客は瞳孔を開き、マインドコントロール波を発する！

これは念力的攻撃であろうと看破したヨシヒロは即座に、レシュヴァリエのマスクチェンジで念力の流れを捉えたいところだが、今回はそんな時間はなさそうだ。

なので、レシュヴァリエに手っ取り早い対応をマインドする。レシュヴァリエのキャリバーが発光！

電光を纏う！

次に、スパークするキャリバーをコンクリートへ叩き付ける！

稻妻がの騎馬の如く、駆け抜け、ヨシヒロ・ノリカとマインドコントロールを試みるエスパーの間へ疾駆！

喧しく、激しいスパーク音を立て、一時的にでも壁となる！

この雷及び雷音の壁がマインドコントロール波を遮断！ 電磁波が念力を焼き消す！

マインドコントロールを試みたエスパー達は顔を顰め、舌打ちする。

その隙にレシュヴァリエがコンバートスラッシュを刻み、葬る！

「残念。マインドコントロールは電磁波で？き消させて貰ったよ」

ヨシヒロはからかうような笑顔を魅せた。

反対側。ウイザースロットの戦闘。

カードビットがウイザースロットへ向つて来る！

縦横無尽に動くカードビットが持ち主に切り傷を刻んでいく！

「ちょ、あちやあ～、しまつたつ！」

ノリカはマインドコントロールの回避を失敗。

カードビットを相手エスパーに操られてしまった。

物質操作能力者にカードビットをコントロールされてしまつ。
しかし、無策ではないノリカ。

「だったら、こうだつての！」

「 ウィザースロットの、クリアーアイエローのマスクローブを上へスライドさせ、目元を覆い、サーチングバイザーに！
これにより、相手とカードビットの間に操り糸のような念力波を可視化する！」

次いで、ウィザースロットは左腕をビームニードル、右腕をバルカンにし、接近戦に飛び込む！

器用にカードビットの猛攻を回避。

ビームニードル・ビームバルカンの攻撃による電磁波でエスパーとカードビットを繋ぐ操り糸を？き消し、カードビットを開放させた！

「そ、そんなバカな！」

「対策なんか頭に入つてるつての！ 1年間の準備、舐めんな！」

つかさず、カードビットを脚部コンテナに回収。

機械を無理矢理操る能力を持つ相手には寧ろ足枷になつてしまつカードビットを格納。

そして、舞い踊るようにウィザースロットはニードルとバルカンで敵を葬つていく！

「こうなつたら、本体を操つて！」

3人掛かりで、操りの意を伝える念力を飛ばす！

「そんなの、無駄だつての！」

サーチングモードのウィザースロットには敵の念力の流れがハツキリ見える。

四方八方攻めて来るが、お構いなしに機動力とバーニアーハーを駆使してスルリと回避し、最後に3人纏めてコンバートステイングを見舞つた！

これにより、第2群は全滅。

戦闘時の興奮を冷まさんと、ノリカは荒い呼吸を整え出す。

「つたく、いつまでも妬んでばつかで……。あたしだつてさ、あた

しだつてさ……」

ノリカの脳内に幼き日の子役バックダンサーの自分が浮かび上がる。

母に放り込まれて始めたものだつたが、実力があり、コチ・スタッフ内の評価も良かつた。

おだてに弱い幼少のノリカはまんざらでもなくなり、ダンスに熱中した。

しかし、ライバルに金持ち・権力者の親を持つ者が多くおり、その娘の親が裏交渉をエサに娘にオーディション合格・融通を根回しさせる輩が居た。

そういうつた連中に貧乏な事務所や制作会社は負けてしまい、その娘らを巣食してしまった。

その反動でノリカは突出が難しくなり、オーディションが合格せず、次第に仕事も減り、次第にダンス・芸能に対し馬鹿馬鹿しくなり、身を引いた。

胸糞悪い過去なんか放り飛ばし、普通の女子学生として生きて来たノリカであつた。

悔しくないと言えば嘘になる。

しかし、今更グジグジ言つてもしようがないのは重々承知。被害者面はしたくない。

というか、した所で意味が無い。

忘れるしかないと思うノリカにとって、そう出来ない人間にはつい、苛立つてしまつのであつた。

だが、残念ながらのんびり感傷に浸らせ続けてはくれない。また新たにエスパーチームが襲来。

老化してしまう程に萎えるノリカ。

「つて、げえーっ！ またあー。しつこつ！」

「ハハハ、やはり我らがリーダーの予想通りだつたか……。まあ、僕らの正体を掴んだ以上、徹底的に僕らを直接攻撃する事に固執するかあ。捕まえれば一気に逆転出来るからねえ」

「あ～あ、最悪っ！」

「さあ、文句はそこまでにして、戦うよ楠さん？」

「はいはい」

かつたるそうにノリカは首肯。

ヨシヒロ・ノリカは新たに出現した敵との戦いに臨んだ！

03

一方、町工場前で繰り広げるもう一つの戦い……。

Gバンディッタの背中ランドセルから伸びた、バズーカと両脚のアリゲーター・キヤノンを発射！ 発射時＆ヒット時に、轟音が轟く！！

Gバンディッタはバズーカを背中へ置んだ。目の前の敵を全滅させたのである。

直後、メモリーカードが散り落ちた。

「おし！」

海賊Tドは額に飾つてある眼帯型サーチゴーグルを片目にセッティング、サーチングゴーグルを装着。

姿を隠している敵がまだ潜んでいないか、周囲をサーチする……。敵の存在は確認出来ない。

自分もヨシヒロらの元へ行つて、援護しようと一歩進む。そこへ流星の如く、弾丸が通過。

海賊型の進行を妨害。

周辺の屋根に新たな異能者刺客がチンピラ風に立ち構え、出現。その中にはサツカーブ部で苦楽を共にしたかつての友＝ヒデノリの姿が確認出来た。

「そこのカツコイイロボットさん、僕チン達を少しでも多く、倒したくあ～りませんかあ～？」

ヒデノリが人差し指を上へ突き上げ、挑発の意を示す。

「……ヒデノリ……」

敵の狙いは戦力の分散だろつ。

味方を何人犠牲にしても、結果的にヨシヒロ・ノリカを捕らえれば、味方を元に戻す事が出来、一気に逆転可能。故に、惜しみなく次々と敵が現われる。

コウスケは重々承知している。

だが、こちらが先に向こうを全滅させればいいだけの話だ。

「おっしゃ！ 乗つてやろうじゃねーの！」

メタリックグリーンの戦機は挑発した相手へと飛び込む！
ニタリと口を歪め、逃げ去るヒデノリ達エスパー軍団。

明らかに陽動の意図があるようと思える。

しかし、多様なギミックの宝庫であるTDに敵はない。

臆する事も、油断する事もなく、Gバンディッタは追走！
屋根から屋根を飛び越えていくヒデノリ達エスパー。

後ろから警戒心を持ちつつ、屋根と屋根の間を飛び越え続けていくGバンディッタ。

……暫し、この状況が続く。

後ろからバズーカで狙い撃てるが、敢えて狙わない。

Gバンディッタにはじっくり対峙したい相手があの中に1人、居るからだ……。

いつの間にやら、港へ到着していた。

客人・Gバンディッタはコンクリート上へ重厚な鋼鐵足を落とす。
緑の海賊ロボットの周辺には血氣立つたチンピラ臭い連中＝エスパーが総勢50人ほど囲んでいた。

突如、天へ差し向けられた人差し指！

ヒデノリによるものである。

「タイマン勝ち抜き戦だ！ テメエにはこれから1人ずつ戦つて貰うぜ！」

コウスケは表情を顰める。

（成程、分り易い時間稼ぎ手段だなあ……）

向こうの消滅進行具合を遅延させる手段……ここで素直に応じて

は敵の思う壺だ。

こんな要求には応じず、いきなり複数へ攻撃するのがセオリーだ。しかし、その状況ではヒデノリと向かい合えないまま、倒す事になるだろ？

「ウスケは苦悩する……。

ならば、一か八かこちらも要求してみようと考えた。

「ああ、分かった。まずは言いだしつペのお前！」

Gバンディックタのガンメタルの指は堂々とヒデノリを指差した！

「お前から相手になれ！ 順番なんてどうでもいいだろ？ どうせ皆、戦うんだしな」

ヒデノリは即座に笑い悶える。

「クハハハハツ！ イイゼ、イイゼ！ 確かに順番なんてどうでもいいモンなあ！」

ゲラゲラ高笑いをするヒデノリは身体機械化超能力を発動！

右腕をキヤノン砲、左腕をチエーンソウに変形させる。

ロボットと両腕が機械化した人間が対峙……。

双方の間に海風が通過……。

それがゴングかの如く、通過後、両者は駆け出した！

アームアンカーとチエーンソウが火花を散らし、激突！

鍔迫り合いする中、両者は鬼気迫る表情で睨み合う！

Gバンディックタは脚部のアリゲーター・ハングキヤノンを広げていく。

アリゲーター・ハングで相手の脚部を掴み、ゼロ距離射撃を見舞う戦術を試みる。

「させるかよつ！」

ヒデノリは片脚を上げ、キヤノンを上から踏み付ける！

更に中央から脚部を割り込ませ、もう一つのキヤノンを内側横から脚部で押さえつける！

キヤノンが明らかに自分に向かないようにする！

「！ 何つ！？」

「ウスケ、まさかの戦術に衝撃する！」

反対にヒデノリは「やつてやつたぞ！」と、強気に笑んでみせた！

「だつたら、こうだ！」

ヒーンソウと衝突中のアンカーを強制射出＆そのアンカーが搭載された腕でアッパーをかます！

相手を後上へと放り飛ばした！

コンクリートへ叩き落されるヒデノリ。

「ぐ……やつぱ、手強いぜこいつ……。時間稼ぎ、どんなだけ出来つかな俺……」

歯を食い縛り、ヒデノリは起き上がっていく。

「……もう一度訊くけどさ」

Gバンディッタが訊ねて来た。

ヒデノリは眉毛をうねらせ、海賊TDを睨み上げた。

「んあ？」

「やつぱり、優位な立場に立ち続け、勝ち続ける方がいいか？」

ヒデノリに取っては愚問他ならぬ話。

腹を抱え、ヒデノリは失笑した。

「つたりめーだろ。勝つのが嫌いな人間なんかいねえよ。だつてよお、どいつもこいつも、少しでも偏差値の高い大学に行きたがつたり、公務員や大企業社員になりたがるじやんか。……。皆、安定を望むんだよ。負けて凋落するのなんて誰も望まねえ！」

「……かもな……。んじゃさ、もう一つ質問」

「……もう一つ？」

「誰もが勝つたり負けたりするゲームと予め勝ち負けが決まっているゲーム……。もとい、お前は「負け続ける人生」と「勝つたり負けたりする人生」、どちらがまだマシだと思うかって話

「それは……流石に後者の方がマシだな。……でも、お前がそれを言つとかよ」

一瞥をコンクリートへ吐き落とすヒデノリ。

何せ、相手は自分らに対し、無敗を喫しているのだから。

「TDが無きや、俺だつて只のザゴだよ……。サツカーとかな……」「サツカーとか……？！お前まさか！」

現在、ヒデノリ達エスパー軍が分かつている事は敵TD使い5人のうち、2人の正体がヨシヒロとノリカである事。

……つまりは、残り3人もクラスメイトである可能性は高い。更にサツカーで敗北経験があるとなると自ずと候補は絞られる。

「おおっと、話の続きを2人だけでやろうぜ？」

Gバンディッタ、ヒデノリの襟元を掴み、力いっぱい斜め上へと放り飛ばす！

飛んでいった同じ方角へGバンディッタは跳躍！

追尾した！

唚然と周囲で観戦していたエスパー勢は「どうする？」と談合。「やっぱ、加勢するべきだろうか？」

「いや、全滅する時間が長くなるだけだろ？」

下手に動かず、深大寺さんの指示通り、俺達は時間稼ぎに徹すべきじゃないか？」

「むむ、そうだな……」

と、結局は「待機」という選択肢を探るのだった。

港周辺には廃工場があり、うち1つの屋根にヒデノリは墜落。同時に、Gバンディッタが同場所へ着地。

次にGバンディッタはバズーカを叩きつけ、古びた屋根をくり貫く。

海賊型ロボは無言でヒデノリを見つめ、開けた穴へ飛び込む。ヒデノリも何も言わず、その穴の中へ落下。廃工場内。

ヒデノリはコンクリート上に降り立つ。

「よつ！ 直接遭うのは久しぶりだな」

「この声……電子音声ではない。

聞き覚えのある声。

ヒデノリが先程看破した通り、Gバンディッタの横後ろ方向に、コウスケがドラムの上に座っていた。2人は驚きを一蹴させた、爽快な顔となる。

「コウスケ……お前だつたか」

「こっちも驚いたけどな。お前がエスパーになつてたなんて」「ハッ、残念だな。お前なら分かつてくれる思つてたのに」「分かりたいけど、分かつちゃいけないんだよ…………」

コウスケは憐れな目を遠くへ向けた……。

哀愁めいた失笑。ヒデノリは脱力する。

「凄いな。お前の自制心は、大人だな」

「そうかあ？」

「そうだよ。俺は悔しい・妬ましいという感情には勝てねえわ」「エリート共を馬鹿にしたり、恥搔かす程度でも無理か？」

「ああ。その程度で治まるなら、エスパーにわざわざなんねえよ」「コウスケは爽やかな顔をして天井を見上げた。

先程、自分がマシンを通して開けた穴から曇つた空を確認する。

「……そつか、なら……戦うか？」

もう何もいう事は無い。ヒデノリは無言で首肯した。

第2ラウンド・スタート！

振り翳されるヒデノリの腕＝チヨーンソウ＝Gバンディッタのバズーカがブツ放される！

コウスケは戦う前に決意した。

ヒデノリの行い＝スポーツエリートに代わってエスパーがスポーツの頂点を牛耳る＝スポーツ格差の拡大を放任する訳にはいかない。しかし、ヒデノリの無念を晴らさぬまま、葬るのも、良心が・友人としての情が阻む。

ならば、せめて戦うことで、少しでもストレス発散させてやりたい。

そう考えたコウスケは戦う道を選んだのだった。

ヒデノリとGバンディッタは一旦、後退し、距離を取る。

ヒデノリは両腕を2連バズーカへと変換！

Gバンディッタは背中から伸びたバズーカと両脚のアリゲーター ハングキャノンの砲口から光を充満させる！

さあ……勝負だ！

両者、最大出力のエネルギー弾を発進させる！

真っ向からぶつかる2つの電光球！

じりじりとGバンディッタ側が圧倒し、遂には敵の攻撃を切り裂いた！

瞬時にヒデノリは光球に包まれた！

「ハハ、負けるって、やっぱ気分ワリイな……」

ヒデノリは涼しげに笑った。

「そうだな。他人を負かせ過ぎないようにしないとな……」

「ウスケは柔軟な表情で0と1へ分解されていく友の姿を見届ける。

「んじゃ、ちよっくら眠るわ、俺

「ああ。次に目覚める時には格差が小さくなっているかもな。おまえらのお陰でエリート共をビビらせられたからさあ。行き過ぎた英才教育により、極僅かの人以外を不幸にしてしまった。これ以上そんな人間を生み出さない為にも、英才教育を撤廃し、正々堂々平等な環境下で、楽しくスポーツをやるようになります！……みたいな？」

「ウスケは照れ臭そうに頬を搔く。

「ハハ、そうなればいいな……」

「させるさ。俺にはGバンディッタつー、頼もしい相棒がいるからな

「おっ、そうだな。そいつがあれば何か変えられるかもな

「変えてみせるさ……」

「そいつは楽しみだな。おっと、そろそろ消えちまいそうだ。……

じゃあな。親友！」

「ああ……。またな！」

2人は実に爽やがあり、儂げな表情だつた。

その2人のうち、1人は消え、メモリーカード内に眠る……。

「ウスケは一息着き、友人の眠るメモリーカードをポケットに仕舞つた。

そして、端整な顔をグイと上げる。

一転、戦意の強い顔つきに。

「さあて、残りは要求を破棄して、纏めて倒すとすつか！ もうちよい頑張ってくれよお！ Gバンディッタ！」

キー ボード操作に呼応し、メタリックグリーンの海賊TDは再び戦火の中へと！

04

一方、こちら道路。

COライオンはやかましい程に展開していた身体中の銃器を綺麗さっぱり折り畳む。

そして、西部のガンマンの如く、指でカラカラとハンドマグナムを回し、両腰ホルスターにマグナムを収納した。

同時に、メモリー カードが雨の如く、「ンクリートヘ次々とダラダラ落ちて来た！

つまり、目前の敵を全滅させたのである。
喧しかつた空中が一気に殺風景となつた。

パチパチパチ！

緩やかな拍手の音がこの静かな空間に響き渡る。

「お見事。流石司令塔といったところか……」

COライオンは声に反応！

早撃ちガンマンの如く、素早くガングリップを引き抜き、声の方角へハンドマグナムの銃口を向ける。

その先……。

威風堂々と闊歩する男の影！

ボス＝深大寺である。

「ほう、ボスのお出ましか……。俺達もそこまで倒して来たか」

「うむ。現時点で1013人中、621人を君達は撃破した。私以外の残つた仲間は君の味方を現在交戦中だ……」

じオライオンは初手として、揺さぶりの1弾を発射。

深大寺は余裕綽々と、テレビーテーションへ瞬時に回避。

「フ、良いのか？ ボスが俺一人を相手して。正体の判明した方を集中して狙うべきだと思うが？」

深大寺は落ち着き払い、ネクタイを締め直す。

「いやいや、ボスというのは一番厄介な敵と戦うという宿命があつてだね……」

深大寺は今迄の戦いを通して、司令塔であり、最も厄介な敵がこのメタリックブルーのマシン、じオライオンであると看破していた。ガン＝カタの構えをし、戦闘体勢に入るじオライオン！

「いいだろう……」

「勝負といこうではないか。パワーアップした私が君を潰そう」
張り詰める壯絶な空氣……。

並大抵の人間を窒息させる程の重圧……。

両陣営ボスの、頂上対決が始まった！！

01

両腕をクロスし、深大寺は唸り始める。

「最初から全力でいかせて貰おう……。ぬうつ！ おおおおお……！」

身構えるCオライオン。

深大寺から只ならぬオーラを察知する。

「む……これは……？」

変貌していく……。

人肌から爬虫類的肌へ……。

肌だけではない。骨格・筋肉・神経……あらゆる身体部位が変異する。

「……ほう。これが例のパワーアップか」

青い狩人TDは「見上げた」。

深大寺の新たな姿＝魔竜形態を。

全長5メートル。周辺のビルと同じぐらいの高さ。車道・4車分を軽々と独占する横幅……。

主にティラノレックスをベースにし、プテラノドンの翼を背中に持ち合わせ、更に剣のようなツノを頭部に3本装備。

ゲームに出てきそうな巨大モンスターそのものである。

その魔竜、獣らしい咆哮を上げ、口から火炎を放射した！

人間形態のエスパーが掌から放っていたそれとは比にならぬ、巨 大な火球！

メテオの如きそれがCオライオンへと迫る！

両手のマグナムを構え、発射！

まずは敵攻撃の威力分析を試みる！

マグナムのビーム弾2発程度では巨象と小動物との差と同様、呆気なく弾き飛ばされる。

……今までにない高威力の攻撃だ。

ならば！ と、ショルダーマシンガン・レッグミドルライフルを加え、総射！

複数の光が1直線に駆け抜ける！

どちらも流星の如く、激突！

今度は相殺！

威力の程度が判明したのだつた。

しかし、敵のデータが1つ分かったのも束の間、空中へ羽ばたく魔竜は上空から火炎の弾丸を次々と吐き飛ばす！

まさに、流星群である。

「チツ！」

斜め上へ照準を回すメタリックブルーの獵人型ロボット！

今度は胸部に巻きついたベルトライフルも動員し、乱れ撃つ！

火球が町・建造物を呑み込まぬよう、空中にある内に粉碎していく！

く！

爆発！ 激突！ 激しい音と攻撃の相殺合戦！

その末、全てが空中爆散！

と、同時に魔竜が足を突き出し、急落下！ Cオライオンを踏み付けに来た！

そう、易々潰されるほど、反応に鈍いテツトではない。

星の狩人・Cオライオンはコンクリートを蹴り上げ、後退！

更に念を押して、両脚部のライフルを棒高跳びの如く、コンクリートを弾かせ、後退する勢い・距離を稼ぐ！

魔竜は道路を踏み付け、巨大な足型を作った！

獰猛に唸る魔竜!! 踏み潰そうとした対象に逃げられたからである。

Cオライオンは後方へ飛びまみ、各種銃口を魔竜本体へと向ける！

一斉総射！ 魔竜全身へオリオン座を刻まんと、光弾の豪雨を見舞う！

魔竜のボディに直撃！

「さて……どれほどのダメージを負つたか……」

テツトは敵本体の強度を確かめた。

爆煙が退いていく……。

その中央に無傷の魔竜・深大寺の姿を確認。

「…………頑丈だな……。あの鱗、相当なようだ。だが、策が無い訳ではない！」

じオライオンは各種銃器を折り畳み、突進！

「ンガアアーッー！」

ヨダレを垂らし、雄叫びを上げる魔竜。

鋭利な爪を持つ腕を振るう！

その腕は大きく、勢いもある！

しかし、小さいボディのじオライオンに回避は決して難しい訳でもない。

寸前で、体躯を反り、小さな隙間に潜り、回避。

次いで、マグナム砲身下に置まれた隠し武器＝アーミーナイフを飛び出させる！

ハンドマグナムの先へ伸びたナイフを、自身の真横に位置する魔竜の手の甲へ突き刺す！

だが、鱗は堅く、ナイフも浅くしか入っていない。

しかし、逆に言えば“浅くは入った”。

ならばと、じオライオンは更に力を加え、完全に突き刺した！

「さて……。内部への攻撃はどうだ？」

魔竜は悲痛の雄叫びを空間に響かせた。効果アリ。

相手が苦悶中である隙に、突き刺したまま、真っすぐじオライオンは駆け抜ける！

魚を捌くかの如く、魔竜の鱗を抉っていく！

魔竜は悶え、苦しみの咆哮を響かせる。

ある程度は抉り進んでいく……。

しかし、腕間接部でつかえる。

筋肉が緊張しており、硬くなっている部分な為、切り裂く事に限界があつたようだ。

「チ、ここまでか……」

魔竜の腕を蹴り、突き刺したナイフを引っこ抜く！

次いで、今まで使つていなかつた武装の、右腕シールド＝折り畳まれたスナイパーライフルを開いて、ゴーグルを目元にセツト！

右腕部スナイパーライフルの反対の左手に持つマグナムを連結させ、射撃準備完了！

……ターゲット、ロツク・オン！

抉り開かれた内筋肉部へ精密射撃を放つ！

一閃の光弾が飛翔！

ピンポイントヒット！＝内部攻撃を成功させた。

「グゥオアーッ！ グォーン！」

尻尾をバタバタさせ、悶える魔竜。

着地するメタリックブルー＆ブラックグレーの獵人型TD。

「よし……。内部から攻撃は効果的だ」「手応えのある攻撃＝突破口を掴んだ。

敵が痛みに悶えている間にスナイパーライフルの精密射撃を露出された筋肉へ容赦なく撃ち込んでいく！

更なる痛み！

唸りを上げ、更にもがく魔竜！

その拳動は激しく、大きくなり、長い尻尾を周辺に振り回し、ビルを叩き潰していく！

（オライオンにも荒ぶる魔竜の尾が迫る！

「クツ」

足の裏と下へ伸展した脚部ライフルでコンクリートを蹴り上げ、襲来する尾を飛び越える。

「Cオライオンはそのまま、魔竜の抉られた筋肉へ射撃を見舞う！一気に攻め込むCオライオン！」

コンバートショットを相手に完全に撃ち込むまで、遠くから精密射撃を続けるほうが堅実のようではあるが、悶え、動きまくる相手な為、その戦術は続きそうにない。

その為、やや接近しての乱射攻撃を試みた。

が！ 相手＝魔竜は鱗を裂かれていない、もつ片方の腕を伸ばし、Cオライオンを捕らえんと掌を向ける！

そうはいくか！

空中待機中のCオライオン、胸部のベルトライフルを展開！

ヌンチャクの如く、魔竜の掌へ叩く！

双方弾かれる！ が、魔竜の指2本がベルトライフルの先端を摘む！ 捕まる訳にはいかない。Cオライオンはベルトライフルを胸部からページする！

更にベルトライフルを自爆させ、その間に2丁のマグナムで相手の眉間へ牽制乱射！

目元と掌に負ったダメージに、悶え狂う深大寺魔竜！

カウンター攻撃をくれてやつたCオライオンは誰も居ない道路へ着地。

無言で新たな策を思案するテツト……。

Cオライオンを退却させる。

真っ直ぐ道路を、ひたすら逃げるCオライオン……。

テツトはチラと、後方を確認。

理性を取り戻し、魔竜は追撃して来る！

「…………よし！」

テツトの意図通り、敵竜は追尾して来た！

走りながら、次の手＝右腕に固定されたシールドをライフルモードにし、ゴーグルをツインアイにセット！ 進展したライフルからトリガーグリップが出現し、それを掴む。スナイパー モードに！

一方、追撃しながら、口内に火炎を充満させる魔竜・深大寺！
真つ直ぐ逃げる青いロボットをピンポイントで狙わんとする！
そして、火球放出！

青い機影目掛け、猛進旗下！

「これを見つけていた！」

「オライオンは急ブレーキをかけ、真後ろへ向く！
長く伸びたスナイパー・ライフルの砲身が火球中央へ狙いを定める！
が、そのスナイパー・ライフルを放射する訳ではなく、レフト＆ライトの、ショルダーマシンガンとレッグミドルライフルをスナイパー・ライフルと同方向へ伸展！

こちらの4つの銃口が電光を放つ！

4つの砲身からの連射が火球と対決！

只ならぬ勢いの総射が数秒足らずで、火炎の弾丸を打ち消した！
消滅した火球の先にはガツツリ口を開いた魔竜の姿を確認！

今だ！！！

「オライオンのゴーグルモニター……魔竜の口内に狙いを定める！

「……フィニッシュだ！」

ズン！ 射撃がぶれぬよう、一層強く踏み込む青い鋼鉄の足。
上斜め25度！

計算された射撃が駆け上がった！

しかし、標的『魔竜は次弾を作らんと、口内に火炎を溜めて
いく……。

間に合うか……！？

間に合う？

それは違う。

結果として、内部へ攻撃を与える事が狙いだ。

ビーム弾は魔竜の開いた口へ突撃！

蓄積されていく火球へと飛び込む！

しかし、ド真ん中へは進まない光弾……。サーチングゴーグルで
判明した、最も強力なエネルギー中心部の中央を避け、まだ中央に

比べ微弱な側面の火球を貫き、喉へ突き刺さる！

「ングオオオーッ！！！」

クリティカルヒット！

今まで以上に激しく悶える魔竜！

しかし、念の為、Cオライオンは可能な限り、魔竜の口内へ射撃の雨を放つ！

攻撃を喰らう一方の魔竜は次第に身体が縮まつていく……。

鱗が人肌になつていく……。

吐血し、片腕に切り傷を負つた深大寺が、膝をついた。

「く……」

彼の身体は徐々に〇と1に崩壊していく……。

抵抗プログラムを打ち込まれていたのか、データ化の進行速度は通常よりも遅い。

しかし、負傷＆データ化進行と、苦しい状況に変わらなかつた。「戦略で俺に勝てると思うな」

Cオライオンがスナイパーライフルを構えたまま、深大寺の前に冷然と立つ。

言うまでも無く、チェックメイトである。

「ふむ、やられたよ……」

今にも消滅しそうな、しけた顔で深大寺は座り込んだ。

戦意などナノ単位にも無い様子。

「嫌なものだな……。何をやっても、結局恵まれし者が優位に立つのは……」

Cオライオンは蒼天の空を見上げ、冷然と呟く。

「？…………まあそうだな。我々R.P.が勝利しても、優位に立つ人間が代わるだけだ。かといって、他に現状良化するアイディアは私は浮かばない…………。恵まれなかつた人間がルールを作る立場に回れば、少しさはマシになると賭けてみたんだ」

「……………そうか。中々良策は浮かばなかつたか。ならば、少し休んでみればいいさ。データの世界＝ヴァーチャル無人島生活は孤独では

あるが、意外と楽しいかもしれんぞ」

「ほう、ならば、快く向おうかな？」

「そこでじっくり考えればいいさ。自分がどうするべきかを……。

答えを導き出すのはあんた自身だ……」

「……だが、最後に1つ、言わせてくれ」

深大寺は最後に問う。

所有者の顔も年齢も分からぬ青色の鉄機へ。

「何だ？」

「現実は恵まれた者勝ちだ。私は死んでもこの事実を許す気は無い」「奇遇だな。俺も“肯定は”しない……」

枯葉が散るかのように、深大寺は失笑した。しかし、何処か爽やかでもあつた。

「フ、君は最後まで誰の味方なのか分からん奴だな……」

「俺は誰の味方でもない。不条理や最悪の事態を潰す……それだけだ。特定の人間など、救う価値など無い……」

「フハハ、君はこれから何をしでかすんだろうな……」

もはや原型など留めていない、0と1の全身タイツを着込んだ人影のような姿の、深大寺に突き刺さるメモリー・カード。ヴァーチャル無人島と称されし場へ誘われた……。

深大寺は目を覚ます。

聴こえる漣。肌が認識しているもの＝砂浜。

海辺に深大寺は寝そべっていた。……どうやら、ここがデータの世界らしい。

ふと、腕を見ると、完全に修復されている。

原理は分からぬ。深大寺は理系の知識には疎い。

それでも、これから暫く無人島暮らしのようなことをする事だけは分かる。

取り敢えずは砂浜で昼寝することにした。

今、この世界では昼かどうかは知らないが。

そもそも、朝昼夜という概念がココにあるのかすらも不明だが。深大寺は今迄に積もりに積もつた疲れを睡眠という形で破棄し始めるのであった……。

コンクリート上に落ちた深大寺の眠るメモリーカードを凝視するCオライオン。

「疑似無人島暮らしを楽しむか否かは本人次第……か」

青＆黒のTドはメモリーカードを掴もうと、両手に握るマグナムをホルスターに収納しようとすると、

が、亀裂が走り、マグナムのナイフとレッグミドルライフルが割れ落ちる。

……戦闘で負担を掛け過ぎ、限界を来したようだ。

02

場所を移し、森林公园で戦闘を繰り広げる「シユヴァリエ」と「ワイザースロット」。

ゾンビの如く、次から次へと湧いて来る超能力者の刺客相手に、長期戦を強いられていた。

最も回復値が高い2機を持つてしても、しんどいものがあった。ヨシヒロは挑発的に人差し指を内側へ踊らす。

「来なよ！このヒーロー、相馬ヨシヒロとその愛機、「シユヴァリエ」が君らの怒りの捌け口になつてあげようじゃないかっ！」

閃光の騎士は屈辱・無念・怨念を浄化せんと聖剣を振るつた……。バッタバッタと斬られていくエスパー達……。

ノリカ、ワイザースロットへ襲来する敵陣。

「俺達は勝ち組共を貶めないと気が済まないんだよ！」

「恵まれた環境だけのヤツラを潰して何が悪い！」

彼ら、異能復讐者は修羅の形相で、攻撃……。

カードビットと一ードル攻撃を駆使して、応戦するワイザースロ

ツト。

「あ～もつー あたしだって恵まれた奴に潰された事、あるつての！ でも、気にしないようにしてるつづーのー 忘れるしかないじやん！ いつまでも妬み・恨みと、グジグジ言つてんじゃないつての！ 前向け！ 前へ！」

ノリカはいい加減ブチ切れ、手早くキーボードを叩く！

カードビットは陣形を作り、今回は巨大蛇のような形となる！

「カードフォーメーション、カードバイパー！」

真っ直ぐ一列になつたカードはそのまま、直進！ 敵の攻撃を大蛇の如く、唸りながら、回避し、高速で巻きつくように相手を切りつけていき、あつと言う間にデータ化という名の毒を噛み与えた！ 次々と、周辺の敵をメモリーカードへと拘留していく。

戦っているのはこの2名の操る2機のみ……。

居ないのである。

居たハズの味方機、エンゼクロスが……。

03

D-r 毒島は自身の研究室で、失望の真つ只中に居た。

「やれやれ、まさか、深大寺君まで……」

D-r 毒島、椅子に腰を降ろし、コーヒーを啜る。

彼の目はまだ曇つていなく、舌舐めずりを行う。

「……しかし、まだ全滅した訳ではない。たつた5機で、どこまで踏ん張れるかな？ そろそろ疲弊の色が見えるハズだが……」

D-r 毒島製の衛星カメラ……。それぞれの戦闘を撮影している。

部屋にある巨大なモニターにて、全ての戦況を眺めているのであつた。

「いえ、『全滅する前に』勝ちます」

Jの部屋にはDr毒島しか居ない。

その筈だが、謎の電子音声が耳に入った事実。

Dr毒島はコーヒーカップを机に戻し、不機嫌な顔を形成。エンゼクロスが目の前に出現していた！

Dr毒島はいきなりゆっくりと晒い出す。

「アッハツハ！ 君は何を考えているのかね？ こんなトコに来てどうする？ 仲間と共に戦わなくていいのかい？」

「大丈夫です。王手を掛けに来ましたから」

Dr毒島は怪訝な顔をしてみせた。

「……どういう意味だね？」

眩しい純白なボディを持つ天使型ロボットは穏やかながらも、核心めいた口ぶりで返答。

「ここにあるからです……。超能力を遮断する装置が」

「何を根拠に……」

Dr毒島は頬に皺を増やし、失笑。

エンゼクロスは首を左右へ1回ずつ移動させる。

「……それはあり得ません。だって、それが無いと貴方は飼い犬のエスパーに噛まれますから……。頭のいい人がそんな配慮が出来ない訳がありません……」

ミヤはテツトの作戦指示を受け、今、ここに愛機を投入させた。

……それはヨシヒロとノリカの正体を散策部隊が発見した時である。

鳳ラボラトリにて、その事を知るテツト・コウスケ・ミヤの3人。

「大変！ 助太刀しなきや！」

ミヤはキーボードを叩こうとする。が、

「待て！」

テツトの強い声色の指示にビクツとなり、愛機の出陣を止める。ヤ。

「これはヤツラを全滅させる又とない機会だ……」

「えつ？」

「どういう事だよ？」

ミヤとコウスケは意味の言及を求めた。

テツトは全て語った。

ヨシヒロ・ノリカの姿を敵に発見された場合、敵は全戦力を駆使して、ヨシヒロ・ノリカを捕らえんとし、王手を掛ける事を。

テツトは逆にこれを利用した策を述べた。

- 1、ギリギリのところでヨシヒロとノリカを助ける。
- 2、暫し、執拗に現われ続ける敵兵と戦う。
- 3、しかし、手数の少ないこちらは持久戦になると不利。
- 4、なので、ある程度のところから敵を倒さずして、勝利する必要がある。

「つて、倒さず勝つって、どうやるんだよ！」

「至つてシンプルだ。Dr 毒島の持つ、エスパー達の能力停止装置を奪う事だ……。ステルス衛星機を通し、その存在は確認してある」「ホントかよ！？」

「でも、それをどうやって奪えば……」

「忘れたか。これからヤツラがヨシヒロ達を執拗に攻めて来る事をコウスケ、ミヤはきょとんと沈黙。

「敵は総動員でこっちへ潰しに来るという事は、逆にDr 毒島の方が無防備になるという事だ……。チャンスなんだよ、これは「ナルホド！」と、コウスケとミヤは脳に衝撃を受けるのだった。

……そして、現在。Dr 毒島研究所内。

エンゼクロスはアローをDr 毒島へ構える。

「ンフツフツフ……アッハッハッハ！」

唐突に背中を曲げ、笑い悶えるDr 毒島。

「そりだねえー。正解だよ。持つているとも。キャンセラーを！」

D・r・鳳君の孫娘さん！」

「……」

“自分自身を特定された”。ミヤは背筋が凍った。

全滅を防ぐ為に、念の為散開する指示を受け、公園の女子トイレ内に潜伏してエンゼクロスを操作していたミヤ。

そんな彼女の居るトイレのドア前にD・r・毒島がテレポーテーションした。

彼はドアをサイコキネシスで粉碎し、ミヤと無理矢理対面した。

「ひやっ！ やはりあなたも……。超能力を……」

ニタリと不気味な笑顔を浮かべ、舌舐めずりをするD・r・毒島。

「自分の造ったものを、自分に使わないなんてオカシイだろ？」「で、ですね……」

「そして……更に強力な能力を……自身に注ぎ込むのだよー。」

D・r・毒島の身体が膨張していく。

深大寺の魔竜化に似た現象……D・rの場合は機械的な軟体動物のような存在へと変化していく！

膨張・変貌していくD・r・毒島の身体はやがて、トイレそのものを破壊するのだった。

その衝撃にミヤは吹っ飛ばされる。

地面上に叩き落され、痛みに耐えながら、上半身を起こしていくミヤ。

「…………。あれは……」

衝撃の物体を田にするミヤー！

機械化された蛸……といつよりは、インベーダーのような存在が触手をくねくね動かせ、上空に浮遊している。これがD・r・毒島の変身体である。

「驚いたかね。孫娘さん。これが私のもう一つの姿、ゲノ・ベーダーだよ……」

呆然と変わり果てた科学者の姿を見上げるミヤ。

「ゲノ……ベーダー……」

驚いているのも束の間、ゲノ・ベーダーの触手が襲来！
ミヤの身体を拘束した！

強く縛られ、悶えるミヤ。肉感溢れる太股・肢体が激しく攻め立てられる！

「んぐっ……ああっ！」

「ふつふつふ、詰めが甘いよ孫娘さん……」

「い、いつから……私の正体を分かつていたんですか……？」

ミヤ、苦しみながらも、ゲノ・ベーダーへ問う。

「簡単さ。私は君のお爺さんと知り合いだからねえ。君のお爺さんが作れそな物ぐらいお見通しなのだよ」

「も、もう一つ。どうして、正体を掴んでも今の今まで攻めて来なかつたのですか……？」

「ふむ……君は勘違いしているようだ……。私は深大寺君達にチャンスを『与える』[提供者]であつて、[仲間]ではないのだよ……。彼らの戦いは彼らで決めなくてはならないのだ」

複数の触手に絡み着かれ、身動きの取れそうに無いミヤは無言で聞き入る。

「……しかし、私の大事な防犯グッズを奪おうとなれば、話は別となる……。つまりは、そういう事なのだよ」

縛り上げる痛みに耐えるミヤ。

傍から見ればそうだろう。

しかし、実は逆転する為の抵抗をしている。

彼女は咄嗟に両腕をクロスし、Sボードを抱きしめた。

そして、現在は触手の縛り上げに歯を食い縛り、抵抗しながら、Sボードの操作に乗り出しているのであった……。

狭い空間内でミヤの小さな指が逆転すべく、あくせく動く。

そして！

エンゼクロスはD-r毒島研究所から姿を消し、触手の真横に颯爽登場！

アームアローを前方に置み、シザーモードにして、一気にバッサリ触手を切断！！

コンクリートへ落下するミヤ。

触手がクツショソとなり、痛手は負わなかつた。即座にミヤは纏わりついた拘束力の無い触手の先端部を払い除け、立ち上がる。

切断され、一気に半分ぐらいの短さになつた触手をうねうね動かすゲノ・ベーダー。

「ふむ……やるではないか。流石D・r鳳の孫娘……」

「あの……」

ミヤは穏やかながらも、メカインベーダー化した科学者を睨み上げる。

「何だね？」

「お爺ちゃんと比べるの、止めて貰えます？」

「何故だね？ 高スペックロボットを作つた博士の孫なんて誇らしい事じやないか。君はその恩恵を享受しているのに、比較されるのを拒むとは……。随分と贅沢な話だ。深大寺君達はそういうた優れた血統を羨んでいるといふのに……」

「私はお爺ちゃんが嫌いな訳じゃありません……」

「では何故？」

ギョロッと見開くゲノ・ベーダーの8つの目。

高压的にゲノ・ベーダーは詳細を追求した。

「科学者の血縁関係に生れなかつたけど、私よりも優秀な技術力・頭脳を持つ人が居ます。その人と自分を比べて見ると、“科学者の孫のくせに……”って思つちゃいました。……でも、生れた環境と本人の資質が都合よく合致する事など、殆どないので、周りの人間と比べて卑屈になるのは止めようと思つたんです」

「ほう……偉大なお爺さんの事など忘れるというのかね？」

ミヤは真摯な眼力を持つて、凜と主張する。

「違います……。私は私だという事です……。誰かの比較対象では

ないんです」

「フツハハハ……」

巨大なインベーダーは触手を奇怪に踊らせ、おどりびりしく笑い狂う。

「クハハハハッ！ それは逃げというモノだよ。人間は比較され、競争して生きていぐ。そんな考えは通用しないのだよ！」

切り取った箇所から、にゅるにゅると新たに触手が生え出す！

触手を再生させ、再び、触手が強襲！

エンゼクロス、純白に塗装された鋼鉄の翼を広げ、再飛翔！

高機動力を駆使し、触手を回避しては、切断！ 回避しては切断！

と、いう動作を繰り返す！

Dr.毒島の主張……。

ミヤは一理あるとは思つ。

(こんな時、星渡君ならどう言つつかな？ 色んな屁理屈捏ねて、言い返すんだろうな。……でも、あたしは星渡君じやない。お爺ちやんでもない。……だから、あたしの言葉で！)

ミヤは大きく潤んだ瞳を強く閉じ、顔を赤化！

「あ……あたしは！ ……5位でも1位になつたと思い込みますつ！ それでいいんですつ……！」

はわわわ……。

自分は何を言つているんだろう？

更に顔を真っ赤にし、あたふたするミヤ。

そうしている間に、触手がエンゼクロスを掻い潜り、ミヤへと再び押し寄せる！

「しまつたつ……！」

ミヤは身体を縮こめる！

……だが、それじゃいけない。

皆戦っている。誰も助けに来る余裕はない。

自分がエスパー・キャンセラー装置を奪う為の活路・陽動となつて

いるから当然だ。

だから、自力で勝たなければならない！

仲間の為にも！ 祖父の為にも！

ミヤは大きく潤んだ瞳を、凜と開眼！

「エンゼクロスッ！」

エンゼクロスのツインアイカメラが発光！

ウイングハツチミサイルとリングミットを同時発射！

まずはミサイルを触手の群へ撃ち込み、威嚇混乱へ誘い、その隙にリングビットで破壊されなかつた触手を拘束！ 触手攻撃を封じた！

一気に畳み掛け、エンゼクロス本体は猛ダッシュ！

ゲノ・イーバーへ飛び込む！

……触手はもう動かせない。

無防備なゲノ・イーバー本体へと飛び込む！

「ぬぬ、こう来たか。だが、詰めが甘いよ孫娘さん！」

頭部ハツチが反転し、キャプチャーが出現。先端から紫電が駆ける！

ゲノ・イーバーは射撃手段もやはり用意していた。

……しかし、苦手なりにも1年みっちり訓練して来たミヤの敵ではない。

左右ジグザグに動き、敵の攻撃をすり抜けていく！

「ぐ、おのれ……」

ゲノ・イーバー、自分の攻撃を事なく回避する現状 焦燥に駆られる。

終いにはキャプチャーがビームアローに貫かれた！

この破壊により、キャプチャーの中＝内部メ力を露出させる。

もはや、チェックメイトまでのカウントダウンが迫つた状態。

エンゼクロスは小刻みよく、閃光の弓矢を連続で撃ち放つた！

…… 同時刻。 森林公園。

多勢に無勢の相手にそろそろ疲弊の色が見えていくレシュヴァリエとウイザースロット！

レシュヴァリエはキャリバー・ライフルモードのトリガーを絞つた！

数発発射！ 的確に3人のエスパーを0と1に分解！

そして、騎士TDの真横から攻め入る新たに4人のエスパーが！ 彼らは腕を剣やノコギリに変え、斬撃を試みる！

ヨシヒロはキャリバーをライフルモードにしているので、そのまま射撃で応戦しようと考える。

鉄鋼の指がトリガーを引く。 ……が、ビームの弾丸が放射されない……。

エネルギー切れである。

「んなっ！？ 参ったね、もうエネルギー切れか……。参ったね。もう手持ちのバッテリーは1～2本しか無いというのに……」

言葉の通り、ヨシヒロの手の中にはバッテリーが1～2本握られている……。

ウイザースロットも同様、両腕のバルカンがカラ吹き＝エネルギー一切れ。

そんな事お構いなしに、まだまだ沢山居るエスパー共が飛び掛る！

…… その時である。

崩壊していく……剣やノコギリと化したエスパー連中の腕が、戻っていく……鋼や鉱物のボディが人肌に……。

エスパーであつた人物達はこの突然現象に困惑。

「どうなつているんだ？」

「あれ？ もう一度やつているのに、腕が剣にならねえ」「混乱の泥沼に溺れるエスパー一同。 戦いどころではなくなった。きょとんとした顔で見合わせるヨシヒロとノリカ。

「これって、まさか……」

「やつたようだね。君の親友……」

2人はニカツと笑み合つ。

時を同じくして、港。

ヨシヒロ達側のエスパーと同様、能力が発動出来なくなつた事に違和感を覚え、悶える超能力者達の姿があつた。

「おっしゃ！ 鳳の奴、成功したようだな！」

廃工場壁の小さな穴から苦悩するエスパー勢の様子を確認する口ウスケ、「カツとガツツポーズをする！」

リモコン＝超能力沙遮断装置をD・r・毒島研究室内で、押し終わるエンゼクロス……。

ミヤは重い安堵の息を降ろした。任務を無事、全うした故に。「全エスパー」は能力を失い、「只の人」となつた……。

ぐつたり横たわるD・r・毒島。

彼の身体は無傷である。

どうやら、変身後のダメージを元の体に比例させないよう設計されたものようだ。

しかし、老体を使っての戦闘……。

相当くたびれたようで、暫く身体が動かぬほどの疲弊を持ったようだ。

「参つたよ……。やはり、罪滅ぼしもエゴだと、神に嘲笑されたか

……」

大の字に伏しているD・r・毒島へゆっくりと歩むミヤ。

「どういう意味です？ それ」

「私は金持ち生れのエリートで、順風満帆に生きてきた。しかし、相対的に自分より恵まれない人間を蹴落として来た……。歳を取つてようやく、彼らへ申し訳なく思つたのだよ」

「それで、恵まれない人達に超能力を……」

「そうだよ。だが、殴る側と殴られる側が代わつただけ。善行にはならんかったよ……。それでも、彼らが満足してくれるのなら……。」

と、思ったのだがね……」「

ミヤは黙り込んだ。

D-rの言葉に肯定も否定もし辛かつたからだ。

「えつと、ところで君、名前は何だったかね?」

「ミヤです……鳳ミヤ」

「ミヤ君か……。しかし、この作戦、君が企てたモノではないのだろ?」「

「はい。それが何か?」

「その人物と対面したかったものだ……」

そよ風のような失笑をD-r毒島は寝そべったまま、溢した。

縄で縛られた「元」エスパーの群集。

Lシユヴァリエらの手によって、拘束されたのだった。

大多数とはいえ、異能の力を失つた只の人間を捕らえる程度、T

Dには造作もなかつた。

例え、エネルギー消耗が激しい状態であつてもである。

04

ズシン、ズシンと鈍重な音を立て、鋼の巨人が歩き進む。その機影がある場所へゆつたりと歩んでいく。

その先……それは日本の大学でトップを誇る、大学の一つである。そのキャンパス内の人間達は突如襲来した巨大機影に恐れおののき、学内から逃げていく。

ベンチに座つて雑談に弾んでいる男子生徒2名のみを除いて……。

「……で、兄さんも選挙に出馬する事になつたのさ」

「菅田君のお兄さん、凄いなあ。尊敬しちゃうよ」

「いやあ、尊敬する程の事じやないよ。政治家家系の金・コネを有効活用しているだけだ。ま、僕も大学卒業したら兄さん同様、金とコネで色々と政治家コースだけどね」

「菅田君、羨ましいなあ」

「光井君、航空会社社長の息子の君がそれを言つかい？」

「言つよ。大企業だつて、何時潰れるか分からぬ御時世なんだし」「とか言いながら、沢山の資産はあるんだろ?」

ニヤケ顔で菅田は光井を肘で小突く。

「まあね。ぶつちやけ、ウチには働かなくても一生遊べる資産はあるかな? アハハハ!」

政治家一族の一人=菅田と、航空会社社長の息子=光井の、超お坊ちゃま2人がゲラゲラと笑い、手に握っている缶ジュースを飲もうとする。

が、この2人の背後に襲来する1つの巨大な影!

全長4メートルそこらの巨大なロボット1機と、その機体の肩に乗っかり、コントローラーらしきものを持つている人物を確認。

突如、巨大ロボットが来たという、とんでもない状態を目の当たりにし、ジュースを溢し、咄嗟にベンチから離脱する2人。

「うおあ!?

「口、ロボット!? こんなモン、ウチの工学部、造つてたつけ?」

「いや、流石に学生の立場で、こんな巨大な物を作るのは無理だよ

菅田君」

「じゃ、じゃあ、何これ?」

「教えてあげるですよお~ん!」

巨大ロボットの肩に乗り、コンローラーを持つ男……。ド派手なゴールドのリクルートスーツを身に纏つた胡散臭そうな男がいやらしく口を開く。

「こ~れぞ、私目の傑作、クラオカ丸ですよお~ん! お前らにはあ~、エスパー仲間解放の為にい~、人質になつて貰うのですよ~んだ!」

菅田と光井を覆う影が大きくなつていき……。

「うわあーつ!..」

エリート育ちの大学生・菅田と光井は巨大な鉄鋼の手に握り締め

られた！

「ぐふふのふう。私、エスパーの力を失いましたが、失うだういぶ
前からクラオカ丸を造つていたのですよお～ん。超能力でチャチャ
ーツとね！ でもつて、この大学の近くの廃墟にコイツを隠してお
いてたんですよ～ん！」

「エ、エスパー……？」

ハツと菅田は思い出した。

政府を襲撃したり、スポーツエリートに暴虐を加えようとしたり、
最近話題の厄介者。

エスパー テロ軍団の一昧。

しかも、ジャックしたテレビ映像に映つていた1人ではないか！
「そうか！ お前はジャックされたテレビで、えげつない紙芝居や
つてた奴！」

「そんの通りい～！ 私、倉岡と申します」

にたにたした顔で自己紹介する倉岡。

位置的に彼の顔は影となつており、一層不気味であつた。

「……にしても～。お前ら～。さつきの話、聴いちゃいましたよ～
ん。祖先の金で一生遊んで暮らせるとか、口ネで樂々就職とか、い
い御身分だよん……」

突如、何を言い出すんだこの人は？

クラオカ丸に握り締められた菅田と光井は怪訝な顔をする。

「わつたくしはねえ～、金持ちや世襲のエリートに対し、悔しい思
いをした事があるんですよねえ～。あ～、今思い起こすだけでも、
腹立たしいつたりやありやしませんよん！」

途端にクラオカ丸の肩に座っている倉岡は表情の読めない顔で、
立ち上がる。

「かー！ 「冗談じやないですよん！ 業績に大差無いのに、学歴工
リートや口ネ持ちの方が出世するんだよん！ こいつらも、社会に
出たら自分より不利な条件の奴を見下し、ずけずけと良い席座るの
かあよ～ん。あ～ヤダヤダッ！！ 私はねえ、純粹に努力して功績

を残した人は尊敬するよん。けど、優位に立つて功績残すのは許せないよおん！」

すると、いきなり菅田達へ倉岡は唾を吐き始めた！

「カーペペペ！ 唾ペペペのペー！ お前らなんか、唾塗れにしてやるもんねーだ！」

唾液の豪雨を顔に放射され続ける菅田と光井。

唾を掛けられて嬉しい人間など、普通は存在しない。

嫌悪100%を顔で表示する2人であった。

「うわ……。小学生でもこんな事しないぞ！」

「俺達があんたを蹴落とした訳じやないだろ！ 言い掛かりも大概にしてくれ！」

正論と言えば正論である。

力チンと来た倉岡は更に激昂する。

「何ですとお～！ わつきからずけずけとお～。立場全然分かってないよん！ お～前らな～んか、こここの校舎に顔を引きずらせてえ～、顔面崩壊させちやうよお～んだ！ 皮膚が抉られ捲くつた血塗れの顔……。たゞのしみですね～ん！」

クラオ力丸の2人を掴んで腕が上がっていく。

壁に引き摺られ、顔面皮膚が引ん剥かれ、血塗れのグロテスクな顔にさせられる……。

想像するだけで、おぞましい。極端に青褪める菅田と光井。

「うわあー！ 止めてくれーっ！」

「金なら幾らでもパパに出せせる！ それか、ウチの社員にして、好待遇な環境を与えるよー。だからー！」

恐怖の渦中……。裏返った声で抵抗を訴える菅田と光井！

「む～だ、無駄あ！ 私はねえ～、お前らなんかに飼い馴らされたくないんだよ～ん！ 寧ろ、お前らを支配するんだよ～ん！ 深大寺さんの分までお前らを討伐しちゃうモンね～だ！」

クラオ力丸、校舎の壁目掛け、2人を握った腕をスウイング！

が、その時……輝く一閃が駆けた！

電光の弾丸が横一列に並び、クラオカ丸の腕を通過！

菅田＆光井の握る手が切り離された！

更にややオールバツク氣味に髪を逆立てた青少年が、鋼鉄の巨大な手に捕らえられた2人を蹴り飛ばす。元々、ゴロゴロと転がつて行っているのだが、蹴りを入れる事で菅田と光井をこの場から、より遠ざけた。

倉岡は頭を搔き、ショックを受けた。

「ムキキのキー！ おんのれえ！」

クラオカ丸から降りた倉岡は鼻息を荒くし、歯軋りする。見やつたその先……。

破損跡のあるメタリックブルーのメインボディーが光の反射で輝く。

威風堂々とマグナムを向けたC.Oライオンが立ち構えていた！！
「お前は世襲エリートが嫌いだからな……。」ついった所へ来ると容易に予想出来た……

「むむ？ 人間の声？ まあさか……！」

真横から響いた声に、うねつた眉毛の顔を向けた倉岡。

両腕を組み、仁王立ちしたテットの姿がそこにあつた！！

「お前一人だけ、一度も確認出来なかつたからな……深大寺を倒した後、探してみたのさ」

「くうう……お見通しですかよん……。んんつ？ チミはそういうやどつかで……？」

脳内の記憶を逆再生していく倉岡。

……あつた！

以前、自分はこの男＝C.Oライオンの操縦者に相当する人物を勧誘していたのだった！

「ぬぬぬのぬー。星渡テツト君でしたか……。こんな事になるなら、踏ん張つて勧誘しておきや良かつたですよん……」

テツトはアンニコイなフェイスで、失笑。

「無理だな。他人の感情は戦略程度で制覇出来ん……」

苛立ち、歯軋りする倉岡は自慢の愛機、クラオカ丸の肩から飛び降りた。

「こうなつたら、勝負ですよん！」

「最初からそのつもりだ……」

……と、言った割に、何故か〇オライオンは消え、データとなつて、テツトのUボーデへと帰還される。

「ちょ！ 言つてる事とやつてる事が違いますよん！ お前、私を舐めてんのかですよん！」

テツト、スカした笑みを持つている……。

「戦うぞ……但し、相手は……」

テツトの持つUボーデからデータの信号が放出される。

何だ、一旦戻しただけか。

と、思われたが、違う……。

〇オライオンとは似てはいるが、異なるシルエット……。

そのシルエットが〇と一から、実体となつていく！

「こいつ、テンペストオライオンだ……」

【Tオライオン】……〇オライオン同様、メタリックブルー&ブラックグレーのボディカラー、クリアーブラックのセンサーパーツを持つ、後継機に該当する機体。

武装は従来のマグナムを強化した、三連銃・デルタマグナム。ショルダーには背中からバインダーが伸びており、その先にシールドライフル？がマントの如く、垂れ下がっている。頭部にイヤホンのような形の小型ピストルを装備。

更に、胸部は巻き付いているベルトライフルではなく、チヨツキのようにピストル2丁を左右対称に羽織ったような造形となつている。

脚部の折り畳み式ミドルライフルも、銃口を二連銃口＝ツインライフルとなり、総じてグレードアップされたTDである。

ムンクの叫びの如く、両頬を押し、絶叫する倉岡。

「ゲッゲッゲーッ！　ここに来てニコーマシンですかよん！　最悪だよんホント……」

テツトは自信たっぷりの顔でトオライオンに親指を向ける。

「こいつは俺「だけ」で作ったマシンだ。予備戦力及び、他人の手を借りたマシンを使いつぱなしというのが癪なので造つておいたモノだ。さて……お互い、自分の造つたマシンで勝負といこうじゃないか」

「な、成程……そういう演出ですかよん……。よくもまあ、造つたですよん」「

「丁寧に説明してやるよ。こいつ、Sボーダーは物体をデジタルデータにしたり、その逆も出来る。つまり、他の金属を取り込み、修復や製造が可能だ。その応用で、新たに作成した設計図を基にあらゆる金属を取り込み、新たなマシンを造つたという事だ」

余裕綽綽の顔で説明するテツト。

恐れ驚く倉岡は、思わず、1歩2歩、後ずさりする。

「ななな、なんつー裏技だよん。こいつ頭回り過ぎるよん。……けど、私負けませんよーん」

「勝負だつ！」

トオライオンとクラオカ丸＝テツトと倉岡の対峙……。

クラオカ丸、先手必勝と言わんばかりに突進！

トオライオン、操縦者同様、落ち着き払いながら、デルタマグナム、ツインレッグミドルライフル、ショルダーバインダーシールドライフルを一斉総射！

速攻！　クラオカ丸の片脚を滅砕！

まともに歩けなくした！

こちらの方が先手必勝をもぎ取つた！

「んげげのがーつー？」

倉岡、げつそりと青褪める。

……かと、思いきや、舌を出し、おどける。

「なんちやつてね！ 足なんか只のカッザリだよ〜ん！ ハイ、
フーット・パージ！」

もう片方の鋼鉄脚部を切り離し、その切り離された箇所からバー
ニアーが噴出！

クラオ力丸は飛翔した！

「ほう……」

「オライオン、射撃角度修正／上斜め30度。再度一斉総射！
同じ手は2度も喰らいませんよん！ おりや！」

今度は両腕をパージ！ 切り離された箇所にはキヤノン砲が！
「喰らえですよん！ はい、ポチッとドカーン！」

倉岡は勢い良くコントローラーのボタンを突いた！

クラオ力丸、上空よりアームキヤノン2問を発射！

熱光球がニューマシン・オライオンへと押し寄せる！

「うりや、うりや、うりやーっ！」

興奮しながら操作する倉岡。

止む事なき、連続ビーム球攻撃！

オライオンはデルタマグナム2丁を突き出し、1つの四角形を
3つの三角形に＝デルタマグナムの三連砲身を外側へ稼動させた！
そして、チタンシリバーの指がトリガーを絞る！
デルタマグナムの銃口より、無数の閃光弾丸が飛翔！
敵の攻撃を全て撃ち碎いた！

「ぬぬぬ〜、おんによれえ〜！」

脳から憤慨に包まれる倉岡は無造作にコントローラーを弄る！

クラオ力丸の胸部ハッチがオープン！

ガトリングが唸りを上げ、無数のミサイルが降り注ぐ！

「フツ、俺達に早撃ち勝負を挑むとは……。魅せてやれ！ オラ
イオン！」

テツトは余裕綽々のまま、オライオンを操る。

デルタマグナムを構え直す嵐の星狩人！

度重なる弾丸の激突！ 激しい銃声音・爆発音が空間を支配する…

…。

爆煙が晴天を汚す……。

「や、やつたかよん……？ とか言つちぢやつとやつてなかつたりするのかよん……？」

巨大な煙が邪魔をし、Tオライオンを確認出来ない倉岡は煙内中央を凝視。

時間の経過に連れ、爆煙は引いて行く……。

そこには悠然と立つ、無傷の新鋭オライオンの姿を確認してしまつた！

「んげつ！ あれだけ撃つて、ノノノ、ノーダメージッ！？」

驚愕！ 眼を疑う倉岡。

「違うな。全て撃ち落としたんだ……」

テツトは無表情で倉岡の間違つた解釈を訂正。

「おんによれえー！ こうなつたらあー！」

怒り狂う倉岡は新たな操作を実行！

クラオカ丸はTオライオン目掛け、急降下！

「はいー、自爆スイッチ・オーン！ こうなりや、道連れにしてやるよーん！」

クラオカ丸のコンデンサの色がグリーンからレッドへ変わる。自爆モードになつた！

Tオライオンは一步も動かず、待機……。

テツトは操作を一旦止め、沈黙する。

そうしている間に、Tオライオンの目前に自爆寸前のクラオカ丸が襲来！

そんな時だつた。

片方の三連銃・デルタマグナム外側砲身にある、3つのアーミーナイフが展開！

更に砲身がフレキシブルに広がつていき、実質、3つの爪＝デルタクロールとなる！

そのデルタクロールがクラオカ丸のアームを掴み……空中へ放り投

げる！

次いで、両手に握るデルタマグナム、ショルダーバインダー・シリードとレッグミドルライフル？をライフル展開！頭部イヤホン＆バストアーマーのピストルも銃口を向ける。

最後に額のゴーグルをツインアイにセット！確実に照準を定めた！

ターゲット……ロック、オン！

フィニッシュュを決めるべく、ネオ・オリオンショットが発進！

目標場所＝敵機全身にオリオン座を刻み、貫いた！

大爆散！！！

虚空にて、敵機クラオカ丸は跡形もなく散華した……。

画鋲に刺され、空気の抜けた風船の如く、表情がしおれしていく・萎えていく倉岡。

土下座体勢になる。

「ああ～、儂い夢だつたですよん……」

「ま、流石にやり過ぎだからな、お前らは」

土下座体勢の倉岡を見下ろす二つの影。

Ｔオライオンとテントである。

倉岡、体勢を変え、コンクリートへ座り込む。

「…………でもやつぱり、恵まれた奴か勝つなんて納得いかないよん……。正直裏切られた気分だよん。チミも実は恵まれし存在。TDなんてモンを造る環境に居たなんてねえ」

「俺は……まあ、スカウトされたようなものだ。Dｒ毒島を止めようとして半ばで死んだ科学者の孫から未完成のTDを作ってくれつてな。実質は殆ど俺がデザインし直したもので、Ｔオライオンに至つては完全自作だ」

「スカウトされた事は尊敬するよん。血筋だったら、ブン殴つてやるトコだつたよん」

テツトは両腕を組み、両眼を閉じた。

「……まあ確かに、環境・他者など、あらゆる方面で生まれながらの恵まれし者ばかりが、あらゆる頂点にのさぼるのは迷惑ではあるな。夢も希望もない……。ある連中が言っていた。『英才教育で幸福になるのは教育者・教育分野との相性が良かつた極一部だけで、相性の悪い英才教育を押し付けられた者や、英才教育を享受出来なかつた者を苦しめるだけ』だとな。これなら英才教育の無い中の競争の方がまだ気楽で、公平だ。敗北にも納得しやすいだろう。それか、本人がやりたい教育を全員に提供出来ればいいんだけどな」

「言えるよん……」

「……まあ、仮に英才教育を享受出来るエリートを皆殺しにしたとしよう。だが、そうしたら、また別の連中がエリートになるだけだ。……いつその事、全ての子供を親元から切り離し、施設で教育させれば、チャンスは平等になる。だが、今度は実施する期間と対象者の年齢における世代間格差が生じる。結局何やつても格差なんでもんは湧いてくる……。ムナクソ悪いがな……」

「そうかよん……。チミはかなり考へてているんだなあ」

倉岡は物憂げに橙へとなる空を見上げた。

「まあな……。生まれながらの恵まれし者を全員殺して良い社会になるのなら、とっくに殺しているわ……。ＴＤの力を手にしようとした時、考えたんだ。この力を何かしら有効活用出来るんじゃないかってな」

テツトは不条理・鬱憤を嘲笑う。

哀愁を加味するかのように、鴉の鳴き声が木靈する……。

「しかし、チミ自身は悔しくないのかよん？ 私は君を優秀な人間だと思う。だけど、社会に出たら金持ち・コネ持ちの連中より冷遇や搾取されるかもよん。君は私や深大寺さんと同じような結果があるかもだよん……」

「……そうかもしだんな。俺には今のところ誇れるものとして、口ボット開発がある……。それが、撃ち砕かれる事があるかもしだんな

……」

倉岡は真剣に、テツトの語りを聞き入る。

「だが……俺は恵まれた環境で優位に立つ、ズルして勝ったセコイ奴ら如きに負けたとは思わん！　俺の勝負も勝利も俺が勝手に決めるまでだ！」

テツト……彼は獰奇的で、勇猛な笑顔を惜しみなく示していた。彼はまだ社会に出てもなれば、最終学歴も決定していない。しかし、自分はエリートにはなれないだろうとは予想出来る。だからといって失望して生きていいくのも癪だ。

ならば、何にも屈しないでいよつ……。

他者程度の向かい風などに、揺らぐ事などないでいよつ……。全てを嘲笑い、己に誇りを持つ。

それが、星渡テツトなのである。

「皆、勝手にほざけばいいんだ……。自分の事をカッコイイだの、賢いだの。主張は自由さ。「不利な環境の割に自分はここまでやれた」と、胸張れる事だけあれば十分じゃないか」

テツトの溢した爽快な表情に呼応してか、気持ちのいい風がそつと吹く。

「そうかよん……。私、“チニみたいに生きてみたい”よん……」

倉岡はしけた面で溜め息し、重い腰を上げ、ゆっくりと立ち上がった。

「それじゃ、出頭でもしますかよん。どうせ逃げても無駄だし」

「そうか……。じゃあな……」

テツトはそう言い残し、夕暮れに消え去る倉岡を見送った。

その遠くでクラオカ丸の手に握られたままの菅田と光井。2人はそろそろ脱出したく思い、この場に居る唯一助けてくれそうな存在＝「オライオンの使い手へ声を上げる。

「あ、あのー！　すいませーん！」

「この声は……？」と、反応するテツト。

クラオカ丸の手部に握られたまま寝そべっている政治家一家の1員
＝菅田と航空会社社長の息子＝光井であった。未だに身動きの取れない彼ら。

そこへ、テツトとトオリオンが淡白に歩み寄る。

「あ！ 助けて下さい！」

「僕達、抜け出せないんです！」

「見れば分かる……」

テツトは冷然と現状の感想を呟いた。

「ですよね～。だから、助けてくださいよお～」

菅田が媚び詭うような口調で頼む。

しかし、テツトの顔に親切心的な柔軟さは微塵にも感じられない。

無言でUボーデを操作。威力微調整を開始。

トオリオンはデルタマグナム2丁を構え、菅田＆光井に銃口3

×2＝6門を向ける。

休む間も無き乱射！

自分達へ放たれた射撃の嵐＝テンペストに怯え、バイブレーシヨンといい勝負の震え行う菅田と光井であった。

「こ、ここに殺される……。

かと、思いきや、破壊されたのは自分らを拘束していた巨大ロボットの手のみであった。

「あ……。巨大ロボットの手を壊してくれたんだ……」

途端に気が抜ける2人。

風船が萎むかのように、緊張・恐怖が解き解されるのだった。

「な、なんだ、そうするんなら、最初から言つてくれれば……」

にやけながら、菅田と光井は上半身を起こす。

が、2人の額にトオリオンのデルタマグナム2丁の銃口がピタリと触れた。

「え……？」

硬い笑顔ながらも、焦燥・畏怖の汗を垂らす2人。

「あのー、拳銃、仕舞い忘れてますか……？」

「わざと仕舞つていなんだ」

テツトは高压的に向こうの勘違いを訂正した。

菅田と光井、無理のある笑顔を振るわせたまま、その意味を問うた。

「……そ、それはど、どどどういう意味でしょ、うが……」

「お前達は勘違いをしている。俺はエスパーが蹂躪する社会を潰すのが目的であつて、お前らエリートを救う為に戦つていた訳ではな、い……」

「オライオンの腕の向きが、移動し、トリガーが絞られた！」

轟音……銃声が轟く！

菅田と光井の間を三連ビーム弾×2が通過し、コンクリートに巨穴を穿つた！

奇声を発し、2人は腰を抜かした！

遂には小便までも漏らしてしまつ。

じわじわ湿る股間……。

20歳になつたばかりの彼らにとつてトラウマレベルの羞恥となつた。

「エスパーテロ発生の元凶は、お前ら生まれながらに恵まれし者だ
といふ事を忘れるな……。お前らは祖先の恩恵で生きる以上、妬ま
れる覚悟を背負わなくてはならない」

「は、はい～っ！」

「そ、そそその通りで御座りますっ！」

2人はバグつた口ボットの如く、何度も何度も身を振るわせ頷いた。

「だが……」

テツトは高い鼻を突き上げ、話を続ける。

「お前らが妬まれる覚悟を背負つても、妬まれる要素を破棄しても、
苦しめる敵が現われるなら……。迷惑なだけの存在があるなら、俺
がそいつを潰す」

放心状態。

菅田と光井は丸く口を開け、呆気に囚われた。

無音の空気が漂う……。

ようやく、デルタマグナムを腰ホルスターへ収納するトオリアイオ

ン。

テツトは愛機・トオリアイオンを回収し、それ以上何も言わず、夕陽へ消え入った……。

05

自首した倉岡ら以外＝深大寺らはしばらくの間、データ内で過ごし、改めて考えた結果、彼らも自首して刑務所生活を選んだ。

超能力を失った彼らは囚人としての生活を始めた。

テツトらはTDを自分らが所持・使用していると民間にバレるのは面倒だと考え、自分たちは直接警察へ通報しなかった。

自分達の素顔を見た人物全てには釘を刺しておき、口封じ。

当面は謎のヒーローポット・TDがエスパー・ロ組織を成敗したという事に落ち着くのであつた。

その後、テツトらはTDを操つて世襲や英才教育の撤廃＝チャンスの平等化を働きかける運動の協力を仰ぐ。

テレビ・インターネットを通してその旨を発信した。

……しかし、この程度の事で社会が良化するかは分からない。

何らかの効力があるかは疑わしい。

無駄かもしれない。

だが、何か一矢報いる事が出来るかもしねれない。

無駄じやないかもしねない。

どうせ世の中は不公平だ。

どうせ同じ結果を平等に与える事は出来ない。

だけど、競争自体はゆるやかになつてもいいハズだ。

英才教育という重荷ぐらいは破棄してもいいだろう。

少なくとも、英才教育をプレッシャーに感じ、苦しむ人・英才教育を受けられず、不利な状況の人間をなくせるだろう。

誰かが言ったように、気楽に・お遊び感覚の競争……。

青臭い事この上ない理想ではある。

だが、あるべき……かもしれない社会像への訴えに一役買えると思ひ、やらないよりマシな、「働きかけ」をしてみた……。

E
N
D

以上までで、話は一段落終ります。
ご感想・質問など、お待ちしています。

エスパー・テロ組織の野望を阻止したテツト達は日常へ戻る。
しかし、行き過ぎたこの時代の格差はなくなる事はない。

ある日、エリートお坊ちゃんの【辰巳ガセイ】がテツトの前に来る。
彼はT-D1つを高値で買い取り、エスパーから己の身を守った男である。

そんなガセイはテツトに提案する。

「若者が不遇なこの時代を変えるべく、上の世代を一掃しませんか？」

……
？」

プロローグ

深大寺率いるエスパー隊組織による、エスパー格差化計画は謎の大型ロボット・TD5機によって阻止された。

あれから1週間が経過。

そのTDを密かに遠隔操作していた高校生・テツト、ヨシヒロ、コウスケ、ノリカ、ミヤの5人はいつもの日常＝学生生活へと戻った。

「ああ……。イイなあ……」

「コウスケが教室の窓からうつとりとした表情で下＝グラウンドを見ていた。

「なうにがつ？」

ハキハキとした耳に残る声。

ノリカがドン、とコウスケの肩を叩き、コウスケの隣へ割り込んだ。

「うお、楠かよ……」

「何見ていたの？」

勢い良くコウスケの左側へやつて来たノリカとは反対にミヤがひょっこりと顔を突き出し、コウスケの右側へ立つ。

「んあ……。まあその、何つづーか……」

途端に頬を紅潮させるコウスケ。

ニタリと胡散臭い魔女のような笑みを浮かべるノリカ。ノリカに勘が働いた。

間違いないわ。好きな娘を見ていたのだ。と。

「ぶっちゃけな。誰に惚れてんの？」

「んなつ！？」

図星だつた為、思わずよろけるコウスケ。

「え？ そうなのノリカちゃん？」

「いやあ、このリアクションが何よりも証拠じゃん？ ま、あたしの勘に間違はないし。さあ、大人しくぶっちゃけな！ 誰？ 誰に見とれてたの？」

ノリカは顔を近づけ、尋問という猛進をした。

この勢いに圧倒され、コウスケは恥ずかしそうに・もじもじしながら面白する。

「今……。バトミントンやつてる…… 泉谷美野里さん……」

生きのイイ魚を釣り上げた開放感がノリカとミヤの脳を満たす。面白いものみ~つけたと言わんばかりに2人はにやける。

「へえ、泉谷さんかあ～」

ミヤはその泉谷美野里なる人物が居るとされるバトミントンコートへと目線を飛ばす。

細過ぎずも、太過ぎずもない健康的な身体に、外側へ撥ねたショートヘアの、少女。快活にラケットを振るい、スマッシュを決める。

実際に眩い笑顔だった……。

その姿は太陽光の如く、他者へ元気を与えるような印象があつた。

「あの子、バトミントン部なんだよね。別にエースって訳じゃないけど、部を明るくする元気な子つて聴くよね……」

ぽんやりと、ミヤは校内評判を呴いてみた。

「そうそう、あの笑顔がイイんだよなあ～」

「ふ～ん、確かあの子彼氏は居なかつたと思つけど……」

ピクリと耳を立て、コウスケは即座に首をノリカの方へ回す。

「何！？ 本当かそれ？」

ノリカは自信満々に鼻息を噴出し、親指を突き上げ、サムズアップ。

「モチ！ ノリカ様の情報網舐ないでよお～。この学校の同級生女子・全ての彼氏持ち云々は知つてんだから！」

「な、何故……？」

「コウスケとミヤは疑問で寒くなつた。

「……まあとにかく、このノリカ様に任せな！　あんたの恋、成就も玉碎もさせてやんよ！」

「ドン！　ノリカは両脚を大開きし、両腕を組む。

己が神と言わんばかりの上から目線態度だ。

「玉碎は勘弁してくれ……」

じとつとした目でコウスケは慎ましく訴えた。

そう、わいわい騒ぐ3人を遠くで大人びた目線で眺めているのが、イケメンと美男子の2人。

テツトとヨシヒロである。

「……だつてさ。ま、痛い目見なきやいいけど……」

ヨシヒロは軽く息を捨て、その場でサクッと宙返り。

「イケメンヒーローっ、宙返りっ！　……つとお」

テツトは両目を閉じ、両腕を組んで、冷笑。

「下らんな……。他人に幻想を持つなど……」

「へえ、ご尤もだねえ。でもそれは……他人そのものを信じるべきではないという事かな？」

ヨシヒロはわざとテツトと目線を合わせず、天井へ呟くように問いを口にした。

「……他人に任せるべき時は他人に任せるべきだ。だが、その場合他人が失敗する事を覚悟しなくてはならない。そして、他人の失敗を委託した人間が補うようにする……それが、巧いチームワークといつものだ。だからこそ、他人に依存・幻想を持つべきではない。その場合だと他人の失敗・自分の思い通りにならなかつた点を許せなくなる……」

「フッ、ナルホドね……。僕と楠さんの失態から相手を一気に畳み込むようにしたのも、そういう考え方から出たものなのかな。いや、参ったねえ！」

「……フツ……。頭の回る奴にしか勝利はないさ……」

「だといいけどねえ~」

ふと、テツトは窓の外へ視線を持つていく。

「……そう言えれば、【ヤツ】はどうなつたぢろうな?」

「ああ、?〇〇〇を買い取つた【彼】かあ。調べてみるかい?」

「……いや、調べるまでも無い。なーに、ふとヤツを思い出しだけや……」

晴天だった空が段々と淀んでいく

。

ここは西洋の何処かか？

いや、日本の敷地だ。

高貴な洋風の巨大な建造物　　ーそれは学校。

それも、有名私立ボンボン校に相当するソレである。そここの体育館。

平均的なものよりも、大きく無駄に綺麗な体育館内。

ヒュッ！

バスケットボールが緩やかな弧を描き、バスケットゴールの網を揺らし、通過。

「く……、くそ……」

歯を食い縛り、無念に短髪の男＝バスケットボール部一人の児島は顔いっぱいの汗を床に落とし、敗北を認めた。

田の前に居る、涼しい顔をして立っている少年に。

年齢は児島と同じの高2だが、年齢の割に童顔な部類。

しかし、背は175センチそこらで、幼い印象でもない。

その童顔美少年はクスリと唇を歪める。

「あ～あ、だから言つたじやないですか。僕と戦うと屈辱を味わうだけだつて……」

嘲笑をわざと堪えてやつていますよ。と、云わんばかりに胡散臭い笑い堪えを交え、この童顔男子高校生は膝を付き、雪辱に凍結した児島を見下ろす。

彼は児島とは対称にあまり汗を搔いていない。

よほど児島より上の実力でバスケ勝負に勝つたと、試合を見なかつた者でも分かる様子である。

「う～ん、僕、その気になればプロスポーツ選手になれる実力あるんですよねえ～。でも、スポーツ以外に取り柄のない人達が可哀想

だからスポーツは嗜み程度にしているんですよ。では、ここで失礼します。一度とスカウトも勝負も申し込まないで下さいね。無駄な時間取られたくないの』

トドメに鼻での笑い・一警を贈呈し、童顔美少年は体育館を後にした。

そして、広大な校舎内を歩んでいく。

途中、スーツ姿の中年男=本校教諭と遭遇。

「おお、辰巳君か。聴いたぞお、この前の試験全て最高点だつて？ いやあ、教師として鼻が高いよお～」

「いえいえ、僕は幼い頃から勉学・スポーツ・幻術においての英才教育を受けていた身ですから、この位の結果当然ですよ……。それではさよなら」

「おお…… サヨナラ」

テキパキと澄んだ声での物言いに思わず圧倒された教師はそのまま、【辰巳我正】を見送った。

「ふむ……。辰巳ガセイ……。世界を股に掛ける大企業の一族だけの事はある……か。成績優秀・スポーツ万能・爽やか美男子……。まさに完璧超人だな。彼は今まで何人に嫉妬された事だろつか？」
教諭が脳裏で呟くうちに、ガセイの姿は縮小。

関係者駐車場へと到着した。

「坊ちやま」

この時代の最も高級車であるとされるシユトラールという車前に20代前半そこらのメイドが淑然と待機しており、ガセイが到着するや否や、丁寧に挨拶をし、後部ドアを開け、ガセイを車内へ乗せた。

メイドはシートベルトをセットし、ハンドルを握った。

高級車=シユトラールは動き出し、この学園を後にした。

「坊ちやま、今日は如何でしたか？」

運転しながらメイドが後部座席で眠たそうな顔をしているガセイ

へ話題を振る。

ガセイは退屈そつな表情のまま口を動かす。

「いつも通りだよ……。あらゆるものに勝利する日常。まあこんな事恵まれた環境に居れば出来て当たり前。呼吸のよつに簡単な話です」

「そうですか……。そんな口々は退屈でいらっしゃいますか?」

「うん。そうですね。だけど……」

「だけど?」

「そろそろ、退屈では居られない事をやる時になりました……。そう、大革命です……。そうですよね?」

「は、はあ……」

意味がよく分からぬが、仕える主人の言葉。迎合しなくてはと頷いてみるメイド。

「アケミさん、貴方には言つていません。【彼】に言つたのです」
ガセイが問い合わせた先はメイドのアケミではなく、電子端末。
その電子端末。

それはSボーダーと全く同種のものであった。

こちらはシルバー&レッドのカラーリング。

テツト達5人の誰も所持していないタイプだ。

02

一方その頃。岩鉄高校では部活動を行う時間となっていた。

ノリカとミヤは家庭科部で菓子を作り、その菓子を食している。
料理の腕を磨きたいとか、真面目な理由はなく、ただ単にお菓子
が食べられるという理由をだけで入部したこの2人は残る部員と共にのんびりと所謂「スイーツタイム」を満喫していた。

コウスケの恋愛手助けをするとか言つて置きながら、それを忘れて……。

コウスケもその事は忘却していく、彼もサッカー部に勧んでいた。友、ヒデノリは自首し、刑務所へと離れた。

ヒデノリの居ない部活をココ最近は送っている。

正直、サッカーで秀である事など不可能である事は重々承知であるコウスケ。

ではあるが、退部したいとは思わなかつた。
別にヒデノリの分までやらなくてはと氣負つてゐる訳ではない。
ただ、サッカー 자체は好きなので続けたい。
それだけの理由であつた。

体育館舞台では演劇部が芝居衣装を身に纏い、演劇を行つてゐた。
物語はギャング強盗モノ。

ヨシヒロは強盗団の一員を演じる。

「僕、警察役が良かつたんだけどなあ～。でも、強盗役もいい経験。
まあいいや」

と、さつぱり決断し、ヨシヒロは体当たりで強盗を演じてゐる。
実際に楽しそうに演技をしてゐるヨシヒロ。

気楽に物事を考えられ、何事にも楽しむ。

「こういう人間が生きていいく上で得なかもしれない一例」であつた。

そしてテツトは「と、彼は実は技術部に一応所属してゐる。
理由としては部活に所属しておいた方が色々なロボット大会に出
場出来るし、他者と切磋琢磨出来るからである。

……しかし、本校の技術部は名ばかりの実質帰宅部のよつなもの
で、各自勝手に好きなマシン作りに励めという放任的な体制。

その為、テツトは今日部室へは足を運ばない。

鳳研究所でやりたい事があつたからだ。

テツトは通学鞄を肩へ回し、下駄箱へと向つてゐた。

その途中の通り道。

進路相談室がある。

そこで張り出されている求人票を閲覧している学生2人。スリッパの色が緑なので3年生と思しき2人が求人票を見終え、絶望的な溜め息を振り下ろす。

「あ～あ、何処もヒデエな」

「何処も激務薄給の上、採用枠マジ少ねー」

「やっぱ進学だよなあ。それも少しでも偏差値高めの」

「だな」

「……でも、どの道就職はしないとダメなんだけどな」

「嫌だなあ。俺、今大学4年で就職活動している姉ちゃんが居るんだけど、メツサ大変そうであ。もう百社ぐらい応募してんだけど内定1個しか貰えねえってさ。その1個の会社もな～んか、ヤバそうなトコらしいし」

「うわあ～。そういうの訊くと一生学生でいたくなるなあ」

「まあな。でも今思つたんだけど、今つて少子化じやん？ 何で就職の競争率、高けーんだろ？」

「！ 言われてみれば……。同年代の人間の数が少ないほど、ライバルが少なく、競争率下がりそつなになあ」

「上の世代が降りないだけさ。まだ働かないと生きていけなかつたりするからな。大人数の上の世代が席を譲ってくれないから、その分、若者の席が無い。それだけの話つすよ」

テツトは思わず、2人の会話に聞き入つて、ぼそっと話に割り込んだ。

高校3年生2人はテツトに注目。

「スリッパが青、お前2年かあ」

「ナルホド、上の世代がつつかえているのかあ。お前よく知つているなあ」

「知つておきたくない現実ではあるが……」

「それもそつだな」

3年からは苦い顔で失笑。

どうしようもない事なので、笑う以外無かったのである。

「話割り込んですんません。んじゃ……」

テツトは会釈にも届かぬ微小な頭下げをし、淡々と足を動かした。
物思いに漫りながら、テツトは歩む。

やはり、格差というものは付き纏うか。

英才教育撤廃を謳つても何も変わらなかつたこの世の中。
いや、この程度で何も変わらないのは分かつていて。
かといって、暴虐的な……テロ活動的に訴えても意味が無いと看
破している。

桁違の戦闘能力を誇るTDを駆使し、無理矢理力ずくで国民を
従わせたとしよう。

ある程度は従つたとしても、拒絶する存在は確実に出る。
英才教育の撤廃を突き詰めれば、家族破壊・全人類施設などで血
縁を完全別離した制度にし、教育機会完全均等化するしかない。
テツト自身はそういうシステムにしたいのは山々だが、従来の生
態系を大きく逸脱する事から、反対派が多数出ると予想。
結局、国民が受け入れなければ如何なる施策も無意味。
無意味な事はやつてもしょうがない。
だから、諦めるしかない。

……しかし、そつは言つても格差はあるより無いに越したことは
無い。

生まれ育つ環境も、世代間も……。

ダメモトでも何か出来ないだろうか？ と、考えるのを破棄まで
はしたくないテツトであった。

浮かない顔で歩んだ後、鳳研究所へ到着。

ここに鍵を所持しているのはテツトとミヤ。

ミヤは無論、親族ゆえの理由だが、テツトはここに開発設備が気に入った為、ミヤが

「別にいいよ。せっかくのお爺ちゃんの研究所、使ってあげて」と、予備鍵をテツトに譲渡。

以後、テツトは自由にコロへ出入りしている。室内に入り、一旦ジュークでも飲んで休憩でもしようとテツトは思った。

ピンポン！

妙なタイミングで鳴った呼び出し。

ヨシヒロかコウスケだらうか？

……いや違う。

2人はまだ部活の時間だ。

ノリカとミヤでもないだろう。

ミヤは鍵を持っているのだから、勝手に鍵を開けるだらう。俺がここで機械弄りに熱中していると承知している為、鍵を自分らで開けず、呼び出す可能性は極めて低い。

ならば、残る選択肢は……“アイツ”だ。
あまり会いたくないアイツ。

インターホン前へとテツトは少し歩む。

ゴクリ、と息を飲む。

これは恐れではない。

緊張と警戒。

それらを持ってピンポンを鳴らした人間とのコンタクトを図る。

「やあ、お久しぶりです」

サラサラな髪に幼さ残る顔立ち……。

超エリート学校・学応高等学校の制服を着た、如何にも育ちの良きそうなこの青少年。

それは。

「……辰巳ガセイ……」

「いやあ、助かりました。貴方が売つてくれたこの……」

スッとポケットより、シルバー&レッドのUボードを取り出すガセイ。

「TD?000、【リングドルムカイザー】をお陰でエスパーさん達からこの身を守れました。因みに彼らはきつーくお灸を据えさせた後、刑務所へ送りましたけど」

「そりが……。だが報告感謝しに来ただけではあるまい。用件を言え」

「察しがいいですねえ。……ではズバリお答えしましよう」

テツト、無言で田元を厳然と構える。

ガセイは一タリと口が裂けそつなほど、魔物の如く、唇を歪ませる。

「僕ら若者の敵、上の世代を一掃しませんか？」

「何……？」

テツトは驚愕に凍つた。

「それはつまり……勝ち逃げ既得権者や年金生活者をデータの世界へ送るという事か？」

「ご名答。彼らが存在し、席を譲らない限り、若者には不遇な未来しかありません。そう、つまり金持ち・エリート・庶民・バカ、どの若者にも共通する敵です」

黙考するテツト……。

立ち話も何なので、近場の喫茶店へと移る。

ガセイとテツトは同じテーブル席へ向かい合い座った。

「僕の奢りです。好きなものをどうぞ」

「カフェオレにでもしておくか」

「そうですか。では僕はアイスレモンティーを一つ。以上をお願いします」

「畏まりました」

ウエイトレスは注文メモを記入し、調理場へと去った。

注文の飲み物を待つ間となる。

ガセイはサラサラな揉み上げを指で巻いて遊び出す。

「いやあ～、不憫でならないんですね。僕の家系がやっている辰巳コンツェルンの若手社員が」

「大企業の社員……一般的に見ればいい御身分に思えるが……？」

「そうでもありませんよ。年々激務薄給となっています。ウチの会社だけじゃなく、どこの企業にも言える事です。それだけでなく、今のご時世での若者冷遇と来たらありません。採用枠を狭められ、就職そのものが、難しく、例えなれたとしても地獄の激務が待っている。これはよろしくありません……」

「成程。だから上の世代を一掃すると。……だが、貴様のようなエリート様には関係ない話じゃないのか？ 貴様の場合、辰巳コンツエルンを次いで、貴様の実力で樂々と業務をこなせるだらうに」「いいえ。僕一人が上手くいっても無意味です」

「どういう意味だ？」

「正直邪魔なんですよ……。爺様・父様らトップを牛耳る存在がね。屈辱なんですよ。いつまでも、祖先の支配下に置かれるのは……頭角を現せられないのはね」

ガセイは全指を交差させた手に口を隠し、不気味な笑みを交え、そう述べた。

「僕にはコンツェルンで働く兄や姉がいます。彼らは優秀ですが、その価値に見合った評価を受けていません。それが居た堪れないのです」

額に指をあて、悩まし気な所作をするガセイ。

やや大げさな素振にも見え、テントには胡散臭く思えた。

しかし、ガセイの云う事は一理ある。

現に不遇な若者は多く存在している。

「だからこそ、 “この” 技術がうつてつけなのです。…… そう、データコンバートシステム。人間をデータで造られた擬似空間へ転送・転換させるシステム。要するに無人島創つて移民させ、人口の均衡を測る訳ですね。如何です?」

「悪くない……と、言いたいが問題がある。どう世に促すかだ。受け入れさせるかだ……」

「問題ありませんよ。僕達の持つ…… 貴方が僕に売つてくれたTDがあればね」

「恐怖政治か？ それで巧くいけば苦労は無いが……」

皮肉めいた笑みでテツトは両腕を組む。

動じる事はなく、ふふふと、気品のある笑いを溢すガセイ。

「いいえ。もつと……別の手段ですよ」

余裕綽々。ガセイに渾身の策がある。

「ほう……。見せて貰おつか？」

ガセイの策を見物せんと、テツトは背もたれに背を預けた。

4

賢い奴は一度と同じ失敗はしない。
必ず対策を考えるものだ。

あらゆる業界の頂点に立つ存在なら尚更。

とある高級料亭にて、辰巳会長と城戸総理が豪華和料理を食しながら、重要な会話を行っていた。

「いやあ、総理。上手くいきましたなあ」

ほろ酔いしている総理は洒落たこの店専用のおちょこにある酒を啜つた。

「うむ。例のエスパー teleport の片棒を担いだDr.毒島……彼を逮捕し、彼の残したエスパー化プログラムを我々は入手した……。これで如

何なる敵が現われても悪阻るるの足りんだらう。一応はエスパー共の野望を潰してくれたあの謎のロボット・T.R.Oも我々世襲エリートをわざと甚振られるのを放置した……。100%我々の味方とは思えん」

「つむ。警戒するに越した事はありません」

「……しかし、幼稚ながらも試してみたくなるものだな……。己の身体に搭載した“超能力”を」

「ほお、総理はまだ使っていなかつたのですか。私は使っていますよ早速。歯車……いや、社員に渴を入れる為にね……」

「それは素晴らしい。特に若い奴はしぐくべきですかからなあ。あいつらは甘つたれている上に無能だからいかん。一日でも早く上の世代の為に身を粉にする歯車として完成されねば」

「当然ですとも。個性も感情もこの世に必要ない。ただ、ベルトコンベアーのように繰り返すだけでいいのだ。人生というのは……」

「ハハハツ、そうですねえ。ですが、辰巳会長、あなたの考えは少し狭量だ。歯車は若い男だ。そして……」

「若い女は愛玩奴隸……ですかな?」

皺の多い頬を笑いにより、更に皺を追加する辰巳会長。

その通りだ。と、云わんばかりに城戸総理は嬉しそうに首肯する。

【辰巳会長】……。

辰巳コンツェルン最高責任者にして、ガセイの祖父に相当する。年齢もとつぐに定年退職してもいい頃合なのだが、自分より下の人間があてにならない・権力放棄などしてはつまらない為、今も尚、居座り続けている。

【城戸総理】……。

総理とは言つても、数週間前に退陣して1政治家になつているが、愛称として総理と呼ばれている。

辰巳会長と城戸総理は学生時代からの仲で、互いが困った時助け合つて生きてきた盟友である。

世間一般として非合法な方法であつても助け合つて来た……。

彼らは居座り続けるつもりだ。

支配し続けるつもりだ。

自分より上がいない。下しかない。

この“イイご身分”は辞められない。気分が良い。

それに長年エリートとして生きて来た2人は自分より若い人間など、全てにおいて劣つて見える。

馬鹿にしてしまう・自分が作り上げてきた政権・企業を任せたくない。

故に、彼らは居座り続けるつもりだ。

5

夜7時ごろ。

多くの人間は適当にテレビを見ながら夕食を行う時間帯。

そう、日本各地の殆どが様々なチャンネルのうちから選んだ番組を暇潰しや、日課的な感覚で視聴している……ハズだつた。

その画面から唐突に“機械的な龍の咆哮”が響き渡つた！

多くの視聴者は夕飯を吐くなど、仰天する。

現在、この夜7時に龍の咆哮が聴こえるような番組などどの局も放送していない。

しようもないクイズ番組や歌番組・バラエティ番組しか存在しない。

そう、場違いなのである。

この龍の咆哮が。

日本全国のテレビ画面が鉄鋼の龍人に支配された。

メタリックレッドのメインボディに、ゴールドのアーマー装飾、ダークグレーのボディフレームを持つ、成人男性ほどの前兆を誇るこの機影。

「初めてまして。僕は未来の世界からやって来たロボット、【リンク・バウムカイザー】です。僕は歴史的に義務付けられた輝かしい未来

への導きをし「」へ光臨しました

何じゃ！」いや？

龍のロボット？ 特撮番組なんてこの時間帯にやつてないだろ？
……などと、困惑する視聴者達。

テレビ局は大荒れ。

ありゆる機器がジャックされ、放送中断状態とされている為、苦
惱の沼でもがくしかない状態。

そんな事など、無視し、某所スタジオをジャックした竜人型ＴＤ・
Ｒカライザーは流暢に電子音声を発した。

「皆さん、僕の仲間をご存知ですよね？ そう、エスパーテロリスト
の野望を打ち碎いたヒーロー、シオライオンをはじめとした5機
のＴＤです。僕はその同種に当ります」

「ちょ！ 何これー？」

晩飯を吹き飛ばし、向かいの父親へ吐いた飯を付着させてしまつ
たノリカはテレビへ急接近。まじまじと見入る。

同様にコウスケも目を疑つた。

「！」、ここには……

食卓へ箸を置き、食事を中断するヨシヒロ。

「Ｒカライザー……。（やはり、彼が……）」

ミヤは思わず、茶碗を手から滑り落としてしまつ。

「ビ、ビツヒテ……？」

「今の世の中って大変窮屈ですよね～。そう思いませんか、お爺
さん？」

Rカイザーが顔を向けた先へカメラは走る。

椅子に座った庶民的な服装・風貌の爺さんがそこに居た。

「そうじゃの〜」

「具体的な要因は何だと思いますか?」

「そうじゃの〜。一つは年金が少ない事かの〜。もう一つは孫が就職で苦労している事かの〜」

「それを解決手段……実はあるんです」

「ほお、それは何かの〜?」

「あなた方高齢者が別世界へ旅立つ事です。年金など必要としない樂園の世界へ……」

「何を戯言を。そんな世界ある訳……」

「ありますよ。まずは体験して見て下さい」

そう言つや否や、Rカイザーは鉄鋼で出来た獰猛な口を開き、口内のジエネレーターブレスキヤノンを爺さんへ直撃放射した！

強大な熱線に飲み込まれる爺さん。

この熱線を浴びた爺の身体が0と1に分解されていき、Rカイザーが投げた携帯電話のようなものへと吸い込まれていった。

これだけ見れば竜人型Tドが老人を殺害したかに見える。

だが、現実は違う……。

Rカイザーは器用に翁を吸い込んだ端末を操作し、端末の画面をテレビカメラへと近づけ向ける。

そこには先程消失したと思われた爺さんの姿があつた。

彼は旅館らしき場所におり、館内を徘徊している。
誰もいない。

困惑に包まれるが、これが竜人口ボットの云つた「樂園」なのか?
? と、判断し、マサージチエアーでくつろいで魅せる。

現実世界に居た時の不安そうな顔とはうつて違つて、開放感に満ちた表情をしている。

「ま、お試しさここまでにしておきますか……」

Rカイザーは端末機のある一つのスイッチを押し、端末機を横へ

向ける。

その端末機から光が放射され、0と1の人影が形成されていく。
その人影が段々と翁の姿となっていく。

突如の強制送還。

爺さんは尻餅ついてちょっとんとする。

」

「あ、あれ？ わしは誰もいない旅館でくつろいでおったのにこのお

「すいません。お試しだすからさつきのは……。で、ビーフでした？
さつき居た世界は？」

「いやあ、最高じゃッたよ。飯も食べ放題で、マジサーディニア

もある。至れり付くせりじやよ」

「気に入つてくれましたか」

「モチロンじやよー。あれがお主の言つておつた楽園でいいんかの
？」

「そうですよ？」

「お金は発生せんのんじやの？」

「モチロンです」

改めて驚きに震える爺。

こんなオイシイ話あつていいのか？

困惑に回る脳であつた。

そんなサンプル爺さんを放置し、Rカイザーはテレジヘと再度向

く。

「彼のように高齢者の皆様には年金生活を辞めて、こちらの世界で
自由に極楽生活して貰います。大移民です。そういう事で、若者の
就職座席の増加・年金負担破棄と、誰に取つても幸せな日本にしま
す。それをこれから開始しようつと思ひます。詳しい場所・日時はま
た後程お知らせします。では……」

光反射し、眩く誇張するメタリックレッドのボディを持つ、Rカ
イザーはそう言い残し、姿を消した。

実質、ガセイのSボードへデータ化帰還した。

日本全国が驚愕の嵐に包まれた。

テツトは自分の部屋に入室し、インカムを耳へ装着。これでヨシヒロ達と通信可能にする。

案の定、ヨシヒロ達の通信が来た。

「ちょ、これどーなつてんの?」

「何で辰巳ガセイが……。テツト、理由知つてんのか? ノリカ・コウスケからの通信。

「ああ、俺は今日奴と会つた。奴は今放送した内容の計画を俺に伝えた……」

「あのお坊ちやま、大胆な事するねえ~」

「あたし達はどうするの?」

ヨシヒロが咳き、ミヤハリーダー=テツトに今後の動向を尋ねる。「反響次第だ……。国民が許可肯定すれば、俺達はこの計画に加担するつもりだ。つまり、まだどうとも言えん」

「そつか……」

「まあ、大勢がそうしてくれって言つたらそつするかもだモンなあ

」

「細かい話はまた明日、学校でしよう」

テツトがそう纏め、4人は納得し、通信を切り、各自インカムを耳から外す。

眉を顰めるテツトは顎を摘み、思案に耽る。

「辰巳ガセイ……」

豪勢な洋館
辰巳家屋敷。

ワイングラスをカーペットへ投げ捨て、辰巳会長は憤慨する。

「何だこれは! ? ふざけた話だ! 姨捨山かつ! 」

メイドが「落ち着いて下さい、ご主人様」となだめながら、飛び散ったワイングラスの回収作業をする。

「おやおや、どうされましたお爺様?」

ひょっこりと不自然な程爽やかな笑顔を持つてガセイが祖父の部屋へと入室。

彼の後ろポケットにはUボーダーがある……。

「おお、我が孫ガセイよ。下らん戯言が公共電波に乗っていたのだよ」

「へえ、知りませんでした。僕、ずっと勉強していたもので……。

お爺様の会社で役立つ為に」

「おお！ 感動的な事を言つてくれる。しかし、今私は機嫌が悪い。勉強に戻りなさい。我が社の未来の担い手になるべく」

「ええ。お任せを……」

（よくもまあ、言えたものです。誰にも担わせないクセに……）
表情と内面で正反対の態度を取るガセイは祖父に礼をし、退出した。

わなわなと震える辰巳会長。

感情の高ぶりで、肩腕が白骨竜に一瞬変化し。

パタンとドアを閉め、ガセイは自分の部屋へ戻った。

「ふふふ、知つてますよ爺様。D-r毒島から奪つた薬品で肉体改造した事を……。樂しみです。爺様と戦うのが……」

ガセイは愛機が眠るシルバー＆レッドの端末＝Sボーダー？000を握り締め、空間をも歪ませそうな邪悪な笑顔を形成した！

新展開です。

新たなキャラクターを迎える、ストーリーはヒートアップします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0368z/>

ブロックバスターオンライン

2011年12月5日22時50分発行